



君貴道謙野將中軍陸



君紀資山權長部令々軍海



君福義島大將少軍陸



君太郎八木阪長權城赤

征清 日本軍人義勇傳目次

戰國將校

陸軍中將野津道貫君	………	一	丁
海軍中將磯山安紀君	………	二	丁
海軍中將伊東祐亨君	………	四	丁
陸軍少將大島義國君	………	七	丁
陸軍步兵大佐佐藤正君	………	十	丁
長岡陸軍步兵中佐	………	十五	丁
關島中佐	………	十六	丁
赤城艦長坂元八郎太君	………	十七	丁
陸軍步兵少佐中原勝君	………	二十	丁
故陸軍步兵大尉松崎重臣君	………	廿一	丁
故陸軍步兵大尉町田實義君	………	廿二	丁
故陸軍步兵大尉田上覺君	………	廿三	丁
陸軍步兵大尉若月曾一郎君	………	廿五	丁
故海軍大尉志摩清直君	………	全	丁
故海軍大尉永田廉平君	………	廿七	丁
故陸軍步兵大尉林久實君	………	廿九	丁
故陸軍騎兵大尉竹內盛雅君	………	三十	丁
陸軍步兵大尉野津鐵武君	………	卅二	丁

故陸軍砲兵大尉山本忠知君	………	卅二	丁
海軍軍醫大監河村豐洲君	………	卅四	丁
故陸軍步兵大尉金藤之明君	………	卅五	丁
故海軍大尉瀨之口覺四郎君	………	卅六	丁
陸軍步兵大尉桑木崇憲君	………	全	丁
海津 陸軍大尉	………	卅七	丁
故海軍大尉高橋義隆君	………	卅八	丁
陸軍步兵中尉三村幾太郎君	………	四十	丁
岡部瀧田二中尉	………	四十一	丁
故陸軍步兵中尉細井有願君	………	四十二	丁
河內陸軍步兵中尉	………	四十五	丁
陸軍步兵中尉富田七郎君	………	全	丁
故陸軍步兵中尉今井健君	………	四十六	丁
陸軍步兵中尉柄田盛次郎君	………	全	丁
故陸軍步兵中尉町口龍雄君	………	四十七	丁
陸軍步兵少尉桂武市君	………	四十八	丁
陸軍步兵少尉大森健之助君	………	全	丁
故陸軍騎兵少尉竹內英男君	………	四十九	丁
故海軍少尉伊藤滿盛紀君	………	五十	丁
後藤陸軍工兵少尉	………	五十二	丁
故海軍大軍醫三宅貞造君	………	全	丁

目次

(1)

故海軍少軍醫村越千代吉君……………五十三丁  
故海軍士官候補生樋口戸次郎君……………全丁

戦闘下士卒

陸軍備前兵曹長戸上滋蔵氏……………五十四丁  
陸軍歩兵軍曹川崎伊勢雄氏……………五十五丁  
稀世の勇士原田重吉氏……………五十七丁  
稀世の勇士藤田兼吉氏……………六十一丁  
陸軍騎兵東端林平氏……………六十二丁  
武勇の兵士梅原房吉氏……………六十四丁  
故宮下看護手……………六十五丁  
故田上水兵……………全丁  
本間水兵……………六十六丁

(附録)

義勇のかとで

中幸田中尉勇壯の首途……………六十九丁  
二見軍曹の義勇……………全丁  
大塚軍曹病を得て奮闘す……………七十丁  
義勇の一念病を治して出陣す……………七十一丁  
丈夫父の遺骸を残して出陣……………七十二丁  
忠臣孝子と母と主人……………七十三丁  
忠勇なる兄弟三人の従軍……………七十五丁

養父血を以て我子を勵ます……………七十八丁  
病夫万歳を唱へて出陣す……………七十九丁  
隊内の嚮導となる……………全丁  
先着第一の名譽者……………八十丁  
在外國の嚮導者……………八十一丁  
忠勇の子健氣の養母……………全丁  
我子の首途に楠公記を讀む……………八十三丁  
義勇の光り……………全丁  
祝言中の出陣……………八十四丁  
水陸兵士の義勇と勲功……………八十四丁  
一兵敵壘を抜く……………八十六丁  
屯田兵奮て出兵の令を待つ……………全丁  
愛親社員の義勇……………全丁  
流石と野津中將の母堂……………八十八丁  
追分り節を臨んで舟を漕ぐ……………全丁  
虎の族は即ち虎……………八十九丁  
軍人の妻和歌を詠して夫を勵ます……………九十丁  
烈女の靈……………九十一丁  
三宅海軍大軍醫未亡人……………全丁  
軍人の父愛女を看護婦となす……………全丁  
産婦隊房に在りて夫を勵ます……………九十二丁

壯話彙纂

征清 壯絶 日本軍人義勇傳

戦闘將校

陸軍中將野津道貫子

陸軍中將野津道貫子は我陸軍々官中有數の人に於て勲功世に優れたる事は人能く之を知る之を以て君の詳傳は暫く之を世の知るに任す日清開戦とあるや征清師團司令長官として戦地に出發し一戦平壤を乘取りたる大功も亦世人の已に知る所なり子の技倆として清兵脆弱の軍に當り勝を制するは固よりにして敢て怪しむに足らず又珍らしき事にもあらざれば敢て誇るべき事にもあらず然れども平壤攻撃の如き古來其例あり往昔小西行長等の苦戦以て其難易を知るべきなり蓋し平壤は地理天險の據るべきあり而して城壁堅固區域亦甚だ廣く亦堡壘加高北進軍に於ては大同江の險實に敵か守勢の金城鉄壁なり尋常等數の兵を以てせば攻撃に難くして守勢に易き事世に見難くらす況んや今回の戦に之彼れ清兵は殆ど我に倍するの兵力を以て之を守る豈容易に陥落し得へけんや而して子は一指揮の下に之を落す其功既に大なり、よし彼れ豚尾軍と我精銳なる帝國軍隊とは其強弱利鈍同日の論にあらざるを以て之を陥落する敢て難きにあらすとするも僅に一晝夜の短時日を以て乘取らんとは誰か思料し得へけんや然るに子は適當の作戦に因り諸軍を督志一齊四面攻撃をなし僅に



十時間にして之を陥れたり何者か其神速に驚かざらんや、よし彼れ豚尾軍は弱卒の集合あり而して兵員多しと雖も人心和せされは假令天險に據るも子か智勇の軍配と精銳義膽の軍隊とを以てせば之を陥落するに多數の時間を要せずとするも彼も亦歐洲流の武器を備へ險壁に據つて平進の我軍に見ゆ其激闘思ふへくして我攻勢の死傷は當に彼れ守勢の死傷に數倍せざるへからざりしや豈圖らんや我攻勢の死傷は彼の十分の一に當らす彼の死傷七千餘にして我僅に六百に過ぎず而して此他猶數百の生擒者あり何ぞ其アヘコエにして且死傷數懸隔の甚たしきや之を古今の史乘に徴するに未だ嘗てあらずる所の大勝利なり誠に強敵をして驚歎せしめたり斯の如き奇勝を奏したるは 大元帥陛下の威靈と軍隊の精銳義膽に因らすんはあらずと雖も子か非凡の才能と純忠にして智勇剛邁能く其職を盡し司令全く其當を得るに因らすんは如何ぞ此大勝を制すへけんや此一大勝利は清兵を畏縮せしむる大原因のみならず東洋の平和を保ち我帝國の武威を發揚する 大基大根たらざるなし嗚呼何ぞ其功の至大なるや吾人は猶今より子が猛進して鴨綠江に奉天府に破竹の勢を押し流して羽翼あるか如く北京城を乗取る大快と大功とを見る遠きにあらずるを信し筆頭に墨して之を待つ者なり又并せて征清凱旋の日子が恙なき勇装を見んことを祈るあり

### 海軍中將樺山資紀子

海軍中將樺山資紀子は海軍々令部長官として我聯合艦隊にあり黃海大孤山沖の大海戦に於て援群の大奇功を奏したり將軍は其手腕才能既に世の知る所にして敢て蛇足の傳記を要せず然るに特に今回の海戦に於ける將軍の勇膽は世の軍人をして舌を巻いて恐歎せしめたり其然る所以のもの他なし蓋し將軍始めより大海戦の準備なく西京丸に乗して而して猶他の堅牢輕快の軍艦に勝れたる大奇戦をなし敵艦をして膽を寒うらしめしにあり世人の知るか如く西京丸はもと商海の一漁船にして後ち擧げて軍艦となせしものなり船舳壯大なりと雖も軍艦として固より遺憾なき構造にあらず而して黃海上敵の艦隊に逢ひ開戦となるや西京其艦舳の大なるを以て敵艦は認めて主戦艦となし最も激烈に最も多數の砲門を築めて發砲し砲丸大小雨の如くアハヤ西京は粉碎せられんとするの有様なりしも將軍は甲板にありて神色自若毅然として意となさず大聲令を下し敵の數艦に對して奮闘聊か屈する色なし 戦已に酣にして砲聲天を碎き彼我の艦隊は遂に如何なる慘酷の狀を呈するやを知るへからざるの時と際し敵の一大砲丸の轟然西京の舳を破れり西京は爲に進退運動の自由を欠き意の如き戦を爲すへからざるを以て隊列外に出てんとし敵の艦隊に向つて猛然突進す敵は益激烈の砲彈を放ち我も亦之に應戦し敵國第一と稱せらるゝ甲鉄艦定遠鎮遠の間を乗り抜かんとせり敵艦は西京の突進して堅牢壯大山の如き連隊艦の間に乗り入るゝ勇猛剛膽鬼神も當る能はざる勢に辟易して西京の通路を開きしも左右に挟みたる敵艦は愈々激烈に狙撃するにも拘らず西京は悠然として敵艦を呑み應撃敵次遂に砲丸雨注の間を乗り抜きたり斯の如き暴動の歐人の海軍戦術に熟達したる者をして堅牢輕快遺憾なき良軍艦に乘らしむるも容易に爲し能はざる所是れ獨り海戦技術的腕前の巧妙のみに因るにあらずして學んで得へからざる剛膽勇猛當るべからざる氣象の致す所なり而して西京は此大難關を手もなく乗り抜きたるも未だ安然の位置に在らず敵艦は見る間に水雷艦を發射する事三回一は距離近きに過ぎて船底を空過し二も亦難なく之を避け三は當に西京に命中をへかりし方向進度に適したるも西京は一砲丸以て之を擊留めたり若し其一か西京の艦尾にだも觸

れしならば如何ありしならん百挫激騰の海水と共に粉碎せらるゝは云ふまでもなかりしに西京か非常の勇進に辟易したる敵艦は狼狽して發射其中を得ざりし大壯快吾人は殆ど手の舞足の踐む所を知らず此千古無比の大快戦を爲し目に餘る敵艦を驅け惱まし難なく根據地に引上げたる西京丸は誰か之を指揮し誰か其主戦者たりしか云はずして樺山軍令部長其人たるを知る嗚呼今古万国海戦に奇功を奏し戦術を以て名を得たる者實に其人に乏しからず然れども將軍か如き大奇勳大快戦を以て古今稀なる奇勝を奏したる者あるを聞かす東西軍人舌を巻て歎賞する豈宜ならずや吾人は我國に斯の如き稀代の勇將を出せるを喜ひ永く其勳功を仰ぎて忘るべからざるなり噫

### 海軍中將伊東祐亨君

海軍中將伊東祐亨君は聯合艦隊司令長官として今回の黄海大海戦に一大偉功を奏せられたり吾々國民は感泣將軍の勞を謝し永く其偉勳を仰がざるべからず抑も將軍は司令長官として松島艦に搭し本隊（松島、千代田、嚴島、橋立、比叡、扶桑）及び第一遊撃隊（吉野、高千穂、秋津洲、浪花）と後備隊（赤城、西京）とを卒ひ總計十二艦を督して黄海に臨めり而して敵艦は其數我より多く且海戦に遺憾なかるへき程の水雷艇をも有したり然るに一たび砲聲を聞くに至て我艦隊の戦闘線列は毅然として動のす愈激烈となるに至て一隊直線に敵の艦隊を横斷し兩側に敵を擁して砲撃せしめたるか如きは其大膽人をして驚愕に堪さらしむ戦意酣なるに至て流石に敵の砲丸は宛ら雨の如く對等の技倆ある軍人なりしならば我艦隊はさんくりに打すくめられ多くは沈没を免かれざるへき程の勢なりしも我艦隊の勇猛ある之を物の數ともせず進むを知て退くを知らず彼れ

隊を分ては我れ機に應じて之を撃ち合すれば又合し泰然として餘力あり遂に彼をして隊を乱し三々五々或は燒き或は沈ましめし操縦の機敏なりし事驚くへし是れ各艦將校水夫の勇武絶倫ありしに因るといふと雖ども司令長官其人の指揮宜しきを得驍勇猛武なるにあらざれば能はず此大激戦殊に清國屈指の軍艦に當り彼をして殆ど小片微塵の敗を取らしめ我に多少の損傷を見るも一の沈没燒盡艦なかりし奇絶の大勝利は古來何の戦にか之を徵するを得んや而して特に將軍か旗艦として乗込みたる松島の 働如何ありしぞ吾人は將軍の大功を記するか爲には勢之を記さるべからず

抑も松島は諸艦と共に獅子奮迅の勢を以て攻撃し敵の二三艦を撃沈め或は火災を起さしめ敵はむらく隊崩れ逃足附たる折柄彼の鎮遠定遠の二艦は猶屈せず戦ふものから我砲口は多く此二艦に向て發射するも流石の一尺以上の厚みある鋼鉄艦なれば小砲は中々打貫く能はず空しく艦外に破裂する崩甲斐さを見るや松島の橋立と共に口径三十センチメートルの大砲を以て此二艦を狙撃せしに果せる哉定遠の艦腹に大なる穴を穿つて我砲丸を射込み是より内部に火災を起さしめ一團の黒煙濛々として湧起せしかは松島艦上の我將校兵士は手の舞足の踏みぞを忘れて雀躍しつゝ天地に轟く鯨波の聲を揚げたりけり、さるに敵の軍艦は此勝鯨波を心懸しと思ひしか將た松島の旗艦なるを知りたるか周囲の敵艦悉く松島目かけて砲丸雨注したりしかば松島は敵の數艦を相手に目醒ましき働きを爲せりと雖ども如何せん不幸第四番砲の砲身に打ち當てられ砲は撓みて「へ」の字なりとなり次に亦第二の砲丸次砲との間に落ち小出しの火薬爲めに發火し第三分隊は僅かに三人を餘し悉く粉微塵となつて頭體手足を異にしなから空中さして飛び散れるを憶はしくも又残念なる茲に最も

特筆大書して滿天下に知らしむ可き一事ありは何ぞ他にあらず我が勇敢なる松島の水兵等が火薬の爆裂にて手足眞黒に焼け爛れながらも猶勇敢進むと知つて退くを知らず殊死して其火を消し留めし爲り松島遂に大破に至らず而も是等の水夫等は火滅して「松島無事」との報知を耳にするや否やいと安心の體にてとうと其場に倒れし儘此一言を眞土の土産に溘然として不歸の鬼となりたるは是を世界各國に求めて亦得難しと云はざるへからず余は今茲に我水兵の忠勇義膽天下に敵なきを誇りなからも氣沮み神慄と云はんと欲して云ふ能はず奮んと欲して奮く能はざるものあり奮かか此慘狀滿天下に傳へざる可らず奮のさらんか如何に我が松島艦の奮戦激闘したりしかを滿天下に紹介するに由なければ思ひ切つて直筆せん直筆す可きもの何者ぞ他なし松島艦上の腕足首胴體臟腑の片々は是れなり敵の屍體さへ是を見て快よく思はぬに況んや我四千萬の同胞に代つて勇敢に戦へるもの、最期が此有様ありしかを思ひ来れば噫止みなんく余は奮くに忍びざるなり否奮くに堪へざるなり無論は誰の手某の足と見極め付く事にあらざれば人々皆目を眠つて所々の手足を拾ひながらも海中さして投げ込み終り負傷者は夫れく士官室艦長室に運び入れて手厚く介抱を爲したりけり、松島の斯く砲撃せられて火災起るや次に進める秋津洲艦は斯くも見て直ちに代つて艦隊を號令せんとせしも「松島は大丈夫なり我艦猶指揮せん」とて戦闘中は旗艦を辞せず斯くて敵艦我砲撃に堪へ兼ねて將に遁走せんとするに及んで伊東司令長官の大禮服を抱きつゝ松島の甲板に顯これ出て「松島は歸れ三週間に修繕を遂けて再び来れ」と云ひ放て橋立號に乗移れり是に於て橋立號は旗艦とありて遂に此大激海戦を終了したり嗚呼此松島の眞に我帝國の松島なり伊東司令長官の剛勇敢爲誠に拜すへし

然り而して此勇將は如何なる閥歴あるの人ぞ曰く元薩の藩士にして現任貴族院議員豫備海軍中將伊東祐磨氏の實弟あり文久年間英艦來りて薩海を砲撃するや君は深く海軍の必要を認め將來海軍に身を托せんと欲し薩の英學校なる開成所に入り屹々業を修む時に阿波の一書生漂泊して薩摩に來る頗る海外の事情に通ず君即ち之を自宅に延き日夕勉學怠らず當時の落魄書生は則ち今の司法大臣芳川顯正君なり後又私に藩を脱し江戸に入り四方有志の徒と交る此時に當て幕府大に君等を物色するも得ず一夕君は品川の妓樓に遊ぶ豫め捕吏の來らんことを慮り蒲團の下に長劍の抜身を布き而して一睡するや果して五六の捕吏闖入するに會す君等驟起大喝し蒲團の下より長劍を取り出し空に向て一揮しつゝ血路を開いて逃る後三四の士と紅葉山なる幕府の金庫を襲ひ去て米國に遊ぶ維新の際赦されて歸國し兩館の海戦以來海軍に従事して今日の地位に至る平生職務に勉強し其司令長官の職にあるや時々深夜に突然艦隊を點呼し各艦を巡視する如きは壯年將校も其熱心を推すと云ふ

### 陸軍少將大島義昌君

朝鮮事件勃興し我軍隊を派韓せらるゝや第一に其命を受け第一に渡韓したる者は誰ぞ實に我陸軍歩兵第九旅團長陸軍少將從四位勳三等大島義昌君にあらずや君は第五師團に隸屬せる混成旅團長として渡韓せらるゝ劈頭軍隊上陸の神速なりしと京城占領の敏活なりしを以て世の賞賛を博したり既に朝鮮京城に入り韓廷より我に向て牙山清兵追逐を托せらるゝに至るまで其手腕筋骨の如何に力らばつみたるを察すへし而して大院君入京に際して韓兵の阻碍あるや一撃以て韓人を驚かめ韓人をして韓兵を評する蟻螂を以てするに至れり

是れ戦とするに足らざれども砲第一の聲を聞きし首途の血祭なりし、一度兵を成敗牙山に進むるに至て一撃之を粉盡したる手際の如き傲満極りなき敵人をして一驚を喫せしめたり其勇猛偉武今敢て云ふに及はず此れや是れ日清開戦の第一着手にして韓人を威服し清兵を慄はしめ其京城に凱旋するや韓王使を以て之を迎ひ日韓國民大歡辭を放つて潮の沸くか如く歡迎したる光景は實に君が偉大の勳功絶大の名譽を造出せしめたるあり

是より清國は大に兵を發して平壤を扼し將に京城に迫らんとせり我師團の本隊左右翼及び元山湖寧兩支隊を以て平壤を攻撃し一舉豚尾軍を殲殺せんとするや君混成旅團に將として中和赤屯を経て地境洞に進み平壤の第一着 正面攻撃の大任に當れり此戦は平壤攻撃中の最も難衝にして最も苦戦し最も奮闘し君をして更に一層の武威と名譽とを擡はしめし快絶妙絶の戦なりしなり而して君か平生の手腕を以て如何に敢勇猛烈に又如何に苦戦したるやを記して世に傳ふるは吾人の義務にまて又君の勞を謝し恩に報ゆる所以なり乞ふ下を一讀せよ

此快戦の地を何れとぞ即ち平壤正面の附守中最も堅と聞へたる船橋里の敵壘是なり九月十五日は豫て期したる我軍總攻撃の期日なり君は正面攻撃の難衝に當りて他の方面の進軍に容易なるだけ苦戦の度を増さるへからず君元より之を覺悟し其部下に屬する各將校も亦豫じり期する所なり去れば其全旅團を三隊に分ち中軍は第二十一聯隊長陸軍中佐武田秀山氏之を率ひ左翼隊は第二十二聯隊長陸軍少佐奥山義章氏之を率ひ右翼隊は第十一聯隊長陸軍中佐西島助義氏之に將たり何れも聞ゆる猛將あるに之を總督するは實に君に

して參謀長岡中佐の如きは智謀勇武兼備の傑傑あり苦戦の境に臨みて大功を奏するは皆最も望む所軍若し勝たずんば唯だ一死以て君國に殉せんと欲す主將既に然り部下の士卒誰かは勇まざらん皆義を泰山より重んじ死を鴻毛よりも輕んせざる者なし而して此日君は命を全軍に傳へ進撃の喇叭は曉々として未だ明けざる曉の霞を破り全軍進みて船橋里の敵壘を抜かんと欲し漸やく近づきて一齊に砲撃を始むれば彼方も元より期したりと見ぬ直ちに激しく應戦し忽ちにして砲烟は漠々として天地を罩め銃聲轟々として山河を撼かし唖喊の聲は又た之に和し九天も爲に震ひ地軸も爲に避けんかと怪しむばかり踏ふるゝ者は屍を乗り越へ傷つく者は扶けて代り互に激しく砲撃し兩軍近く接戦するや死屍は積んで丘を爲し血は流れて泉の如く就中我第二十一聯隊第一大隊に屬する第二第四の兩中隊は最も烈しく戦ひければ指揮の士官は盡とく戦死するに至れり然れども死あるを知つて生歸を期せざる勇猛無双の我軍は争かでか蹴躑せん前後左右互に勵まし「死ねや進め」と叫ひつゝ獅子奮迅の勇を顯はし屈せず撓まず突進しければ敵も其勢はひに避易し遂に第一壘を棄て走り我が大隊旗の早くも其上に樹てられたり我が軍已に敵の第一壘に據る敵軍との距離益々近しイデア此勢ひに乗して自餘の敵壘を乗取るべしとて又もや面も振らず突進す敵壘の下に迫りしも敵の撃ち出すモーセル銃の彈丸雨霰も雷あらず特に敵壘高くして殆んど面を向くべきやうなれば矢竹に逸る我が軍も近づき兼ね遂かに退かんとす敵は此機を外すこと勿れと潮の湧くが如くに突進し來れば我が軍の苦戦彌々甚だしく中軍の二中隊の如きは全隊擧つて一彈丸を剩さるに至れり君は督て成敵の役に敵の潰兵を追撃せしめて遂に敵をして大同江を扼さしめしめて世上兵機を知らぬ人々より諸種の非難を蒙りしかば心に討死を期せりと聞ひし

が其れかあらぬか常々馬を陣前に進め我軍將士に敗れんとする眞際には前哨兵を距る僅か又七十メートルの地まで進み大聲大喝して縦横に指揮せしが我軍彌上總崩れとならんとするや君は「一死皇恩に報するは此時なるぞ引くな」と激しく下知し尙ほ四十メートルを進みて聯隊旗の下に突立ち彈丸雨の如き間を物とせざれば西島中佐長岡參謀等は其の危窘迫るを諒めて速かに退かんことを勧めしに君は之を叱し「唯だ聯隊旗の下に跪れんのみ」とて益々勇を鼓して指揮せしうは面のあたり斯くも見ると見ると將士等争てか奮興せざらんや勇將の下に弱卒なく孰れも必死と覺悟して一步も引かず尙ほ喊聲高く奮進し鬼神も避くべく勇戦せしかば竟に敗を轉して勝と爲し潮の沸くが如く突貫し來る敵軍をば其舊地位まで退却せしめたるも勇ましき此正面攻撃は平壤に達する迄は大小實に四十個に近き堡壘を抜かざるへからず君は斯の如き猛烈の勢を以て敵壘の大半を抜きたれども最終の堡壘を抜くに際しては最も苦戦を極めたるものにして八進して又八退したりといふ蓋是れ正面は敵の全力を集むる所にして我の作戦も亦斯くせしむる牽制法に出ればなり然れども敢勇極りかき君は遂に難局に乗り非常なる苦戦を以て敵を牽制し各隊を去て思ふ儘に豫定の戦畧を實行せしむるの任務を盡したりたり而して君は實に此最終の激戦に於て敵彈を受け腋下を負傷せられたり去れど差したることにも非ざれば始終其の立脚地を動かさざりしと云ふ此激戦は味爽より息をも續かず午後二時過ぎに至り其間殆んど十時間に涉れり去れば敵も味方も共に疲れ且つ元山其他各道の我が軍も一先づ攻撃を中止せしかは我軍は各々散兵退却の命を傳へて休戦せり

此日我が混成旅團が斯く苦戦に遭遇せしは豫じり期する所なりしとは云ひ彈丸を發射し盡して全く盡き砲撃

を止むるまでの苦戦に沈みたるは尙此他に原因をなす者あるなり他なし我砲兵の功少かりし事はなり語を換ふれば我砲兵の陣地とすべしの高地なかりしに由る故を以て遙か後方なる我砲兵の砲丸は下四五百米突の地に達すれども嘗て敵壘に至らず之に反し清兵は野戦砲を用ひたれば其砲丸は飛んで能く我縦列に及びしと云ふ堡壘要塞の攻撃は大砲に依るにあらざれば其効果を見ること少なし況んや敵軍の精銳を集めたる堡壘に於てをや其の攻撃の衝に當れる君が苦戦の情察すべきなり

君は斯の如く大苦戦し多くの兵勇を失ひしも其勇氣は更に幾倍せり又此苦戦に負傷したりしも其剛毅は更に幾倍せり而して平壤全く陥落して帝國萬歳を唱へし時君が胸中の爽快實に如何ありきならん平壤既に平き我軍追撃義州方面に向て進軍するや混成旅團は君の次官代て一時之を率ひて出發し君は微少なからも負傷したれば万斤の鐵を呑んで之を療養せざるへからざるに至れり當日平壤方面の戦に負傷せし我將校下士卒には特に懇篤なる療養を加へしむべしと野津師團長の頻りに主張せし所あり茲を以て君を始め各將校及以下士卒等は悉く之れを日本に歸航せしめ負傷全治の上を以て再び從軍せしむべき旨を諭されたるに依り各將校は心ならずも戦地を後よして歸朝の途に上ることとなり然るに君は其創痕至て微少なにも係らず歸朝を命せらるゝに至りたるは千載の遺憾なりと憤慨措く能はず野津中將に向て曰く「若し小官にして過失あらば明かに之れを指示せられたし然るときと小官も亦決する所あらん徒らに微々たる負傷の爲め歸朝するは義昌の本意に非ざるなり」と野津中將其容易に動す可からざるを見笑て之れに答へて曰く「敢て過失に依て歸朝せしむるに非ず實に負傷者を優遇するに出つ足下乞ふ愛ふる勿れ若し強て歸朝を欲せずんば平壤に在て療養



を加ふる亦た可ならんのみ」と茲に於て君は終に留りて平壤に在り目下飄りに負傷療養を加へ居ると云ふ以て君の勇膽義魂人に卓絶したるを知るべし君若し此微傷を負はざりしならば第三陸戦に第一先登愈功を積み清國をして日本に大島あるを知らしむるあるへきに進軍に後れたる君の胸中察すへし然れども君の創傷は早已に癒ゆべければ第三勇戦を見る遠きにあらざるへし嗚呼天何る此大有勳の勇將をして早く創傷を癒へしめざる

### 陸軍歩兵大佐佐藤正君

平壤の役は清兵如何に其強を築るも又如何に精銳の武器を備ふるも四面攻撃の作戦を執れる我に於ては恰も囊の鼠を捉るが如く隊尾兵陣中に狂ひ廻り窮鼠却て猫を噛むの勢をなして潰走せんとしたり故に其先を争ふて逃げ行く鋒先きは大水の堤防を決潰するの勢ありき斬着の豊橋兵は此勢ひ込んだる潰走兵を壓殺するの衝に當りたり而して英氣勃々たる勇兵は此名譽ある大任を受くるも適當なりき此勇兵の將を誰とかする實に豊橋成歩兵第十八聯隊長陸軍歩兵大佐佐藤正君其人なり君は如何なる閱歴ある人を曰く廣島縣平民にして嘉永二年六月を以て生る性來膽勇自ら備り馳名夙に著る明治五年一月半隊長心得にて東京鎮臺へ召集同年二月陸軍歩兵少尉に任してより速りに累遷して九年七月遂に陸軍歩兵大尉に進む十一月六日山口縣の反徒征討として出張同月十九日平定歸隊す十年西南の役起るや三月逆賊征討として出張別働第一旅團に加り薩摩大隅日向肥後の間に轉戦奮闘せり君一日出て偵察し敵兵に會ひて戦ひ食せざるや終日疲頓して路に仆る一卒あり生雞一羽を得て來り君に與ふ君其生肉を喫ひこと多少、莞爾として身を起して曰く「是

は妙なり又動けるは」と復た進て敵に當れりといふ驍勇知るべき半定後勇ましく歸隊し十一年一月學術傳習のため戸山學校に入り刻苦兵術を修む同年六月勳五等に叙し年金百二十圓を下賜せらる蓋し西南の役の功に因る十四年三月陸軍歩兵少佐に進み第一聯隊第三大隊長に補す同年四月從六位に叙し十五年三月大阪鎮臺參謀を命せられ十七年十一月勳四等に叙し同年十二月仙臺鎮臺參謀に補せらる十九年五月陸軍歩兵中佐に進み同年七月正六位に叙す廿二年十二月第十二旅團臨時軍法會議判士長を命せられ後廿四年十月歩兵第十八聯隊長となりて三河の豊橋衛戍に來れり廿五年七月從五位に叙し同年十一月遂に陸軍歩兵大佐に任し廿六年十一月勳三等叙せらるる今回の日清戦起るや八月廿四日部下を率ひて勇躍雞林の野に出征したり君の得意知るへし

此驍名ある君は渡韓直ちに元山津に上陸したり元山枝隊とは即ち君の率ゐる所なり君心に期すらく第五師團の兵は城に成歡に勝ちて大に面目を施きたり今度こそは我が第三師團兵は始めて清兵と鋒を交ゆるものなり況や今回も第五師團の兵は本道より及び朔寧より各部署を分ちて進軍せり若し我兵にして一步も後れを取るあらば一には帝國の躰面を汚すは勿論又我三師團の躰面を汚すや大なり吾若し敗れて一步も退くことあらば何の面目を以て第五師團の兵に見ゆんやと部下他の將士も亦同一の心ありしといふ故に將卒とも決心最も固く若し敵を破りて目的の地歩を占むるを得ずんば皆必死を期したるものたるや明なり而して君は此決死の兵を率て如何なる難路を経て如何なる快戦をなせしか吾人は之を大筆せざるへからず君か率ゆる元山枝隊の先づ元山を發して陽徳を経、成川に出て東山松橋等の地を過き山岳を攀ち溪澗を渡り

或は巖角に縁がり或は樹根を擁み道途最も險惡の間を過ぎて九月十三日順安に出づ順安は平壤より義州に通ずる街道にして實に敵軍の後面あり且つ支那兵の兵站部ある所にして軍器糧食を蓄へ守兵を置きし所なり君か軍は一擊して之を破り敵の軍吏一人と守兵二人とを捕縛し全く順安を占領せり而して君の一部隊を順安に残して之を守らしめ他は十四日に平壤に向ひ平壤より北方一里程なる場所に出陣し翌十五日味爽に山砲を北漢山の頂上に据付け其左方より歩兵を繰出し敵軍の左面を攻撃したり北漢山と敵軍の間に見渡す限り水田にて其間義州本街道の一路あるのみ我が第十八聯隊第一大隊は敵軍を隔つること一千メートルの距離に於て件の本街道より突進して敵軍に迫り兼て此隊の得意と聞ゆし突貫を以て敵軍中に進入せり不意に出でたる我が軍か其天魔鬼神の如き勢ひを以て大山の崩るゝ如く大濤の打寄するも斯くやと思ふはかり滔々然として攻入るに面を向くべき様なさきに敵は狼狽恐怖して出でん所を知らず命辛く遁れしゆる君は難なく敵の左翼なる壘塞を乗取り續て第一第二の敵軍をも攻落せしかを第三第四の敵軍は戦はずまて潰走せり斯て我の軍か悉く敵の城壁を乗取りしは其日の午前九時頃なり茲に於て君は隊を湖寧枝隊と合し牡丹臺の攻撃に着手し自ら第二第三の兩大隊を率ゐて第五壘の背面より狹隘なる道路を廻りて牡丹臺上の假城なる後より攻落せり其激烈猛動他の軍に優れて目立ちたりといふ今回平壤を陥落するは元山湖寧兩枝隊にある事は夙に軍人中に稱せらる所なりしか果して君等剛勇敢爲殊に得意の突貫を以て幾艱難幾苦戦の間に遂に大功を奏したるを見る本邦の各新聞紙は派韓通信員の確なる報により掲げて以て世に傳ふるを見るに當時皆豐橋兵の猛勇と君の雄戦を大筆特書せざる者なし嗚呼君は是れ誠に帝國絶快の勇將なりと云ふべし

長岡陸軍歩兵中佐

混成旅團の參謀長として平壤の激戦に臨み大島旅團長と共に大苦戦したる長岡中佐は獨り武勇絶倫のみに止まらず又兼て智謀に富みたるの人なる事は嘗て聞く所なりしか今や戦にありて行動する所を見愈君の智勇兼備の良將たるを知れり茲に九月四日大島旅團は進軍して瑞興府に入るや軍用駄牛馬を徴するに一頭の得る事なし時に瑞興府使洪福淵は先に清兵に通ずるにも拘らず旅團本部を訪ひ阿諛の辞を呈す我軍既に府使の行爲を察せ能く之を知るを以て長岡參謀は直ちに其席に於て府使を詰問す使曖昧辞明ならず乃ち吏房を呼ひて證言を徴するに曰く「一里外の村落に米六十石を隠匿せるは府使か日本軍隊の用に供せざらんと欲しての所爲なり牛馬徴發の時之を徴發せすして却て其持主を還したり」と是に於てか實を得參謀は大喝一聲「縛せ」と命し兵士之を縛し首枷を加へて獄に下し洪の懷裡を檢し内通の書にして清軍の動靜を知るに足るへき二十餘通を發見したり後大島旅團は愈進軍して黃州に入り首鼠兩端勝者に與する腐敗漢海道道の兵使李容觀を捕へ又長岡參謀をして之を詰責せしむ腐敗漢遂に立誓し力を我に盡すへき悔悟の念を起したりといふ此前後二回の問答筆記を閲するに或は威責し或は撫諭し事理を盡し大義を説き立國兵馬の大勢を論し詰問審討周到精密殆ど至らざる所なし若し面り之を聴かば其辨舌の壯快明朗蓋思ひ半に過ぐる者あらん嗚呼何ぞ其れ智辨又富めるの深且つ雄なるや而して混成旅團か平壤正面攻撃の難衝に當り船橋里の敵軍を攻む激戦當に耐ありし時清兵は皆連發銃を連射するを以て彈丸雨注其勢激烈にして殆ど當るへからず然れども我諸隊は共に奮激して之を貫し將士は劍を振て進み出て兵を指揮し堡壘間近く攻寄せて奮闘三時間に及び我兵皆彈丸を打ち盡

したる古來未聞の激戦なり大島旅團長も敵壘を去る三十メートルの處まで進み出て自ら指揮するに至る此時中央の一隊は指揮官たる士官 悉く戦死して一の指揮官なきに至るや敵兵は壘を出て突進し我が右翼と左翼の中間に張出し來りぬ是に於て中央の一隊遂に支ふること能はずアハヤ總崩れとあらんとす此時長岡參謀之を認め馬を馳せて到り彈丸雨注の中に踊り入り劔を振て眞先に出て、兵を壓さ茲を先途と血戦する勇猛獅子の狂せるか如し我兵之に勵まされ力を得るのみか如何で參謀を見殺しにすへきとて奮然突貫し復敵を壘内に逐ひ込み舊地位を保ち得たり敵今や死力を盡して我軍を壓殺せんと思ひけん船橋里の三壘より連發銃を以て盛んに速射し殆んど彈丸を以て寸尺の餘地なきまでに撃ち詰りたり故に我兵は一步も進み能はざる色合なりしか一隊悉く銃劔を附け突貫したるもの三十六人あり敵壘中に闖入し向ふ者觸るゝもの縦横無盡に撞き廻り手當り次第に突殺す其勢の猛烈なるため敵兵第一壘を捨て第二壘に逃げ入りたるも惜むべし突貫したる我三十六人の一隊の一人も残らず悉く戦死せり斯る勇しきこと亦世にあるべしやは是れ其兵勇の拔群なるに由るは云ふまでもなければ長岡參謀の猛進雄戦に誘はれしもの蓋し多しといふべし嗚呼此智者にして此勇あり人參謀を呼んで張良の智謀と樊噲の勇武とを兼ね備ふる傑傑なりと言ふ眞に當れりといふべし

福島中佐

平壤の役彈丸雨注の中に立ち自若として參謀の職を執りし者多かる中に單騎旅行を以て有名なる福島中佐は折しも六連發の小丸中佐の愛馬の左耳を穿ち中佐の脇腹を掠めて飛び皮肉破れて出血甚だし部下の士官軍醫に急報し軍醫は直ちに馳付けて治療せんとせしに中佐は首を打ち振り「ナアニ之れしきの事に醫者さんどか要るもの」と馬上自分に綱帯を施し再び肥馬に鞭ちて前進したりといふ嗚呼福島中佐は相渝らす福島中佐なる哉

故赤城艦長坂元八郎太君

時は明治廿七年十月十七日黄海海洋島邊の大海戦に於て硝煙漢々砲聲天に轟き激浪變して桃花の色をなし慘々艦々の中に絶大の勳功を立て絶大の名譽を遺留して戦死したる赤城艦長を誰とかなす實に我海軍少佐從六位勳四等坂元八郎太君其人なり吾人は此大勳ある勇將の如何なる資性にして如何なる經歷あり又如何なる驍勇の働を著して戦死したるやを大筆特書して其名譽を永く萬世の後に傳へざるべからず  
抑君は安政元年正月元日を以て鹿兒島に生る夙に俊才の譽あり年十九海軍兵學校に入り刻苦勉學他に抽て屢賞與せらる明治十年二月業を卒へて海軍少尉補に任し筑波艦に乗組て西南の役に從ひ河村參軍の下にありて各地に轉戦し大に戦功あり役終るや勳六等に叙し少尉に任す後英國に留學し大に海軍の技術に長ず歸朝して海軍兵學校の教官となり十六年中尉に進み十七年勳五等に叙せらる十八年浪速艦英國に竣工するや君と回航委員を命せられ英國に赴き十九年之に搭して歸朝し爾來同艦に乗組み遂に大尉に昇進せり君は獨り航海術に長するのみならず又廣く各國の語に通せり廿二年露國東洋艦隊「ナヒョフ」號に乗込み艦隊演習に従事し翌年歸朝直ちに海軍少佐に昇任せらる同年十一月露國公使館附武官を命せられ翌年一月同地に出發し露京聖彼得堡に駐在する處餘此時父君を喪ふ君には浪速艦回航委員として英國に在るの日母氏の訃音に接し今露京に在りて父を喪ふ君の不幸察すべし然れども君は露京に在るの間海軍々制及び操縦術に就て發明する

所少なからず稍以て君が素志の幾分満すに足るものありしといふ昨廿六年吉野艦回航の命を受け露京より英國に赴き之を回航して本年四月廿日無事歸朝し直ちに同艦副長に補せらる人諸艦の優秀を談すれば吉野艦を稱揚して措かず君も亦屢門生に語りて曰く願くは此艦に在りて一戦を試むるを得ば人生の快事世之に如くものあらんやと而して此希望を果すの時機將に來らんとするに先ち本年六月移て赤城艦長に補せられたり當時同艦は清國芝罘に在りしか故に商船以て之に赴任し同艦に乗込み幾もなくして宣戦の令に接す呼當時の出渡は實に是れ君か日本を去る最終の訣別にてありしなり

君は九月十五日平壤の戦正に酣なる時陸軍應援のため大同江に進み平壤我軍の大勝利を耳にしつゝ十六日本艦隊に従ひ大同江を發し十七日黄海大孤山沖に於て敵の艦隊と激烈なる大海戦を試むるに至れり君厲聲叱咤己が部下の士卒に令して曰く「自餘の敵艦顧るに足らず只定遠鎮遠に拒敵せよ」と乃ち最も激戦を極め遂に剛敵定遠を傷け進んで他の敵艦隊を惱ましたり、是より先き君は人に謂て曰く「我若し此千載一遇の時に際會して我艦の微弱なるがため戦地孤道の命に漏れ内地沿岸警備に充てらるゝが如きことあれば、これ誠に終生の遺憾なり豈能く此遺憾に堪へんや吾は殆ど當に奮死すべきのみ若一たび戦はば戦艦假ひ小なりと雖ども彼れ定遠鎮遠等宏大堅牢東洋無比と稱せらるゝ敵艦に當り彼をして戦鬪力を失はしめされは止まざるべし」と今果して其言の如し赤城艦は僅に六百廿二噸の小砲艦にして鎮遠定遠等は七千三百三十五噸と稱せらるゝ世界に聞けし大艦なり而して之に敵して既に斯の如し君の壯以て知るへし其戦酣なる時に際して君は砲丸霰下の間に橋塔に著立し毅然司令旗を揮て部下を指揮す其敢勇活働鬼神を驅るの勢あり而して神氣猶餘あり

り能く敵の艦内を指定し砲丸を其要部に中つ又狙撃して敵の甲板に人なからしむるに至れり時恰も霹靂巨弾飛來り橋塔を射る君遂に其に中りて斃る艦員直ちに君の所在を檢するに君は已に落ちて甲板上にありしも眼より上の其影だも留りず橋身亦折れ慘憺云ふ計りなし嗚呼君の斃るゝ誠に傷むべしと雖ども抜群の勳功我國威爲に揚る是れ丈夫一代の面目にして其譽れは世界萬國に輝き史乘を染めて千歳に垂る豈亦快死ならずや君斃るゝを見るや部下の將士は悲憤慷慨勇氣百倍以て此役に於ける千古無比の大勝を助け成すを得誰か當日の激戦を追想して君の忠勇絶倫を賞揚せざらんや

君資性深沈動勳剛毅、身虛飾空名を喜ばず言々肺腑より出で辨説又た常に直入す居作頗る嚴格にして一事必ず成らすんば止まず而して海軍部内に「あの艦には阪元か乗り居る」とてふ一佳話あり蓋し君の軍事よ心を用心する極めて深切にまて常に艦内を整理し清掃す故に遠く之を望むも明かに之を認め得るか故なりといふ君が邸の南面して光線を受くる最も奇佳なる一室は君が好んで起居せし處なり室内には床の間に一振の軍刀と英國に於て吉野艦が發射試験に用ひたる一個の「アームスロンク」砲彈及び幾十冊の書籍を積みたる書架とあり四方の壁間には我吉野浪速露の「ナビオン」三艦の寫眞及び君自身の寫眞を掲げたるのみ他に何の裝飾する所なし又廣潤ある庭園は一面皆芝生の平地なり君は居常汚垢の衣服を身に纏はず又常に家人を戒めて曰く「食物に注意せよ歐州人の耐忍力に富むは善良なる食事を爲すに由る殊に兒童と書生とは一段の注意を要す」と以て君か平生如何に衛生に注意したるを知るべし君は又兒童を集めてこれと遊ぶを厭しむ而して之に算數を示して解答せしめ以て腦髓の粗密を判す多くの青年を見る亦然り君日夕青年を督勵して曰く「今

や青年の士氣日を逐て陵夷す眞に憂ふべし卿等必らず快活の行動をなし以て有爲の實を養ふべし我久しく露に遊び親く彼の國風と士氣とを見るに彼の物質的文明は遠く英佛に及ばずと雖ども士氣の鬱勃たるは遠く英佛の上にあらず蓋英佛は文を以て勝ち露は氣を以て勝つものなり露の東亞に雄たる所以又英佛の以て如何ともする能はざる所以は實に此に存す卿等之を思はざる可からず」と故に常に人に勸むるに必ず快活なる運動を爲すことを以てす、君最も射的を嗜好す往年海軍射的場の設けあるや君常に出入して技大に進む後海軍射的會に於て二等賞を得たることあり而して事務を執るに至ては克く嚴格に公私を判別し其職務に際しては親戚友人上長官と雖ども應接私用は屬する時は棄てこれを顧みず致々として公務に執掌したりと云ふ又君と大懐にして喜んで人の言を容る然れども一たび軍令を非議するものは一言斷乎之を斥けて曰く「軍政に失あらば乞ふ謹んで教を聞かん軍令の事に至りては軍人以外の容喙を許さず」と其剛果の精神見るべし君大決戦に赴くに家人に何事をも告げず只某地より書を寄せて曰く今回の征清軍は實に千古の快事なり只國家の經費計られす苟も軍人たるもの宜く之を顧み大義を先にし其他を言ふへからず家政上の費用の如き力めて之を節減し絹之を絹に換へ車之を徒に換へよと亦以て君の至誠を知るに足る嗚呼君か抱負の大にして且つ智勇兼備り至誠純忠天性に出づるもの實に今回の大勳功大名譽を遺出せり蓋復得易からざる猛將と云ふべし

陸軍歩兵少佐中原涉君

平壤に於て陸軍大尉より一躍して少佐に上り歩兵第十一聯隊第二大隊長に補せられたる陸軍少佐中原涉君は伊豫國宇和嶋の産にして維新翹冠にして軍務に服し昇進して陸軍少尉補となり廣嶋鐵臺に附屬せしが後愛

媛縣警部に任し高松に在動中偶々十年西南の乱起り再び出て各處に轉戦し功を以て少尉に進み勳章及び賜金を受け後監軍本部詰めを命せられ文庫主管たり夫より再び第五師團附となり尋で中尉に進められ連りに進んで大尉となり第九旅團副官たりしが今回日清事件起るや混成旅團に従ふて渡韓し嘗て判士となる平壤の一戦殊功あり眞先に振擡せられて少佐に進み遂に成歎の役に負傷したる橋本少佐の後を襲ふて第十一聯隊の第二大隊長に補せられたり

故陸軍歩兵大尉松崎直臣君

征清軍第一着の激戦とて世に知られたる成歎の役に第一の勇名を顯りし第一の譽れを留め唯殘念の一語を遺して戦死したる驍將を誰とらなす、云はそして廣島衛戍第廿一聯隊中隊長陸軍歩兵大尉正七位勳五等松崎直臣君なるを知るべし君は熊本縣士族にして高田原本行寺町に生る父名は次郎一兄二姉あり君幼にして敏捷稍長して従弟小原勘三郎氏（今歩兵大尉）と共に藩塾に入りて英學を修む明治七年清國と葛藤起るに際し東京兵學寮生徒を募集す君乃ち小原氏と同じく之に應じ八年二月上京入學し翌年三月業を卒へ陸軍少尉試補に任し大阪鎮臺歩兵第九聯隊附を命せられ伏見分營に在り西南の役各地に轉戦して殊功あり中尉に進み廿一年十一月遂に大尉に進任す近年専心銃術を訓練し其部下皆精銳の名あり今回の事件起るや君は早く派韓軍隊の中にあり七月廿八日我軍成歎及び牙山の清營を攻めんとし一隊進んで素砂場に至り河橋を渡らんとして敵の伏兵に遭ひ苦戦極りなま然れども我將校兵士の勇敢ある敢て寸地を退かず激闘奮戦す中にも君は部下の一隊を率ゐて敵の射撃を正面に受け水田に伏して最も苦戦し勇闘奮躍大に敵を惱ませ去る飛來る敵丸は遂に君

の胸板を貫きたり君の一聲高く殘念と叫びて倒る軍醫傍にありて藥を與へんとせしも君は己に氣息絶して口閉ちたり此此驍勇の將北京城を陥るを見す三十九年を一期として斃る千歳の憾あるべし然れども君は勇名第一として世に轟き婦人兒子猶君を稱して止まず又以て限すべし君資性沈毅にして果斷又富み其の心に決するところを以て決行せざるは無し而して君は獨り武勇絶倫のみならず又漢學に通し文章を能くす嘗て平生書籍を購ふを以て一の樂みとなし殆んど家政の全部を抛つも其の意を滿たす能はざらんとす又酷く刀劍を愛し書齋の中書籍山の如く刀劍參差たり兼て漆工を好むの性あり嘗て廣島にて金城一國齋なる者に就き漆器の細工を習ふ頃日其の技大に上達し一物成らすんは必ず止めず文具等を製する其數極めて多ありしと云ふ以て君の堪忍力に富むを知るべし而して平生虚飾を惡み綿服を纏ひ晒木綿の三尺帶破帽を被りて意となさす一見老蒼生たり又多くの人と交際をなさず且つ進んで交はるを好まず然れども一度交をなせば十年莫逆の友の如く毫も城壁を設けず胸襟を披きて談ず而して任俠義に勇み約を守る極めて堅く武士の遺風實に堅しかりしと云ふ

**故陸軍歩兵大尉町田實義君**

平壤の役船橋里に激戦せる我混成旅團中隊丸に仆れて猶死せざる強豪極りなき快男兒あり之を陸軍歩兵大尉町田實義君となす君は鹿兒島上荒田に生れ野津中將と同郷たり天性剛毅にして果斷あり且つ敢爲の氣象に富み勉勵常に人を驚かせり戊辰の役年十七結髮軍に従ひ野津中將の引率せる五番小隊に屬し東方常野の間に轉戦し白河口に奮闘し頗る奇功あり太政革新の後尙陸軍に従事し明治五年三月教導團に入り翌年病を以て除隊となる後海軍少尉補に任せられしか幾もなく十年の乱起り又陸軍少尉に轉し近衛隊に屬し肥薩の間に激戦し

凱旋の後功を以て勳六等に叙せられ後中尉に進み次て大尉に進む二十二年頃廣島衛戍第十一聯隊中隊長に轉補し今日に至る征清軍起るに及んで混成旅團に屬し九月十五日大に平壤船橋里に激戦きて頗る殊功あり此日君は自から士卒に抽んで眞ッ先に進み劔を振ふて奮激突戦す時恰も敵丸猛烈雨の如く飛來し、すさまじなんぞ云ふ計りなし然れども君は日頃の勇氣百倍し之を物の數ともせずして戦ひしに、アナ憎くや敵の一九君の胸邊に中る君は爲すべし直ちに勃乎と起き直り血劔を杖て地上に坐し軍曹を呼んで布もて其劔を包ましむ今一血戰と立上らんとする一刹那又一丸あり君の頭骨を貫破せり此にも撓まず踰跟猶進まんとする時何の不幸又更に一丸飛ひ來て君の股を貫き再び仆る何ぞ其れ勇猛なる而して茲に君の強豪虎勇驚くへきは斯くまでに三丸を要部に受け猶未だ屈せず神色自若として軍曹に告て曰く「敵丸斯の如く我が軍進まず而して我れ又斯の如く戦ふ能はず我事止む遺憾の極なり汝是より我が軍服を脱ぎて之を着し我れに代て衆を指揮し進んで必らず敵を破れ若機後るれば大事破る早く此軍服を脱ぎて着よ」と言ひ畢て且瞑す嗚呼何等の豪勇ぞ忠君愛國の情極まるにあらすんは焉ぞ能く此の如くならんや」是れ君は仆れて猶死せず死して猶死せずと云ふへし

**故陸軍歩兵大尉田上覺君**

平壤攻撃に熊進虎驅し至大の名譽を擡ひて潔く戦死したる混成旅團歩兵第十一聯隊第二大隊長代理陸軍歩兵大尉田上覺君は岡山縣の人なり今回の事件勃興するや君は早く歩兵第十一聯隊第二大隊第六中隊長として渡韓の軍に従ふ本年七月十五日大院君國王の召に應じ我軍之を護衛して將に宮城に入らんとするや韓兵俄に

起りて戦を挑む君も亦此護衛軍中に在り一戰韓兵を驅逐す同月廿九日征清第一着戦として劇烈なりし成歎の役君等先登して大に功を奏せり此役第二大隊長橋本歩兵少佐傷く君直ちに代つて大隊長の職を執り頗る戦功あり後ら進軍九月十五日平壤の役に於ける亦第一第二兩大隊と俱に猛進奮戦大に敵軍を船橋里に惱ます此時の戦最も劇烈を極め彈丸雨注殆ど面を向くへからず然れども君等敢て意となさす其間に奔飛して指揮虎闘し遂に銃丸に中て斃る嗚呼君か平生の美膽是に於てか見るを得へく君か生血の進むまで如何に敵軍を惱ましたるやを知るへし君資性剛毅言行嚴正身の長け甚だ高からずと雖ども皮肉肥之進退活潑人の上に出づ文事長する所なきにあらざるも武事に至ては特に戦術に通ずること深く事務に老練にして部下を御すること最も善く勤務に精にまて素行欠くる所なかりしといふ君已に大隊長代理として職に在り蓋少佐に榮進する近きありしあるへし眞に惜むべしとなす君初め命を奉して征清の途に上らんとするや令閩に遺書したるを見る亦以て君の決心義膽の状を窺ふに足らん曰く

今回従軍の命を奉ず本懐之に過ぎず素より生還を欲せず汝若戦死の報あるに際せるとも決して驚くべきにあらざるは勿論他日一般軍隊の凱旋に際し各々戦功を立て生きて歸らるゝに當り我獨り戦歿してあらざるときは或は愛色の外に發せずとも云ひ難きに似たれども此時と雖ども決して憂愁するを許さず一子健吉今年八歳なり其十三歳に及ふまで膝下に於て教育するも可あるも以後は青木氏(令閩の實兄靜岡縣土木課長)に托して教育の監督を乞へ云々

身自ら死を決し而して後事を托するの辞亦切なり丈夫の腸思ひ見るへく誰か慘々たらざらん

陸軍歩兵大尉若月曾一郎君

混成旅團中に陸軍歩兵大尉若月曾一郎君なる偉男あり廣嶋縣士族其年四十四年三月にして歩兵第二十一聯隊の中隊長なり最も能く戦ひ遂に傷を蒙る其志氣の烈乎たる實に人をして感歎せしむるの概あり九月十五日平壤 正面 船橋里の激戦に敵の射撃雨の如く其部下の兵士聊か退却せんとするの色あるや君厲聲一番叱して云ふ「此處の一戦ハ味方全勝の勝敗に關す退却せんとする者は斬らん」と威武凜然として當るべからず然れども尙ほ退却の色あり此に於てか君止むを得ず涙を呑んで部下の兵數名を斬り僅に陣勢を一振せんとす此時に當り忽焉として敵の砲彈飛び來り君の脛を粉碎す君之れが爲めに一たびは倒れしも神色自若として尙ほ奮闘せんとす部下の兵強ひて君を擁して軍醫の所在に至る途次君尙ほ聲を勵まして云ふ「余斃るゝも汝が輩退却するを得可らず余は一人自ら軍醫の所在に至らん汝等宜しく引返して敵兵を驅逐すべし」と然れども君の負傷甚だ重きを以て部下の兵其命に従ふに忍ひず強ひて軍醫の所在に伴ひ至る軍醫一見して曰く「道は重傷なり野戦病院に伴ふにあらざれば治療を施すの道なしと更に同病院に伴はしめんとす君益々聲を勵まし「今は大事の場合なり杖にすがりても戦場に立たざる可らず乞ふ速かに治療を施されんことを」と勇氣凜然として驕虎の勢ひあり軍醫切に勸告して強ひて病院に送れりと云ふ君資性温和にして平生殆ど婦人の如し而して一たび機に臨んては勃として既よ斯の如く復平生の君又あらず人其意想外あるに驚き少時感歎の聲を絶たさりしと呼誠に日本男兒の好模範たるべし

故海軍大尉志摩清直君

大孤山沖の大海戦に名譽を遺して戦死したる偉男兒海軍大尉正七位志摩清直君は宮崎縣北諸方郡都城の人志摩清雄氏の長男なり資性温厚明治八年始めて海軍兵學校に入る業成り累進して大尉に至る最も砲術に長す十七年七月向 岡天覽射的會に於て其技能を顯し金蒔繪花瓶一對を賜ふ二十年七月海軍大射的會に一等賞として箱船一匹大和國光作名刀一口を得たり君は三度濠洲及び南米の諸邦に航し二度大學校に入る廿三年一月軍艦千代田回航委員を命ぜられ英國に出張せり、今年日清の關係愈迫るや陸兵護送として近江丸乗組を命ぜられ次て聯合艦隊旗艦松嶋乗組に轉し第一分隊長に補せらる東洋第一の巨砲と稱せらるゝ同艦の三十二珊砲の實に君の主管し指揮する所たり九月十七日に於ける大孤山沖の大劇戦には松嶋艦最も苦戦し死傷極めて多し君も亦激闘奮戦の間遂に敵の砲丸に中りて斃る行年三十六年五月月なり蓋今回海戦の大捷敵艦七艘を破毀沈没せしめしは我大元帥陛下の御威稜に頼ると雖とも抑亦君等多年練磨の功と奪ふべからざる忠烈義膽とによらすんはあらざるなり君に二弟あり次は砲兵中尉山路通信氏にして今現に横須賀陸軍要塞砲兵中に在り季は海軍少尉志摩猛氏にして今現に佐世保海兵團分隊長心得たり阿兄先づ逝く二弟の志氣益更に百倍するものあらん君か父君は今年六十六先頃より病褥にあり君曩に書を家に寄せて曰く

(前畧)大功を立て無事歸朝の日を御待可被給 候若し武運拙なく萬一の事も有之候はゞ御孝養第一に依頼致候 御身御自愛珍重に存 候得共清英(今年五歳)の教育は充分御注意是非父の志を繼ぎ海軍に従事爲致度云々

是れ君か夫人育子に與ふる文にして最終の絶筆なり飛丸劔花の間ありて從容後事を托し能く國家を思ふの

情を致す其志涼乎として侵すへからず君か戦死の報當局に達せりと雖とも皆家人の悲歎を慮りて容易に發せざりしに偶飛電佐世保の實弟志摩氏より來りて先づ之を報せ未亡人此報に接するや毫も哀色なく端然として曰く「國家の爲めに潔く身命を効す是れ軍士の本職なり良人の名譽なり」と君か平生の養志知るべく君地下に之を聞かは以て瞑すべし呼

故海軍大尉 永田 廉平 君

黄海の役悟道知死の武人あり軍艦秋津洲の分隊長として戦列に臨み大壯膽を以て激戦し大榮譽を双肩に荷ひて戦歿す之を海軍大尉正七位永田廉平君とす君は滋賀縣の人舊彦根藩士なり夙に慶應義塾に入りて勉學し後明治十六年八月海軍兵學校に入る業卒へ十九年十二月航海演習として龍驤號に乘組み廿年二月新嘉坡濠洲等に航し九月歸朝して海軍少尉候補生となる翌年十一月少尉に任し十二月金剛艦分隊士に補す廿二年八月布哇其他に航し翌年二月歸航九月海軍大學校丙級學生に擧げらる廿五年五月迅鯨艦に乘組み水雷術を練習し十二月大日本帝國水雷術練習艦尉官教程卒業二等證書を授與せらる此月遂に進て海軍大尉に任し本年六月に至り移て秋津洲分隊長に補せられ幾もなくして君が平素の技術を實地に試むるの好時機に遭遇したるなり君曩に第一戦を豊島に試みて勝ち其功既に大なり而して又黄海の大戦に列す先のものとは是れ一小戦のみ未だ以て好敵手を得たりとなさす後のものは敵國の艦隊精を抜き數を備へ又東洋著名の大艦隊を有す我艦隊は之に當るに幾分の遺憾なき能はず從て苦戦の度を高めざるへからず其大激戦たる知るべきなり是に於て君か宿積の技能を揮ふに足ると云ふべし而して君は毅然之に臨み彈丸亂下鉄板裂け血雨降り骨摧け肉飛ぶの慘場に際



し神色自若死を見ること歸するか如く奮闘勇戦能く其職を盡し遂に敵丸に中て斃る何等の壯膽そや而して我軍終る大勝を得君等の功豈更に大ならそや君平生神學を好み氣界丹田の説禪定止觀の行最も得意にして屢々高僧智識を凌きたりと云ふ兵機神機も是れ一なり砲烟彈雨の間從容微笑を含んで實相無漏の大海に沈むもの優に三昧に入りたる大悟道の人ならざるへからず君の如きものは是れとぞ君戰地に臨むに先つて其實弟に寄せたる書を見るに曰く

今回は大に禪理の奧妙を悟り申候死地に入らずんば人間の大決心は出來らざるものに御座候海底の藻と消ぬ去るは覺悟の上に候茲にて大に神機を養成する練磨機に達せりと存し心中翫に期する處有之候されは此段御推量被下度候人間も一度は戰地に臨まねば意氣地か附かず候死生在天早晚棺に藏まるは免かれず候人間社會普通の事にまて晩きか早きかの違ひに候へは少しも頓着は無之候些しは愉快に海底に沈むも亦男子の本望に候扱て以上の次第に就ては甚た氣の毒の次第なれと願くは節操堅固に彦根の老人を大切に世を終らす様願度候

呼君の死生明決眞に大悟徹底の人にあらずんば能はず而して「死地に入らずんば」の一句以て其勇猛精進大工夫を喝破せしを見るべし末段の一節に至て纏綿たる情緒を露はし出し而も些しの飾字なし讀む者をして猶且意骨に徹して端然たらしむるものあり此鉄骨男兒にして此抱負あり是に於てか眞大丈夫なるべし人其風采を追慕するもの豈其謂ならんや君慶應二年に生れ春秋未だ三十に満たす而して其心骨能く彼の偉功を成さしむ圖らざりき敵丸遂に此壯を斃す痛悼せざるへけんや

故陸軍歩兵大尉林久實君

陸軍歩兵大尉林久實君は鳥取縣の士族にして歩兵第十一聯隊の中隊長を以て混成旅團に在れり九月十五日黎明君等は古今無双の勇を以て葉志超馬建忠等か死力を以て守れる船橋里の砲臺を乗取りたり抑も此戰は全軍中の苦戦にして我兵の死傷夥しからんとす君は此恐ろしき苦戦に臨み激闘一開するや眞先に進み虎の如く獅子の如き勢を以て中隊を指揮し奮闘激戦愈勇進して敵の砲臺に迫る敵は漆を引き柵を結ひて我軍の進路を塞ぎ銃窓の内より連發銃を以て我軍を狙撃す去るからに彈丸の降ることを宛ら雨の如く我兵の斃る者須臾の間六十餘人の多きに至る君が此間に荒れ廻りて憤迅突撃する一刹那一發飛ひ來る敵丸君の右足を貫きて重傷を負はしめたり去れども君は驍勇剛毅鉄石の如く尙少しも屈せず兵勇を鼓して遂に此難壁を乗取りたり而して君か此偉功を奏すると共に敢なくも勇まじき戰死を敵壁の門前に遂げられたるは日本男兒に耻ぢざる拔群の働きにして武人たる者學生の大名著といふべし聞く翌十六日大島少將は昨日敵の死守したる保樂近く進みたるに首去り手失はれたる我將校の遺屍空しく秋草の中に轉ひ在りしを陣頭に進みし一人の兵卒涙ながらに指し示して曰く是れ昨日猛戦して斃れたる林大尉の死屍なりと激戦に臨みては鬼神をも拉がん大島少將は斯くと聞きて愁然として馬を下り恭しく合掌して一拜して聲を厲まして死屍に向ひ「林大尉靈あらは聴かれよや能くこそ生命を棄てられたれ卿か忠死は必ず天聽に達すへし」と云ひ了つて泣かぬ涙を呑み込みし其友愛の情三軍をして等しく首を垂れしめたりと始め此難壁の方面に向へる森少佐は其部下に令して曰く「此方面は敵の死守する所なれば堅固うして容易に振へからず然れども我に戎器あり況んやまた之を守

る者怯懦の豚尾漢のみ若し能く守りて抜く能くすんは唯一死あるのみ」と君は即ち其部下に在り唯々命を領して出づ既にして君此難嶺に當る而して其地利に於ける彼我の懸隔最も甚たし鬼神を雖とも猶且拔き得へきにあらす而も君は死を以て上官の嚴命を守り一言も其命令の過激なることに及はすして遂に一死以此難壘を抜きたりといふ嗚呼君の武勇實に鬼神を凌きしと謂ふべし昔英國の輕騎隊死を以て敵に薄り遂に三百騎を仆され生きて還る者僅に三騎國人勇かに以て宇内絶無となす而して今君獨り之に匹敵し得たり何ぞ其名譽の絶大なる乎此東洋の鬼大尉

故陸軍騎兵大尉竹内盛雅君

騎兵大尉竹内盛雅君は九月廿四日を以て東學黨の爲めに斃れたり吾人は今君の名譽と君の傳歴とを記すか爲には勢ひ其當時の状況を記さるを得ず

抑も當初台封兵站部に於ては其沿道附近東學黨の蜂起したる説あるを聞き日本人二名と韓人二名をして商人の風俗をささしめ之を探偵せしめしに彼等四名は東學黨の所々に屯在して不穩の状態あるを探知し之を兵站部に報告せんか爲め歸途に就けり折柄其中途に於て君か兵卒三名を引率して來るに會ひしを以て直ちに其旨を報したるに君は尙自ら行きて偵察を爲さんと云ふ四名は其危険なるを告げて押して諫止せしも君之を聽かすして直ちに龍宮の地に至り府使の邸に入る東學黨の所々に屯在して不穩の状態あるを探知し之を取圍みたり此時君の部下の兵卒三名は彼等に向つて發砲せんとしたれども君は之を制して曰く彼等果して吾々に敵意あるや否やを知るへからず暫く其舉動を窺ふべしと其言未だ了らざるに無數の韓人は早や進て入り

來り矢庭よ君等の帶劔に取附き又銃鎗を取り去らんとす君は斯くも見るより兵士と共に拔劔し縱橫無盡に切立て追立て戦ひしに敵は目に餘る多數なれば一名の兵士は遂に負傷し二名は力及ばずして其場を脱出したる去れども君は元來勇猛の性にして嘗て騎兵隊中の鬼竹内と稱せられし驍將なれば幾百の敵ありとも、いづかな退却するか如き舉動の人にあらず尙益々激中に切り入りて猛虎の如く強き立てたれども無數の敵徒中々猖獗にして到底免れ難き勢おれば君は今は是れまでなり去れども名もなき逆徒の手に死せんよりはと自ら軍刀を喉に突立て勇ましき最期を遂けられたり吁凶徒は蓋し君の勇猛を見て鬼加藤の再來とせしならん而して君か自刃して斃れたりしと彼の野蠻極まれる賊黨か如何に君を虐殺したるやを察すべし君は有名の騎手にして如何なる悍馬と雖も一度跨れば其暴を逞うすること能はざらしむる一種の妙技を有す而して空しく烏合の徒の爲めに戦死せられたるは返すくも残念なりと君の知友は語れり此勇猛なる一騎當千の鬼竹内は何れの人なるや又其閱歴を知らんとする者は乞ふ下文を讀め

君は山口縣長門國阿武郡萩橋郷西分村の士族にして弘化二年十一月廿八日を以て生る夙に武を以て聞ゆ明治元年十二月軍務官御用たり二年十二月第四大隊四番中隊司令候補に補し四年十一月二番大隊官に任す五年十一月二等傳令使を命ぜられ六年五月鎮臺騎兵第一大隊副官たり七年四月陸軍少尉に任し八年六月正八位に叙す十年の役博多へ出發し七月中尉に進む九月賊徒平定し本隊に復し東京鎮臺騎兵第一大隊第一中隊第四小队附となる十五年六月正七位に叙し翌年六月動六等に叙し年金七拾圓を賜ふ十七年埼玉縣下暴徒鎮壓の爲め出張を命ぜられ翌年八月勳五等に叙す十九年三月大阪鎮臺調馬士官となり廿年一月修業兵授たり廿二年十一月

大日本帝國憲法發布紀念章を授與せらるる廿四年八月軍馬購買委員長として宮崎縣に出張し廿五年三月從六位に叙し而して本年九月廿四日朝鮮龍宮に於て戦死せられしなり時年四十八年十一月

### 陸軍歩兵大尉野津鎮武君

大本營附陸軍歩兵大尉野津鎮武君は曩に大本營の命を受け朝鮮國元山に到り第三師團兵即ち佐藤大佐の率ゝし元山枝隊の出張に先ち之れが糧食其他の準備をなす爲め八月二十一日元山に到着爾來勵精刻苦して韓人を人足に雇ひ上げ佐藤大佐一行の糧食を陽徳に運送せしめたる際の如きは清兵三千既に陽徳を占領屯駐し居るとの説起りし時なれば韓人陽徳行を固辭して行ざるより君は非常に奔走して或は韓人の機嫌を取り或は嚇し以て漸く陽徳に到らしめたるに一人の清人さへ在らざりしより始めて韓人も日を追ふて我人足の雇ひ上げに應ずる者多きに至りたりと然るに該糧食運搬の困難ありしは到底筆紙の能く盡し得べき處にあらず佐藤大佐亦能く難き忍ぶの性ありて糧食盡るも鹽と醬油とたにあれば運搬の爲め購求したる駄牛千頭を盡く喰ひ盡えても美事に平壤の陥落を遂げざる可らずと兵士を諭し君にも語りて分れたりと彼平壤の陥落は元山支隊の功少しとせずこれ君よく兵站運輸の職を全うせたるを佐藤大佐の勇猛にしてよく部下を統率したるとによるなりと云へり而して君が元山に始めて出張せしときは中尉の官にありしが元山滯留中大尉に昇進したり此たび大本營より歸朝を命ぜられ已に廣嶋に歸着したるが氏は再び某兵站部詰を命ぜらるゝならんと云へり

### 故陸軍砲兵大尉山本忠知君

野戦砲兵第五聯隊第五中隊砲兵大尉山本忠知君が大激戦を平壤に試み大名譽を遺留して戦歿したる當時の状況を見れば轉機歎に堪へざるものあり吾人は今詳に之を記して世に告げんと欲す  
抑も始め君は平壤に進軍し九月十三日には旅團司令部の命を奉り水濶橋の東方三千メートルの處に砲列を布き大同江對岸の右翼堡壘を砲撃し能く其急所に中つるを以て敵は忽ち潰走す次で第二堡壘を砲撃せり此日の發砲彼我共に百發以上にして其盛なること砲戰に多く見ざる所ありといふ然れども敵丸は常に上飛にして命中せず我兵一の死傷なし十四日は明日大戰の準備を要し且此日の小戦は敵兵を此方面に引附くるにある、つなきの戦も過ぎされしに僅に發砲したるのみにて唯敵の發射に任せたり十五日は全軍平壤に乗込む大戰闘の豫定日なるを以て君は第六中隊と共に大同江の左岸左翼なる最も堅強の橋頭堡壘を砲撃せんか爲め午前三時水濶橋を距る三千五百メートルの所なる山下に砲列を布き曉天漸く白まんとする時既に小銃の激戦酬にして彈丸雨注硝煙天地を埋むるの際より二隊共に天地四極を震破して砲撃を始め且つ君は暫時にして隊を前進せしむ此時我歩兵は進撃突貫十一の堡壘を占領したるを以て君は側面より左翼橋頭堡壘を砲撃せんか爲め敵を距る僅に五百五十メートルの所に陣取りたり敵の其距離の甚だ近きたるを見て夥しく小銃を乱射し然れども我砲兵は例の如く側射を爲す次に榴彈を發せり斯る近距離に於て而も此舉動をなす實に熟練にして且つ剛膽極りなしと云ふべし此時君は大聲疾呼衆を擡て部下を勵まし飛天夜叉の荒れたるか如き勢なりしが敵の亂射と味方の苦戦を見て大に激昂し勵聲一番「第六砲射」と號令する一刹那小隊長の之に次で「打て」の號令を發する髪を入れさるの間敵の銃丸は早や君の腹部を貫きたり流石に剛勇なる君も痛手の傷にたまり兼ね手を擧

けしき、其場に倒る伊藤中尉傍に在り一躍して君に代つて號令し砲手をして知らせめす此時早く「打て」の號令出て砲聲一發山岳を撼かして敵壘に落つれば煙火一開さしもの堅壁轟然其大半を破壊し去る此一瞬間に君の銃卒は小影より走り來り急に君の劔を納め君を荷ふて綱帶所に至らんとす君曰く「吾不肖と雖も平壤を陥落せざる以前に於て何る小創傷の爲めに此場を去らんや」と其聲冷に其語短し銃卒肯せずして負ひ行けは未だ綱帶所に至らずして体温已になし而して至れり即ち己に不歸の人なり吁君か不屈剛勝の氣象實に驚歎せざる者あらんや此日砲兵の傷く者甚だ多く或砲部の如きは砲射長及砲手を合せて三人四人とまでになりたりと云ふ誠には是れ苦戦中の苦戦にして其死傷の多き憤激突進して敵壘を突きたる先登の歩兵にも劣らざるなり然れども遂に平壤を陥落して歡聲凱歌を揚ぐ君以て地下に瞑すべし吁此勇將を何れの人となす曰く是れ岡山縣の士族にして時年四十四年三ヶ月なり

海軍々醫大監河村豊洲君

松島艦乗組の海軍々醫大監河村豊洲君は黃海十七日の大戦の際病室にありて他の軍醫を助け頭部及び腹部と下肢に負傷せる一水兵を治療し居しに敵の彈丸飛來りて君に中りしかは君は俄然眩目し暫らくして自から起上りしも腰と足に激しき痛みを覺ゆる意の如く起つ能はず辛うして病室の外に出でし折しも一水兵來りて君を負ひ行かんとす君は疾呼して「君は砲員ならずや」と問へば水兵「然り」と答ふ君「然らば速かに配置に付け砲員其本職を捨て、負傷者を搦ふに及ばず」と叱咤すれば水兵は「我が砲は敵陣に中りて發射するを得ず」といふ時看護手來り君の靴及び靴下を脱せしに流血淋漓たり然れども君は少しも挫折の色なく自若として直

ちに海水を汲ましめ両足を浸しながら苦痛を忍び醫員を指揮して艦中にて火傷せる多くの艦員の手當を爲さしめたりといふ軍醫たる者以て鑑とすべし

故陸軍歩兵大尉金藤之明君

九月十六日平壤陥落に際し雄奮激闘して勇然戰死したる歩兵第十八聯隊中隊長歩兵大尉正七位金藤之明君は如何なる閥歴あるの人ぞ曰く君は越後北蒲原郡新發田本村に生る家世々新發田藩士なり君初め藩兵に列し明治元年奥羽征討軍に従ひ所々に轉戦し十月再び藩に歸れり四年八月歩兵第四聯隊第一大隊に入隊して累進し六年六月陸軍々曹となる十年西南の役起るに逃ひ三月別働旅團に編入し肥後國松橋驛に戦ひ爾來諸所に轉戦して殊功あり五月陸軍少尉試補に任す十月凱旋其戦功少からざるを以て更に陸軍少尉に任し勳六等に叙せられ金三百五十圓を賜はる十二年五月歩兵第一聯隊第二大隊第二中隊第一小隊長に補し七月戸山學校に入る十三年二月正八位に叙し十月第一中隊第一小隊長に轉す十七年五月更に陞りて歩兵中尉となり六月第一中隊第四小隊長に補し七月從七位に叙せらる廿年二月再び戸山學校に入り七月同中隊第一小隊長に轉じ九月終に修兵教授となる廿三年歩兵第八聯隊大隊副官に補し後第二大隊副官に轉す廿五年四月正七位に昇叙し九月歩兵大尉に任し歩兵第十八聯隊中隊長に補せらる而して本年八月廿日征清の軍に従ひて發し九月十六日遂に戰死せしなり君は維新の際に於て蹉跌失敗したる東北人種の中より身を起し薩長藩閥の光明旭日の如き軍人部内に孤立して能く其本職を全うし精勵を以て顯はる而して一朝事あるにあたり則ち猛戰奮闘人に先じ死を以て能く其純忠愛國の道を効す君が高節豈崇敬せざる可んや君か名譽豈永く百世に垂れざらんや

### 故海軍大尉瀬之口覺四郎君

橋立艦砲術長海軍大尉正七位瀬之口覺四郎君も亦黄海大海戦に於て名譽ある戦死を遂げし勇將の一なり君は元治元年十一月廿五日鹿兒島縣大隅國始良郡蒲生郷に生る覺右衛門氏の第三子なり明治九年五月年僅に十三歳を負ふて郷關を出で遠く東都に登り六月芝新鏡坐なる攻玉社に入學切磋琢磨學大に進み十二年六月年十六にして海軍兵學校に入學し十五年、年十九其業を卒ふるや航海術練習のため軍艦龍驤號に乗込み南洋諸嶋、新西蘭、智利、ペリユー等に巡海し翌年五月歸朝尋で海軍少尉補に任じ十六年少尉に進み廿二年八月年廿六にして遂に大尉に進む廿三年五月軍艦嚴嶋號受取の爲め佛國に出張し之を回航して同艦砲術長に補せらる廿五年四月横須賀砲術練習所教官に任じ廿六年八月海軍技術會議員を兼ね廿七年三月海軍大學校へ入校を命せられ七月十六日橋立號砲術長に補せられて即日戦地朝鮮海へ向け發航したり、資性活潑にして堅忍常に人後に立つを欲せず百事率先して勇往敢進す眞に有爲の年少軍人あり初め海軍兵學校に在るや年齒若しく衆に若ざるに關せず諸學科常に優等にして却て年長者を凌ぎ尤も善く砲術に長ず業成るの後砲術を以て歴任せり砲術に就ては君は實に我海軍中有數の人物にして到所聲望ありき現に特に撰はれて嚴嶋の副艦長に次で名譽ある砲術長の職を執り黄海に於て得意の長技に依て敵に見ゆる勇戦奮闘大に敵を惱して遂に其職に斃る時に年三十一忠勇の譽れ永く國民を照さん

### 陸軍歩兵大尉桑木崇臺君

平壤の役僅に一中隊を以て一躍して黃州城を抜き特功を現はせ進んで船橋里畔を攻撃するに及び敵丸の爲め

に負傷したる勇將あり之を陸軍歩兵大尉桑木崇臺君其人となす君は第五師團第十一聯隊第一大隊第三中隊長として當初より大嶋混成旅團長の部下に屬し牙山の役に際しては朝鮮京城守護の任に當り城下に留まれり我軍を平壤方面に進むるに至て君は先發として京城を渡し九月六日頃一中隊を率ゐて黃州城に向ひたり城は河畔にありて要害を占め下流に渡場あり君の中隊は進て大道を左折し將に下流に向はんとする時圖らずも數百の敵兵に出會し俄に一快戦を開きたり敵兵の一騎我銃丸に中りて落馬するや彼等は忽ち狼狽して何處ともなく逃げ散つたり其狀恰も兎符の如く殆ど手應へなきに呆れたり應て君が軍の河を渡り黃州城に入らんとするや城中又發銃して我に抗す是皆韓兵にして前者に比すれば一層羸弱なり君乃ち一蹴して之を抜き進て船橋里畔を攻撃するに及び十五日大同江の上流なる第一砲壘を抜かんとし終に敵の一丸に負傷したり然れども君尙屈せず此攻撃大に奏功したりといふ平城陥落後同城の病院に入り十月三日仁川丸に乗込み歸朝したり君は石川縣士族にまて本年四十六年なり

### 海津陸軍大尉

我大迫少將の率ゐたる兵の元山津に上陸し平壤に向て進軍したる別働隊中に海津陸軍大尉あり君は久く休職なりしが今回の戦争に復職して元山の一軍に加はりたるあり君は最も能く朝鮮の地理に通し殆んど朝鮮活地圖とも稱せらるゝ程の人なるが元山街道の困難なるに拘はらず進行迅速にして左翼の攻撃に奇捷を博したるは全く君の與つて力ある所なりと云へり此方面に當たりし兵は凡そ二千人計りなりしと地理を知るは戦を知る所以軍人たるもの以て鑑とすべし

### 故海軍大尉高橋義篤君

橋立艦分隊長海軍大尉正七位勳六等高橋義篤君は富山縣の人高橋篤氏の三男母と三輪氏安政五年五月廿五日を以て舊富山藩に生る君天性孝慈氣宇豁達にして遠慮あり又能く事理に通ず君幼時好んで武事を談し屢々大言壯語を以て老成人を驚かし夙に頭角を藩中に顯はす年十四舊藩主前田氏の選拔する所となり今の前田利同伯と共に上京し箕作先生の門に遊び又村上先生の門に入る時に舊藩々費動學廢止す故を以て已むなく故郷に歸ると雖も其志益々堅く誓て海軍に従事せんことを期し單身再び上京す當時君が家極めて貧困學資辨する能はず加ふるに君尙は年少一人の知己なく困難愈極まり志の成らざるを慨し身躬ら伊藤先生に乞ふて學僕となり僕婢と共に苦役に従ふ然れども君は毫も意に介せず寸陰を偷みて讀書すること屢々行く毎に必ず書を携ふに至る苦學暫時にして業大に進む衆皆推して有爲の器と稱す明治七年始て海軍兵學校に入り業を卒へ十二年九月筑波艦に乘組み直ち日本國內を巡航す十三年四月北米 桑港 布味等を廻航し十二月海軍少尉補に任す十四年三月乾行艦乗組を命せられ十六年十一月海軍少尉正八位に叙任せらる十八年十二月攝津艦乗組に移り十九年十二月海軍兵學校砲術教授と爲り同月海軍大尉に任す十二月比叡艦分隊長に補し從七位に昇叙す二十一年六月水路部圖誌料僚に補し七月復び海軍語類編纂委員に補す廿二年海軍參謀部長傳令使に補せられ廿四年六月高千穂艦分隊長に補し次て正七位に叙す廿六年一月清國居留民保護とて同國出張を命せられ福州芝罘の間に廻航す本年五月勳六等に叙し瑞寶章を賜はり六月橋立艦分隊長に補し七月復び清國に出發す而して九月十七日黃海の大海戰に臨み奮闘激戰遂に名譽の戰死を爲したり而して橋立は後ち松嶋に代りて旗

艦となりたれば其戰闘活動の如何に猛烈なりしを察すべし今君の實弟なる醫學士根尾達吉氏の語る所なりと云へる君の最期の模様を聞くも君が分隊を指揮すつゝある其一瞬間敵の三十三彈丸來りて爆發し君の身体は寸片微塵軍帽は裂けて其大半は影もなく帶劔は或は折れ或は曲れり其裂破したる遺物の軍帽を打振れば破裂彈の小片は今尙數個落散りて坐るに敵愾の情に堪へず去れども政府の手當甚能く行届き十七日の海戰に戰死したる各士の遺骸は蓋し水葬したるならんと思の外二十日を以て大同江の沖なる大嶋に於て火葬し其舍利は賢さ御あたりより賜りたる「國の光」と染出したる手巾に包み二重又三重の櫃に納めて嚴重に佐世保に持歸り寺院に於て其各遺族に名殘を惜ませらるゝ等其鄭重なる只感涙にむせふ計りなりと呼此談を聞く者轉慨歎も堪へけんや此の各士の骨肉の碎塵したる小片が實に帝國に光を添へるなり國民果して如何の感かある君は生前に於て常に其夫人を誡めて曰く「凡そ軍人たる者は何時國難に殉するやも圖るべからず予幸ひに戰死せば又以て限するに足る汝徒らに悲哀に沈み家聲を辱むる勿れ」と而して其家を齊ふるや勤儉自ら力め質素を以て家風を爲す然れども其母に奉するや輕煖肥甘毫も惜む所なし今回日清開將に事起らんとせると君横須賀豫備艦副官たり同僚既に前後命を奉じて出發す君之を開き宿望禁し難く扼腕して命の還きを慨す既にして軍艦橋立分隊長に補せらる喜色面に溢れ曰く「國に報するの秋至れり」と氣色躍然たり發するに臨み其夫人を呼び遺書を函中に封入し言て曰く「今回の任命其責最も重し予戰死の報至らば宜しく之を開くべし但し老母をして知らしむべからず」と斷然家を辞す時七月十七日なりき君が戰死の報至るに及んで夫人乃ち其函を開けは是なん一の遺書よして其云ふ所皆死後の經營を夫人に示すものあり中にも遺女には軍人より婿養子

を迎へて我が家名を繼がしめ永く軍事に勤めしむべしとの一條も至て君か忠君愛國の熱情の溢るゝを見るべし女末子今年八歳老母年七十一遺族皆君が薫陶に依り團欒相親み誓て遺書を守り其魂を慰めんことを期せんと云ふ

### 陸軍歩兵中尉三村幾太郎君

元山枝隊の第十八聯隊第二大隊第六中隊長に歩兵中尉三村幾太郎君なる絶快の勇將あり牡丹臺下の玄武門を掠奪開閉して容易に平壤を陥れしめたる絶大の偉勳を立て絶大の名譽を荷ふたり  
元山枝隊は愈進て立見旅團の兵と合し玄武門を攻む玄武門は韓中無比の堅城と稱せらるゝ平壤牡丹臺の眼下にありて泥土大石を以て塗り固めたる平壤中の最大堅門なり敵兵又能く備へ容易に當るへからず我軍は三度まで突貫して激烈の攻撃をなしたれども陥落の色見ゆす空しく我兵を死傷せしむるのみなりき此時君の一小隊を率て門壁近く攻寄せたれば敵は之を壓殺せんとし彈丸を下すこと雨の如く鬼神と雖も進むへからざる死地も在て君は猛虎狂亂の如く剛毅奮闘敢て苦となさず見る者をして其冒險の甚たしき豪膽に驚愕せしめたり折柄部下に原田重吉なる兵卒あり單身躍り出て玄武門の胸壁を攀ち登り乗越ゆて内に入るや君も亦尋て乗越ゆ共に玄武門を掠奪開閉し率る所の小隊をして怒濤の如く門に入らしめ階上より登り樓上の敵を射撃せり嗚呼此大勇者大豪膽者斯の如き者世界何人かある而して君等は敵間の距離極めて近く僅に百四五十メートルなるを以てさしもの勇將勇卒も敵に制下せられ頗る苦戦し殆ど止る能はざらんとしたれども砲兵の擁護ありて遂に能く之を支へり而も玄武門は既に占領し得たるを以て他の小隊續々怒濤の如く入り來り共に玄武門を

守備し此勢に乗して遂に容易に平壤を陥落するを得たり嗚呼勇將の下に弱卒なし此先登の兵卒原田氏と君とか其絶大の偉勳を奏したる大勇驍名直ちに全軍に響き亘り君は即日大隊副官に榮進したり(原田氏の事は下に記す)蓋し君か一大勳章を胸間に閃かすは近きにあらん嗚呼此れ絶大の偉勳なる哉嗚呼此れ絶大の名譽なる哉

### 岡部淺田二中尉

三村中尉と原田上等卒との最大偉勳に繼ぎ今更らに之に劣らざる驍勇の偉勳者を出せり是果して誰ぞ曰く第十二聯隊第三大隊第四中隊第一小隊長歩兵中尉岡部克己君と全第二小隊長歩兵中尉淺田丹治君となり始め二君の部下苦戦奮闘して或は死傷し或は離散し餘す處僅に二十七人に過ぎず去れども意氣以前に倍し即ち相携へて玄武門の上なる一城門に向ひたり門内の敵兵數千人銃丸雨の如く乱射し來りて近づく可らず大隊長宮田少佐其冒險を戒しめて退却を命するに二君敢へて之れに従はず即ち大聲揚言して曰く「我等既に業に死を決せり假令幾万の敵兵來るも敢て一步を退かず若し夫れ今にして退かんか後隊の働きは忽ちよして乱れんのみ此機に臨んては假ひ長官の命と雖も敢て従ふ能はず即ち廿七人を應き相共に奮戦して敵の幾千人を支へたり第十八聯隊第二大隊長門司少佐偶此處にあり副官神田中尉と共に亦二中尉を留めんとし頻りに冒險を説て退却を勧めたり然れども二君尙殿として之を峻拒し固く取りて隨はず偶一丸あり飛んで神田中尉に命中し次の一丸又上等兵澤村寛次氏に命中し見る間に二君を斃したり二君之を見て虎怒龍憤奮戦益力ひるもの凡そ一時間忽ちにして白旗は敵の陣頭に翻へり萬敵の大聲は我軍中に轟きたり二君を合せて廿九士の

勇戦は茲に始めて其功を奏し諸士の名譽は我全軍に傳稱せられ諸士か賜勳の上申は直ちに上長官より執達せられたり先には三村中尉原田兵士あり今又二君及び部下廿七士あり前後合せて實は是勇將中の大勇將、勇卒中の大勇卒と云ふべし而して君等々燦爛たる光輝は只獨り君等に止まらず實に日本帝國の光輝あり吾人等猶ほ君等猛勳の詳報と兵士の姓名傳記を得て一日も早く世に傳へんことを欲するものなり

故陸軍歩兵中尉細井有順君

歩兵第廿一聯隊小隊長歩兵中尉細井有順君もまた平壤の大快戦に於て驍勇の勳をなし名譽の戦死を爲したる一人なり君は舊加州藩士にして明治八年の頃陸軍教導團に入り刻苦勉強し卒業の後伍長に擧げられ次いで軍曹に進めり十年西南の乱起るや君は選はれて出陣し各地に轉戦して大に戦功あり乱全く平定して少尉に榮進之陸軍幼年學校附となり幾も亦く更に進むで中尉に昇り同校の教官たり君が昇進の若しき大に膽氣武力の人に卓れしものあるを見るべし廿六年九月廣嶋鎮臺附に榮轉し本年は將に大尉に昇進せられんとするの令聞あり一旦兵戈を清國と交ゆるや君は大嶋混成旅團の部下に屬し身を衆に擡て戦地に進み屢々敵情偵察の難衝にあたり而して屢奇功あり君が探偵に巧みなる往々人の意表に出て驚嘆震駭せしむるものありといふ成歎の戦既に終へ平壤の大戦あるや君又我一小队を率ゐて勇往直進深く敵地に入りしに敵兵窺ふて之を知り大に喊聲を擧げて君を襲ひ來れり君則ち猛奮激闘叱咤先づ二人を斬斃し更にいよく進む混成旅團は九月十五日船橋里の攻撃苦戦能く勉め進て第二堡壘に逼り大に力戦す此時君は驍勇能く敵彈雨下猛火炎々たる裡に戦ひ身遂に焼け又三個の敵丸に傷けられまも尙屈せざる勢ありしか再び來れる一丸は遠慮もなく君の

上腹部を貫きたり君は一躍高く「運れた」と叫びし聲を今生の名聲として敢なく絶命す享年實に三十有七爰に福間藤太郎なる一兵士あり君の從卒にして忠實の性あり君の最期の時まで君の傍にありたるか此頃君の未亡人へ一通の書信を寄せり當時の有様を知るに足れば今其全文を掲げん

拜啓時下秋冷之砌御座候處御家内様益々御清福之由なるや伺度候降而小生無事奉務罷在候間乍憚御休心被下度此度の戦争にて残念や中尉殿も戦死致され又惣領松太郎も討死致し夫れは九月十五日前七時頃あり中尉殿は右のソより腹に丸か當り其時眼鏡、ピストル、時計、指の爪を少し取り候得共我隊退却致し敵は後より追撃致し其時爪の拾り候其夜第三團の兵は後方より來り平壤を攻め取り候翌十六日敵は退却致し我か隊は平壤に入り其時小生中尉殿の死跡と共に寫眞を寫し候夫より中尉殿の両手の爪を取り又服を切り取り候死跡は小生が燒き林大尉は河村と云ふ元の從卒か燒き爪、服、骨は大隊本部に出し大隊より本國に送られたり爪と服とは小生持參致しても宜敷候得共小生本年歸るう明年歸るかわからずして大隊本部に出し候其他の時計、眼鏡、ピストルは軍用かばんの中に入置候間左様御承知被下度候若し小生無事に歸國致し候得は御面會致して申上候若しあな様方か御歸京致されたならば小生歸國の後東京へ上り御面會致してこそよく申上候若し御歸京致し候得は東京の何町何番地といふ事を御知せ被下度奉願候一寸御報申上候三井中尉殿も右足の指を御打たれ被成て我か中隊にハ士官は一名も無くして第四中隊より今木中尉殿が第二中隊へ來られ候

細井の奥様

福間藤太郎拜



又歩兵第二十一聯隊將校團が君の戦死を追悼するの詞を述べて遺族を慰むる左の文を讀まは君か如何に勇敢にして如何なる功を奏せしや又如何に將校諸士の間に悼まれたるやを見るべし

追悼陸軍歩兵中尉細井有順君之戦死

明治二十七年九月十五日我聯隊は平壤の對岸なる船橋里の敵壘を攻撃する爲め前進す時に君が中隊は聯隊中より擧げられたる前衛となり君は先頭第一に進み敵の砲臺を撃破し敵隊を驅逐すつゝ進んで堅牢無比なる敵壘に至る君亦危険を犯して之を奪取せんとし奮勇突進遂に敵陣に當つて斃る我將校團は實に忠節勇敢なる君を失ひ君の爲め亦國家の爲め追悼措く能はず下士卒に至る迄涕泣せざるなし 雖 然 君の奮闘は大に師團の戦鬪に利益を與へ師團が大捷を得て敵の根據地平壤に進入したるは全く君が力なり嗚呼君の名譽亦大なりと云ふべし是れ獨り君の名譽のみならず我將校團の名譽なり君生きては忠勳績を國家に立て死しては芳名を竹帛に垂る君も亦遺憾とする所勿るべし必ず欣然地下に眠せらるゝならん我將校團は君か死を惜むと共に君が國家に盡し萬世不朽に名譽を残されたる美を稱して止まず茲に一同追悼の詞を述べて聊か遺族諸子を慰むと爾云ふ

明治二十七年九月十七日

歩兵第二十一聯隊將校團

平壤の大捷利は優に萬國に向て日本の武威を耀かし君の死して烈々名譽を擧ふ亦何の恨むる所かあらむ君資性温厚事を執る淳々として倦まず曾て陸軍幼年學校にあるや惘然に生徒を薫陶して其誠を効せり然れども其精神快活意氣豪壯故を以て衆生徒悉く畏服したりといふ君の妻女は府下内藤仁氏の娘なり故家に歸つて

君の動靜を待つもの日あり君が戦死の報に接するや忽ち緑の黒髪を切り放ち君の冥福を吊ふの傍ら凜然として君の遺女(本年五才)を養育し後事欠くる所あしといふ

### 河内陸軍歩兵中尉

元山枝隊の平壤に入らんとするや牡丹臺の敵兵頗ぶる奮戦し銃相接するに至るも尙且つ遁走の色なし此時我軍中一尉官あり單身隨つて敵軍中に入り長劍を振つて隊兵を薙き斃し權橋奮闘殆んど一時間及及び光尖觸る處鮮血迸らざるはなし其驍勇言ふ可らず是に於てか敵始めて辟易す是實に抜刀奮戦の先登にして部下の兵皆其勢又勵まされしといふ此尉官を誰とす實に我第二十一聯隊第二大隊の中隊長河内陸軍歩兵中尉其人なり嗚呼眞に日本帝國の尉官なる哉

### 陸軍歩兵中尉富田七郎君

陸軍歩兵中尉富田七郎君は衛生隊擔荷第一中隊長として混成旅團に附隨し平壤攻戦に臨みたり當時旅團兵か第一壘を乗取るや敵は第二第三の堡壘より猛烈の射撃をせし爲め我軍の死傷頗る多し我衛生隊は豪膽にも常に敵を去る僅かに五六十メートルの所まで潜み行きて其職務を行ひたり此日敵は我乗取りたる第一壘に向つて突撃するの形勢あり其第一隊は既に據守せし壘壁を出て吶喊し我兵亦之に應せんとす此時君等は第一壘の後濠まで進みて罅隙所を設け既に擔荷小隊長 曹長 戸山濱藏氏を始め七十餘名の負傷者を有せり故又君等衛生隊の苦心は一方ならず斯くも見たる君は直ちに令を部下衛生部員及び擔架卒に下す盡く振劔せしめ以て傷者を看守して敵の來襲に備へ且聲を勵まして曰く「衛生隊は最後の時期まで一歩も負傷者の周圍を去るへか

らす若し背く者は斬らん」と部下は爲めに死を決して驟起し以て敵の來襲を待てり須臾にして本道の我歩兵及ひ工兵は死力を盡して敵に當り之を追ひ却く衛生隊爲めに難を免るゝを得たり嗚呼斯の如く身を死地に置て職を行ふ衛生隊の任亦重しと云ふべし而して君亦剛膽機に臨んては死を忘れて職に服す其義勇豈他の主戦軍に譲らんや

### 故陸軍歩兵中尉今井健君

故今井健君は第五師團歩兵第十一聯隊附の中尉なり鹿兒島縣士族にして故大阪第七旅團長今井少將の第三子たり資性沈毅寡黙にして妄りに言笑せず殆ど乃父の風あり夙に士官學校を卒業し明治廿一年少尉に任じ廿五年進んで中尉たり今回の變起るに及んで君亦第一派韓軍隊の中にあり大島混成旅團長に屬して朝鮮京城に屯し去七月廿三日我大島公使が大院君と共に王城に入らんとするの際には君は一隊の兵を率ゐて之を護衛し途にして韓兵の遮りて入城を拒むに遭ふや君は大喝一聲劍を抜て一人を斬殺し部下を指揮して一舉之を撃退せり其豪邁率ね斯の如し平壤の役に及んで君は激戦の前夜仲光の明月を賞し坐るに詩を賦し吟じて曰く

出國十旬始接敵、中秋今夜明更明、舉杯共說明朝戰、平壤高臺詠既望、  
決戰迫明曉、捐生誰不哀、我魏蘇二萬、射聲却如雷、

翌朝即ち九月十五日君は船橋里の戦ひに血戦して死す年三十年五月、秋夜遠征明月を賞し吟詠自から樂み風懷洒落沈勇思ふべし陣中傳へて嘆賞せざるなし是亦一個の大丈夫名譽赫々たり

### 陸軍歩兵中尉柄田鑑次郎君

陸軍中尉柄田鑑次郎君は歩兵第十八聯隊附にして豊橋衛戍に在り毎夜必ず握飯を枕頭に置き武備少しも欠くる所なくして就眠すること居常乱世に居るか如く是れ不時の用に備ふるものにして其熱心感するに餘あり武人たる者の心懸當に斯くせざるべし然れども大平の聖代なれば今までは之を要するの時も亦く毎朝之を令兒に與へしといふ今や日清交戦の時となり君勇憤平壤を攻むるの機に際し諸事の武備皆之に類し大に奏功したりと君の起居の如きは眞に武人の鑑とすへし

### 故陸軍歩兵中尉町口能植君

陸軍歩兵中尉町口能植君は牙山役の前竹内騎兵少尉以下六氏を率ゐる斥候の任務を盡し八月十日駒嶺山麓に於て多數の清兵に襲撃せられ奮戦激闘して遂に瀕く戦死したる勇將なり牙山役後大島旅團長は中和に進軍するの時九月九日偶此戦死の地を過り君等を追想して惨然たり乃ち旅團長は長岡參謀以下の諸將と共に山を拓きて君等斥候隊の爲めに新墓地を造り墓表を立て招魂の祭典を擧げ涙を吞んで祭文を朗讀し其義魂を慰めたり今君等の驍勇なる偉名と至大なる勳功とを明にするか爲め茲に其全文を記さん

維時明治廿七年九月十日混成旅團長陸軍少將從四位勳三等大島義昌清酌庶羞の奠を以て陸軍中尉町口能植、陸軍騎兵少尉竹内英男、陸軍騎兵一等卒寺澤才八、陸軍騎兵二等卒西莊平、同田原八郎、通辨佐伯小太郎、同小林等、等の靈を祭る中尉等義に重任を帯び遠く本軍に離れ炎熱の候を犯し深く不熟の地に入り辛苦に耐へ敵情を探り屢々重要なる報告を致し以て其詳細を知ることを得せしめたり特に本旅團の成敗牙山の敵を攻撃するや茲も後顧の患なく而して京城附近へ凱旋の後數日間安然人馬を休養することを得たるは

是皆偏へに中尉以下が其任務を盡したるの結果なりとす嗚呼哀哉去月今日の曉天俄然敵の侵襲する所となり衆寡敵せず不幸にして敵彈に觸れ屍を中和の野に暴らすに至る噫々雖然此一死は實に全軍の爲めに偉大の利益を與へたるのみならず將來軍人たる者の一大鑑鏡にして功名永く竹帛に垂れて朽ちず死して餘榮あるものと云ふべし今や本旅團は中尉等に密を加へたる平壤の敵を攻撃するの機會に遭遇し此地を經過するに當り中尉等奮戰激闘の末遂に戦没したる當時の慘状を追憶し義昌等感慨措く能はず必ず此敵を殲殺し中尉等を地下に慰するの期近きにあるべし靈乎靈あらば向くは饗よ

陸軍歩兵少尉桂武市君

元山枝隊の平壤に入らんとするや牡丹臺の敵兵頗る奮戦し銃相接するも尙且つ遁逃せず此時河内歩兵中尉等師躍し長劔を振つて敵中に入り奮戰數次で又躍出でたるは即ち第十旅團副官歩兵少尉桂武市君なり君等の猛勇一殆ど千に當るの勢あり流石に奮戦の敵兵も茲に始めて辟易せり此激戦に君は敵丸の爲めに左の股を射貫れたれども更に屈せず跋にして尙能く力戦し毫も創傷あるを知らざるものゝ如しと其驍剛にして勇氣の盛なる軍中多く見ざる所なりしといふ

陸軍歩兵少尉大森健之助君

歩兵第一聯隊の旗手に活潑有爲の壯年少尉あり平壤畧取の前船橋里の大乱戦に砲彈雨注の間を潜り勇進して敵に逼り且能く聯隊旗を擁護して驍然たり愈前進して堡壘に入るや聯隊旗を壘上に懸して後進の兵を蔽す然れども聯隊旗を護ることは即ち帝國を護るものにして其貴きこと之に過さたるものなければ壘に入るや先

つ穴を壘中に鑿ち一旦緩急あらば軍旗を其中に埋め而して潔く戦死せんと決心したり其義勇敢爲燦爛として仰くへさものあり此絶快なる旗手少尉を誰とかする曰く即ち實に大森健之助君其人あり君は廣嶋縣の士族にして當時二十八年二月の壯年男兒あり

故陸軍騎兵少尉竹内英男君

平壤進撃の前大島旅團長の指揮に應じ一隊の斥候兵を率ゐる黃海道中和附近に進み清兵の先鋒隊と衝突し名譽ある戦死を遂けたる故騎兵少尉竹内英男君は埼玉縣埼玉郡黒瀬村の人なり幼にして慍悍常に群童を集めて戰闘遊戯をなし自己これか將官となり敵手を屈せざれば止まず稍や長ずるに及び草野に在るを肩ぎよしとせず自から父母に強請して陸軍幼年學校に入り後騎兵科を専修し業益す進むに及び轉じて士官學校に入れり爾來一意軍學に心を傾け傍ら獨乙學を研究せしが未だ幾干ならずして巧みに同國語を語るに至りしかば學友等皆君の堅忍不拔の資性に富めるを驚嘆す業を卒て後士官に擧られ初めて習志野の大演習に赴きし時一二名の兵士と共に斥候を勤め敵營間近く進みたり折しも敵の歩兵一小隊偵察に來たりて之れを知り正に突撃の狀を擬す君神色自若更に知らざる爲して敵營を案じ然る後徐に馬首を廻せり同隊の士官等君の舉動を以て傍若無人となし中隊長の許に到り彼れ實戦にあらざるを輕侮し斯くの如き亡狀をなす甚だ驕怪ありと激昂して止まず中隊長その言を理ありとなし終に審判官に上申す演習終つて後審判官等君を引いて之れを詰る君從容答へて曰く「斥候の勤めたる深く危地に入て敵情を偵察するにあり偶々敵の形影に接したりとて忽ち退却せば何の地に偵察の任を盡すを得ん」と辞色整々毫も屈する跡なし審判官等大にその剛進を嘉し遂に君の

動作を以て毫も不都合なしと判決す果せる哉君と今回の實地戦闘より方早く已にその器量を示候に願はず後  
 ち町口中尉等六氏と共に深く敵地に入り偵察の任を全うし八月十日敵の大敷に衝突し雄戦激闘して遂に駒  
 山麓に斃れ有爲の資を靡らして逝矣呼惜むべし大島混成旅團長か軍を中和又進むの途次九月九日此地を過  
 り君が勇戦して敵弾に斃れし處を見るに 傍の谷間も腐朽したる馬骨猶存してあり是は是れ君の乗りて君と  
 共に戦死したる愛馬の骨たるを知り君の最期の當時を追憶して一隊爲に撫然たり大島少將は他の將校と共に  
 君等外六氏の爲に山を拓き墓地を造り墓表を立て招魂の祭典を擧げ祭文を讀んで其義魂を慰められたり其文  
 (町口中尉の條に出す)を一讀すれば君等の勳功の至大なるを知るべし而して君の戦死の報は九月十九日を以  
 て大島旅團長よりの懇篤なる通知書により遺族の許に達す同郡の徴兵尉勞義會委員は廿三日を卜し同村眞淨  
 寺に於て弔祭を執行す時に縣知事郡長監視區長衆議院議員及び各種名譽職員臨場し千家知事關根村長以下祭  
 文吊詞を朗讀するもの數十名同寺の住職は大施餓鬼を寄附し有志參拜人無慮數千名に達し境内立錫の地を餘  
 さす式後有志者は庭前に於て大宴會を開らざたりと云ふ嗚呼君の死や惜むべしと雖も國家に盡す欠くる所な  
 く功名赫赫又門閭に旌表する此の如きを得ば死して餘榮ありと謂ふべきなり

故海軍少尉伊藤滿嘉記君

故松島艦分隊士海軍少尉正八位伊藤滿嘉記君は氣銳將に大に爲すわらんと欲し然ゆるが如き英志を負ひ終に  
 廿八年の壯齡を一期として身を報國の大義に効せる勇將なり君は宮崎縣日向飢肥の人慶應三年一月九日を以  
 て生る家世々祿五百石を食み藩の上太夫たり父を川崎絳藏氏といふ君幼にして伊東圖書の役を襲ふ圖書は成

瀬隼人の弟豊後守正武の子なり圖書早く没して子なし君則ち養はれて子とある人と爲り深沈大度苟くも喜怒  
 せずと雖も和氣飄然として眉宇の間に溢る年十三初めて大阪及び東京に游學す明治十九年海軍兵學校に入り  
 卒業の後廿二年海軍少尉候補生を命せられ八月布哇に遠航す廿四年二月海軍少尉に任し十二月正八位に叙せ  
 らる廿五年五月横須賀水雷隊攻撃部附を免せられ金山分隊士に補す同年より廿六年に至り前後朝鮮に航する  
 こと實に二回大に航海の術に於て自得せる所あり本年四月本職を免せられ松島艦分隊士に補せられ露邦諸港  
 を巡港す日清の役起るや君豐島の戦に奮闘し大に武勇の譽を顯せり 戦終るの後書を一老婦人によせて曰  
 く此度生來始めて實戦に臨み申候砲丸の飛び來る者は中々凄じく候へ共存外に中り不申尤も世の影にも下  
 手はどこはし避けられずと申候へは敵の拙きが仲々侮られず候云々此の一片嘲嘘の語は是君か不婚の途に上  
 るの讖となりぬ九月十七日海洋島の激戦に際しては君更に學生の技術を以て苦戰奮闘彈丸雨注の間に馳騁し  
 意氣凜然動作乱れず同乗の志摩大尉と共に彈丸を速射砲に裝置し一發の下に敵艦を撃碎せんとせるの一刹那  
 敵の流彈轟然風を破りて君が赫に中り大尉と共に粉砕し雄骨榮筋半空に迸散して滿身の丹血は空しく黃海の  
 碧波を醜す、あゝ壯なるかな君常に人に語りて曰く「一旦緩急敵艦と海上に相見らば我は一死以て屍を  
 魚腹に葬らんのみ」と夫れ死は泰山より重く或は鴻毛より輕し君今大義に殉して宿昔の志を就す男兒の意氣  
 茲に至りて酬へりといふべし志摩大尉は君と共に同郷の人其松島艦に在る既に奇なり而して又同じ彈丸にあ  
 たり同時に斃る更に太だ奇なりあり前世何等の因縁のある今海南の一版邑より此兩偉男兒を出して共其美  
 を成さしむ聯璧と謂ふべし

### 後藤陸軍工兵少尉

鬼竹内と稱せられたる我兵站部副官騎兵大尉竹内盛雅君(傳前に出す)が九月廿四日臺封附近龍宮の地に於て東學黨の爲めに斃れたりとの報廿六日兵站部に達するや後藤工兵少尉は直ちに兵卒廿二名を引率して大尉の被害地龍宮に至りしに賊の影だになし乃ちこゝに一泊し翌日山陽附近を採撿せしも亦一の賊兵なし已を得ず廿八日聞慶は歸らんとし間道を來りしに石門と稱する地に赤旗二本を立てたるを見る君は以て東學黨となし先づ斥候を放ちて偵察せしめしに果して見る所の如し敵兵我兵あるを知り直ちに砲撃を始めたり我兵乃ち之に應戦し頭領と覺し者射殺し暫時にして潰走せしめたり君は是れ曩きに大尉を斃せし賊ならんと思ひ其直に復讐し得たるを快とし火繩銃百五十八挺、鎗十四本、旗二本、彈銃九貫文、馬四頭、陣羽織の如きもの一枚と分捕り且つ彼等の據りし梨木亭及び糧食、彈藥を燒き拂ひて歸せり其時我兵は微傷だも負ひしものなく敵の死傷者は頗る多かりしといふ此少數を以て大數に當り能く斯の如し彼等韓人たる者猛省すべし因に配す此石門と稱する地は豐大開征韓の際韓兵の據て守りし要害無双の古戰場ありといふ

### 故海軍大軍醫三宅貞造君

故比叡軍醫長海軍大軍醫正六位勳六等三宅貞造君は愛媛縣人にして伊豫國野間郡菊間に於て安政元年十二月廿三日生る幼名を鷹次郎と稱す明治七年九月海軍を醫寮の外來生徒なり翌年四月本科生に擧げられ十三年春に至る迄英人「アンデルソン」氏の醫學教授を受け同年二月海軍を醫副に任せられて以來多くは軍艦に乗組み醫務を勉勵せり君稟質温和にして病者に接する懇切忍耐ありて能く難事に屈せず遠洋航海中と雖も醫事

に關する取調は頗る精密に調査せられしといふ九月十七日黃海の大海戰に臨み名譽の戦死をなせり時に年三十一其人を失ひしは惜しむべきなり

### 故海軍少軍醫村越千代吉君

故比叡乘組海軍少軍醫村越千代吉君は明治元年八月三日を以て紀州和歌山廣瀬辨財天町に生る資性活潑能く學を勉め郷里に於て普通の學を修め十六年九月東京に出て海軍を醫生徒の募りに應じ試験及第して入學を許され常に優等の成績を得同廿一年卒業して海軍少軍醫に任せらる君職務に熟練し意らず衛生の注意周到病者に接し甚だ懇篤あり君猶春秋に富み後來頗る望ある人なりしが九月十七日黃海の大海戰に臨み能く職を全うし遂に名譽の戦死を遂けたり一面職あるもの皆な之を惜まぬはなしと云ふ

### 故海軍士官候補生橋口戸次郎君

故橋口海軍士官候補生は鹿兒島縣士族にして明治三年一月七日同縣串木村下名濱ヶ城に生る幼名を藤吉と稱し後戸次郎と改む家計甚だ豊かならざるを以て父兄の農業に従事し君も小學校に入る頃より傍ら稼穡の業を執り以て父兄の勞を分り然れども穎悟機敏にして且つ記憶力に富み平生の學科一も遺忘することなく小學全科を卒業するの間常に首席を占めたり君は又深沈寡言父兄に事へて甚だ孝順なれば郷黨擧て奇童となし幼名藤吉なりしを以て大閑と稱名し暗に他日の遺語を期せり小學卒業後東上の志を果さんと欲するも學資の乏きに苦み今の衆議院議員長谷場純孝氏に謀る氏に其有爲の財たるを識り君の實兄勇之進氏は十年の役に警視隊にて從軍し勳章をも所持する人なれば喜んで君の志を成さしめんとし暫時長谷場氏より旅費其他の費

用として四十金を與へ遂に上京せしむるに至れり君は一時折田平内氏の食客となり苦學の末首尾能く海軍兵學校の入学試験に及第し二十一年七月同校生徒たることを命せられ二十五年七月帝國日本海軍兵學校將校生徒課程學術卒業證書を授與せられ直に少尉候補生を命せられ同時に實地練習の爲め金剛乗組となり同年九月品海坂鋪北米合衆國へ航海し二十六年四月無事歸朝し五月に至り更に金剛乗組を命せられ六月に至り浪速に轉任し八月に至り露領及び北海道沿岸へ航行し九月留別へ歸着し十一月居留民保護の爲め布哇へ向け出航し本年四月品海へ歸着し葛城へ轉乘を命せられ七月に至り又嚴島へ轉し同月二十日改めて赤城乗組を命せられしなり黃海の役赤城艦の苦戰激闘は世の知る所なり而して赤城が敵艦定遠、鎮遠の二大甲鉄艦と奮戦の際君のメンコストの司令塔にありて敵艦の距離を計り砲手を導き偉功を奏せしめし無慘にも敵丸の爲めに腹部を貫かれ死に垂んとしたれども何等の義膽を尚距離を呼ぶの聲を絶たざりしと而して程なく名譽の最期を遂られたるは勇まきと云ふべし君時に年廿四年九ヶ月嗚呼此壯年にして此勇あり永く以て軍人の勳鑑とすべし

## 戰鬪下士卒

### 陸軍 擔荷兵 曹長 戸上 瀨藏 氏

混成旅團の衛生隊中一曹長あり剛毅勇人をして感奮せしむ其人は誰ぞ曰く是なん擔荷第一中隊第一小隊長

なる曹長戸上瀨藏氏なり氏は擔荷中隊長富田中尉の配下にして九月十五日の混成旅團平壤攻撃の際熱心職務に執掌する一利那敵丸の爲めに脊髓を打抜かれ我兵の既に乗取りたる第一壘後の濠に設けし綱帶所に七十餘人の負傷者と共にあり時恰も敵勢烈しく將に突撃し來らんとするの危険に際せり富田中尉は厲聲して衛生隊に死を決して傷者を守らしむ此時戸上氏曹長代理某に語て曰く「吾傷重大にして快復の見込なし而して時已に斯の如し君幸に吾を斬て他の負傷者を看守せよ」と某否んて曰く「君重傷を負ふと雖も猶君あるは味方數十人の力あるに勝る君決まて斯ることを云ふ勿れ」と戸上氏は然りと答へつゝ死を忘れて奮然劔を抜て起ち眼をいからして敵壘を睨み再び其場に倒る見る者其勇壯剛毅にして且つ忠義の情溢るゝに感奮せりといふ嗚呼日本男兒ある哉

### 陸軍 歩兵 曹長 川崎 伊勢雄 氏

文祿の役小西行長忠州より進みて京城を襲はんと欲し迂廻して臨津を渡る津頭一船なし時に曹根孫六なる者あり裸體刀を帯び躍りて江中に入り泳ぎて前岸に達し船を奪ふて還り勇名を千載に傳ふ今や我軍の勇將猛士雲の如く韓山に入る曹根孫六をして特り其名を擡にせしめんや果然其の勇氣に數倍する傑ありて出て泳ぎて大同江を乱り船を前岸より奪ひ歸る此勇士の何れの人にして其名は誰ぞ曰く高知縣土佐郡鴨田村の人陸軍々曹川崎伊勢雄氏と呼ぶ快男兒是なり當初我軍の斥候騎兵は七月の下旬より既に北方に進み遠く大同江邊にあり時に對岸の平壤に清軍漸やく南下して此に警せんとす我騎兵は謀して之を知り其未だ來らざるに先だち竊かに江を渡りて清兵の設置せる平壤の郵便電信局を破毀せんと欲し八月一日の夜渡舟場に到るに一

隻の舟をも見ず衆手を分ちて江の上下を捜索し僅に一隻の漁舟を得踴躍して悦び直ちに之に乗りて北岸に赴かんとす會たま煙霧深く江を封して渡るを得ず其夜は終に空しく退き翌日は更に敵情を探り三日の夜再び大同江に到るに此時は既に一隻の渡船無し我斥候隊中活氣の面々は大同江大なりと雖も何程の事かあると或ハ馬を江に乗り入れて佐々木高綱を學ばんとするものあり或は軍服を脱し裸體水に入りて彼岸に達せんとするもあり然れども時已に霖雨の候に當り濁流滾々黒浪を捲き水勢極めて駛く皆其の目的を達するを得ず中途にして引返へせり時に川崎氏之を見て船甲斐なしとや思ひけん裸體劍を口にして江に投し滔々たる奔流を物の數ともせず抜手を切つて泳ぎ行く其勇氣蛟鱗も爲めに辟易せんす有様なり氏は同夜四更二千メートル餘の大江を難なく泳ぎ渡りて北岸に對し一息つきし程も無く霹靂一聲天を碎く計りの警砲と共に今迄寂寥たりし岸上より俄に彈丸雨の如く奔射し來り面を向くへくもあらざりしかはコハ敵に覺られしか片時も猶豫すべきに非らずと前後左右に眼を配はりしに其の上流の岸頭微かに敵舟一艘の碇繋しあるを認め素早くも彈丸を胃して之を奪ひ悠然として之に乗り楫さして歸り來れり南岸に在つて其の砲聲を聞き氏の安否如何にも氣遣ひ居りし我斥候兵は之を見るや一同手を拍つて其剛膽と勇氣とを嘆賞し衆直ちに之に乗りイヂヤ消兵を取控ざくれんと已に其準備を整へ正に渡り掛けしも早や東天白み渡り地上の萬象漸く其姿を顯はし來りければ遂に其意を果さずして引き取りたりと云ふ

又是より後清兵は北岸の警戒益々嚴重を加へ五六日にして衛兵六七千の多さに達せり依つて我斥候隊は中和に在つて敵の動靜を覗ひつゝありしに十九日の夜一半の斥候は交代して微睡と樹下石上に試みんとする時忽

ち吶喊の聲起り敵兵二百餘四方より來り圍むスツ清兵の不意撃ちそと一同蹶起鋒を揃へて突進せしも我兵僅かに十騎計り衆寡既に敵せざるに尙ほ且不注意の襲撃なれば我兵如何に勇猛なりと雖も勝敗の數既に定まる然れども日本男兒の本色として之を物の數ともせず奮戦激闘する事雲時にして我兵死傷する者數名竹内少尉は挺身銃鎗を揮つて一方の圍みを破り衆をして退却せしめんとせしも不幸敵丸に當りて馬より落ち頼りに後へくと指揮したり此時彈丸飛び來り猛烈激闘しつゝある川崎氏が乗る所の馬の腹部を貫く馬跳つて驚るとたん氏も馬上に支へず墜落する時偶々兩足を駿馬の下に敷かれ引抜かんとせしも力足らず空しく蠢動き居る時敵兵愈迫り來り氏は正に敵兵の銃鎗の下に一つさにせられんとす氏は今之是れ迄なりと敷かれながら驚馬を楯としピストル取直し必死となりて敵兵目掛け頼りに連射したるが少しく敵の色めくを見る折柄漸く敷かれたる足を引抜きサーベルを掉つて敵軍に突入し當るを幸ひ縦横無盡に薙ぎ立てければ二百計の清兵は唯一人なる川崎氏の刀風に斬り惱まされ忽ち退軍ラツバを吹き鳴らして引去りたり此激闘の際氏は三ヶ所迄軍服を打ち貫かれたれども身に微傷だも蒙らざりしといふ嗚呼氏の驍勇猛膽豈昔の曾根孫六等の比ならんや吾人の早く此勇士の胸間赫々の勳章を閃かせる壯觀を見んことを欲して切なり

稀世の勇士原田重吉氏 絶大の勳功兵

平壤の役稀世の大猛勇を現はし稀世の大勳功を立てたる者は一等卒原田重吉氏其人なり氏は是れ如何なる人乎豊橋衛戍歩兵第十八聯隊第二大隊第六中隊の兵卒にして元山枝隊に屬し平壤攻撃に苦戦し來れる勇卒なり嗚呼僅に一の兵卒にして而して全軍第一の勳功者と稱せられ稀世の姿功者と賞せらる果して如何なる猛勳を

なせしそ曰く實に氏は万夫不當の勇を以て先登第一玄武門を掠奪し開閉して我名を四海に博したるなり  
 始め元山枝隊の第二第三兩大隊は湖寧枝隊と合して平壤牡丹臺下は嚴兀たる玄武門を攻撃す此門は平壤中要  
 害無比にして而して門は皆泥土大石を以て塗り固めたる最大堅牢のものなり且敵は精を抜き勇を集めて死守  
 するを以て其堅にして抜くべからざることを他の堡壘の比にわらず我兵攻撃最も力めたりと雖も敵は門の上部  
 なる堅壁に據り連發銃口を揃へて乱射する勢の猛烈なること當るべからざるものあり我軍の勇壯なる此雨  
 の如き彈丸の間に進み三回まで呐喊を試みたりとも敵兵の防守益激にして其功を奏せず唯空しく我死傷の  
 夥しきを見るのみにして苦戦實は云ふべからず斯くとも見る原田氏は虎の如く怒り獅子の如く荒れ單身一躍  
 勇進するとも見る間に彈丸寸地を餘さず奔射し來る中を冒し一丈に餘れる玄武門の高壁を攀り登り門内に飛び  
 入り山なす敵を追ひ除け追ひ除け狂戦奮闘して門障を開かんとす此時早く原田氏を率る六中隊長三村中尉一  
 傳前に出つ原田氏に次て壁を越ゆる奮激突戦して原田氏をして遂に門を開かしめたり氏等か其膽の絶大なる  
 其勇の猛豪なる鬼神を驅る我軍も之を見て威敵一度も起り爲めに勇氣を百倍せざる者なし斯くとも見る六中隊  
 の兵は二勇者に勵まされ且門障の開きたるを以て「それ彼の二勇士を見殺しすな」と一度に進んで之に入る敵  
 の此勢に辟易して城門を退きたれども其上部なる敵は距離極めて近く連發銃の乱射又極めて甚たしく殆ど支  
 ふべからざらん勢なりし折柄城門の障既にして開除したれば我軍は怒濤の崩るゝ如く以て突入し一撃して敵  
 に白旗を掲げしむ是に於てか我軍の攻撃全く其功を奏し歡聲四方に湧起するに至れり嗚呼此日原田氏か勇な  
 かりせば猶幾多の苦戦を要せしなるべし氏の功勳實に絶大なりと云ふべし而して氏の留名は直ちに全軍に響

き互り四海に轟き贊嘆感賞今猶止まず何たる偉丈夫そや聞く所によれば氏は功を以て即日上等兵に進められ  
 尙偉勳を其筋に上進したりと云ふ不日身に餘る大勳章を胸間に懸るに至るや明なり嗚呼羨むべし此好男兒  
 嗚呼敬すべし此大丈夫  
 世人は一齊に此稀世の勇士稀世の大勳者か何れの人にして又如何なる性行經歷ある人なるやと知らんと欲し  
 て切なるべし吾人も亦之を記さんと欲して切なる者なり請ふ下文を讀んで氏の大功を奏する決して偶然にあ  
 らざるを知れ  
 三河國古へより多く豪傑を出る南朝の忠臣足助重範此地に起つて勳王の徒天下に響應し東照神君此地に勃興  
 して名將勇士亦た雲の如くに現はる而して原田重吉氏も實に同國東加茂郡豐榮村字日明と稱する地に生れた  
 り豐榮村は足助氏奮起の地たる足助を距る事僅に一里東照公勃興の地松平を距る僅に半里計り而して今や此  
 の大偉勳者を出すもの決して偶然に非ず  
 氏は明治元年十月を以て生れ父を孝七といひ母は既に没す一人の兄あり菊五郎といふ故わりて家を出で今在  
 らす妻はウツ二才の長女を抱きて父に奉仕す氏か家農を以て業となし些少の田地を有すと雖も以て妻子を養ふ  
 に足らず家計極めて困難なる爲め氏は坊より近傍の家に傭役し艱難備に嘗む然れども性活潑剛毅にして寡  
 慾なり毫も之を意となさず其人に接する最も温厚篤實にして鄉黨の爲めに愛せらる後思ふ所あり奮然として  
 東京に出て暫らく諸所に奉公の身となりしが明治二十年六月徴兵適齡の爲り故郷に歸り合格して豊橋第十八  
 聯隊第六中隊に入る時に二十一年十二月なり超えて二十三年十月歩兵一等卒となり二十四年十一月現役滿期

聯隊第六中隊に入る時に二十一年十二月なり超えて二十三年十月歩兵一等卒となり二十四年十一月現役滿期



を以て豫備役に編入せられ再來家に歸つて業を勵むの際今回の日清事件起ると共に再び召集せられて舊隊に復し渡韓の後元山杖隊に従ひ平壤に進み遂に此稀世の大功を彰はせり

今氏が入營以後今日に至る二三の言行を録せば氏は元來射擊術に長じ又器械操能を能す特に障礙物飛ひ越への如きは最も其得意とする所なり之れが爲め賞状を受くる前後二回想ふに今回の大功を奏する實に是等の業あるが爲めなり氏又在營中能く規律を遵守し品行方正にして且學術技藝に熟達するが爲め特に善行證書を受く又氏が常人に異なるの一般を見るに足るべきは本年夏頃の事なり氏は農耕に従事するを厭ひ自作の田畑を悉く他人に預け自身は別に日傭稼ぎをなす隣人怪しんで其故を問へば曰く「聞く今や朝鮮正に事あらんとす何時召集の命あらんも知る可らず故に豫じめ今より其準備をなさざる可らず」と隣人屢ば忠告するも毫も之を聞かず人皆以て狂となす然れども氏亦た顧みる所なし孜孜として他人の爲めに備役するの際本年八月に至り果して召集の命あり氏欣然として曰く「時到れる哉」と衆に先んじて應召す其一たび軍服を着するや牀度嚴肅儼として軍中に在るが如し曩きに誹しる者始めて氏の職量に服し大に感賞せりといふ又此頃氏の令妻ヨウ女の三河尙武會員に語りし中に「重吉は非常召集一月前より日々稼を終りて家に歸るや夜間庭にて根棒を打振り營中訓練の真似をなし家事の如きと更に之を顧みす只々朝鮮事件の話をのみ爲し居たり云々」と語りしといふ以て其素養を知るべし氏應召後戦地に赴くの前家族に宛て、二回の書信をなす其文中に「軍人一たび家を辭して戦地に臨めば又再び生還するを期せず假令如何なる事あるも家人たるもの決して未練の振舞ある可らず我れ既に死を決せり此他何事もいふ可き事なしと雖も唯だ一事心に掛かるは一女兒なり我

れ萬一の事あるとも成長の後天晴軍人の子女といはるゝ様今より家庭教育に注意すべし」と而して復た一語の家計上の事に及ぶなし眞に毅然たる大丈夫といふべし嗚呼素行既に此くの如し今回の如き大動功ある亦た宜くなる哉

稀世の勇士藤田兼吉氏 大功兵

玄武門を掠奪開閉して雷名を四海に轟したる原田重吉氏に次ぎ又之に劣らざる大勇者大動者を出せり是れ曩きに玄武門を開きたりと世に誤り傳へられたる藤田兼吉氏其人なり

氏何れの人にして又如何なる殊勳者なるか曰く氏と靜岡縣志太郡大洲村宇土端の産にして先年參河豊橋衛成歩兵第十八聯隊に入り三ヶ年の現役を終へ豫備兵籍に置かれ歸郷し居たりしに今回日清戦争に際し非常召集に應じて元山杖隊佐藤大佐に従ひ平壤に激戦し單身進んで堅牢ある七星門を掠奪して之を開き武勇の雷名を轟したるなり

始め元山杖隊の平壤第四壘に迫るや敵は全力を竭めて防戦頗る猛烈なり我軍獅子王の勢を以て之を攻撃したるも敵は愈死力を盡して戦ひ流石の我軍も屢進みて屢退き容易に陥落の模様なき折柄氏忽然衆を排して進み城壁に攀ち登り遂に其七星門を掠奪して之を開き我軍進攻の端を啓きたりと云ふ此報未だ確然たらすと雖も世の新聞紙は既に之を傳へり蓋し曩に氏か玄武門を開きたりと傳へたるは此七星門を開きたるの報を誤り傳へしなるべし若此報をして確然たらしめは是氏も亦原田氏に劣らざる偉丈夫なり其一大殊勳者たる知るべきなり吾人之其確報と及び氏の性行經歷とを聞くを得て再び之を記さんとす

陸軍騎兵東端林平氏

大島少將平壤進撃の途九月十日斐場洞附近に於て平城騎兵少尉は石井騎兵軍曹をして二名の騎兵と共に敵情を視察せしむ石井軍曹忽ちにして斐場洞の向ふ斜面に敵兵二三十騎逍遙するを認む乃ち屏息して窺ふ間我が一騎聲を擧て韓人の逃れて支那兵に通ずるを告ぐ軍曹之を叱すれども覺らずして止めず敵忽ち其聲を聞き發砲頼りなり軍曹他の二騎と共に銃戦せしも衆寡敵せざるのみか地の利頗る悪しきを以て少しく退却して斐場洞の此方に來り顧みれば一騎落馬して谷底に在り是れ我騎兵一等卒東端林平と云ふ驍勇の士なり是より先き氏は脚疾を患ふ然れども此際欠動するを欲せず強を鼓して斥候に出てたるものにして敵の騎兵と銃戦するや石井軍曹等と共に少しく退却せんとし馬を馳せたるに馬蹶して遂に落馬す然れども氏は脚疾の爲めに急に飛ひ乗る能はざりしなり折柄敵の四五騎は急に氏を圍み其一騎は抜劍し他は銃を放ちて氏に逼る石井軍曹之を救はんとすれども敵の廿餘騎斐場洞坂に在りて頼りに發砲し勢ひ谷底に下る能はず谷底なる東端氏は馬を失ひつゝも尙屈せず腰間の長劍を揮て四五騎と相戦ひ敵の騎馬を以て屢氏を蹂躪せんとするも氏の剛勇聊之を意とせず奮闘して敵なる士官の横腹に切込み敵の馬を摺寄するに乘して更に馬首を一斷す去れども敵は衆を待みて益々逼る氏と猶縦横に奮戦して敵を殲立つるに脚疾あるにも拘らず獅子奮迅の勢あり折柄敵の打御す刀身を矢庭に據握り右手に劍を揮て二三名の敵を傷けたり之を以て東端氏も淺手ながらも數ヶ所の手疵を負ひたり恰もよし此時石井軍曹も驅け來り平城少尉の一族も銃聲聞付け進んで前坂の敵を撃ちて此處に來り短銃を放て敵兵一騎を打仆し猶餘さす仆さんと逼りければ敵は遂に支ふる能はず退き去りしかば東端氏は「ア

ノ羽虫等が……」と嘲りつゝ、踰限級に倚り他の騎に扶けられて上り來れり乃ち先に捕へ置きたる馬に乗らしめ兩騎其左右に接ぎて氏の手綱を分け持ち三騎並び馳せて歩兵陣地に歸り來り氏を本營なる衛生隊に渡したり而して氏の負傷は左手に敵劍を握りし劍跡と左右兩股を射撃せられしものと及び面部に微傷を受けし等なれども銃創は何れも骨に達せず只左股の銃創には猶銃丸殘留しありたり去れども氏は元氣少しも衰へず意氣甚だ盛んなりしと云ふ氏は今年廿四五年の一少壯にして平素頗る剛毅の性あり今單身敵騎と戦ひ而も脚疾を以てして敵をして重傷を負はしめし敢勇賞するに餘りあり此驍勇なる男兒は何れの人ぞ曰く徳島縣阿波郡林村大字西林の人にして東端源八氏の弟なり幼より武を好み明治廿四年十二月徵發に應じて入營す氏喜んで曰く「滿期とならば更に再役を志願せん」と期未だ滿たすして日清事起り六月渡韓の命を受くるに至る發するに臨んで書を家兄に送りて曰く「不肖今回幸にして渡韓の途に就くを得たり不肖の光榮なり我身命は已に君國に捧げたる身命なれば夢にだも生きて還るの意なし故に今よりは不肖を世に亡きものと諦められたし云々」と而して之一葉の痲真と和歌を添へたり歌に曰く

君が代を思ふ心の一筋に我身ありとは思はざりけり

氏の純忠にして大義を重んずること斯の如し一首の歌は實に氏か滿腔の衷情を漏して洩々たり而して渡韓後氏は成歡牙山の役に出陣し敵を斬る幾十騎身も亦た負傷したれども瘡痕猶未だ癒さるに請ふて北進軍に加り擧てられて斥候の任に當り奮闘激戦して再び傷を蒙りたるは氏か驍勇の勃々たるを見るべし家兄源八客に語て曰く「林平の志既に生還を期せず假令ひ屍を異域の野に暴すも我々家族は今更に悲歎する所なし況んや負

傷をや」と勇士若し之を聞かば爲めに家郷を思ふの憂ひなからん嗚呼此鉄骨の日本男兒若し早く癒は又復深く清地に入り抜群の功を立つるならんか

### 武勇の兵士梅原房吉氏

豊橋衛戍歩兵第十八聯隊第五中隊の上等卒梅原房吉氏は平壤の役武勇の働きをなし名譽の戦死を遂げたり氏は靜岡縣駿河國富士郡元吉原村田中新田平民梅原新兵衛の長男なり幼より心を文學に寄せ勉強衆に擧ぐす又其傍ら劍術を嗜みて之を學びしが明治二十三年中徴兵適齡を以て豊橋衛戍へ入營せり氏は他の兵卒に比ぶれば文武の道大に進み且つ能く軍規を守りて品行端正なれば次第に昇進して上等兵となり昨年期滿ちて歸村し居たるに今回日清事件起りしと共に豊橋衛戍亦戦地に出張する事となりしより氏も召榮の命を受け喜んで之に應せり出發に臨み親類一同を招き盛んに祝宴を開き席上別を告げて曰く「不肖今回幸に召榮の命を受け從軍の榮譽を得たる上は身命を擲つて國家の爲めに奮戦する覺悟されば十に九つ生き還らん事思ひも寄らす去りなから萬か一にも命を全うして再び歸國する事もあらば必らず男兒らしき働をなし名譽ある勳章を得て歸るべし」と勇しく躍り立て出發し第三師團へ馳せ附け去八月二十四日いよいよ渡韓の途に上りたり平壤の合戦に野津中將の麾下に屬して進み平壤激戦とあるや前言に聊か違はず群がる敵中へ踊り入り素より劍術にも勝れし腕前日本刀を打ち振りく敵十數人を斬り殺し其身も數ヶ所の手疵を負ひ遂に生年二十六歳を一期とし平壤の野にいと目覺し最期を遂げしは勇ましくんといふ斗りなし將校諸氏にも大に氏の勇戦を賞されしといふ氏の死躰は火葬の上其郷里へ送附となり到着の後親戚故舊は爲めに正式の葬儀を營みしに富士

郡長始め高等尋常小學校職員生徒其他遠近氏の風采を追慕する者等會葬する者無慮千五百餘名に及び其景況極めて盛んなりしといふ嗚呼梅原氏戦場に臨んで前言を忘れず死まで芳名を千歳に傳ふ日本男兒の鉄魂亦た壯んなりといふべし

### 故宮下看護手

黄海の激戦正に酣にして比叙艦上死傷するもの甚だ多し大小の軍醫苟も身刀圭の事に關するもの艦をつくして悉く病室に集る時に敵艦の砲口硝煙漢々の裡に火炎を吹いて一發の榴彈比叙の病室に落ち滿艦ためは震盪し將士の毛髮悚然として逆立するはあらざり急ぎ急ぎにして爆然一破すれば幾點の紅火雨の如く下り病室空に飛んで幾多の醫官看護夫一人として全きものなし、たゞ此時に當つて宮下一等看護手なる勇士あり亦大傷を負ふて奄々たる氣息糸の如く通するのみ之を見れば滿身淋漓流血滂沱として惨狀いふに忍びず去れども氏の此激烈の下、醫官看護手は悉く斃れたれば此上はその艦上衛生の事に通するものは曰れ一人のみなるを自覺し鬱勃たる勇氣天を衝いて沖り苦惱の那邊にあるかを知らざるもの、如く他の艦員に向つて石炭酸、オリブ油は多量に用ゐることなれば何の藥劑はかくせよ何の治療はかくすべしと諄々説き了つて苦聲一叫殘念」と呼んで瞑目し去る嗟義勇公に奉ずるは吾人も齊しくこれを口にするところなり、しかも氏の如きもの天下果して幾人かある

### 故田上水兵

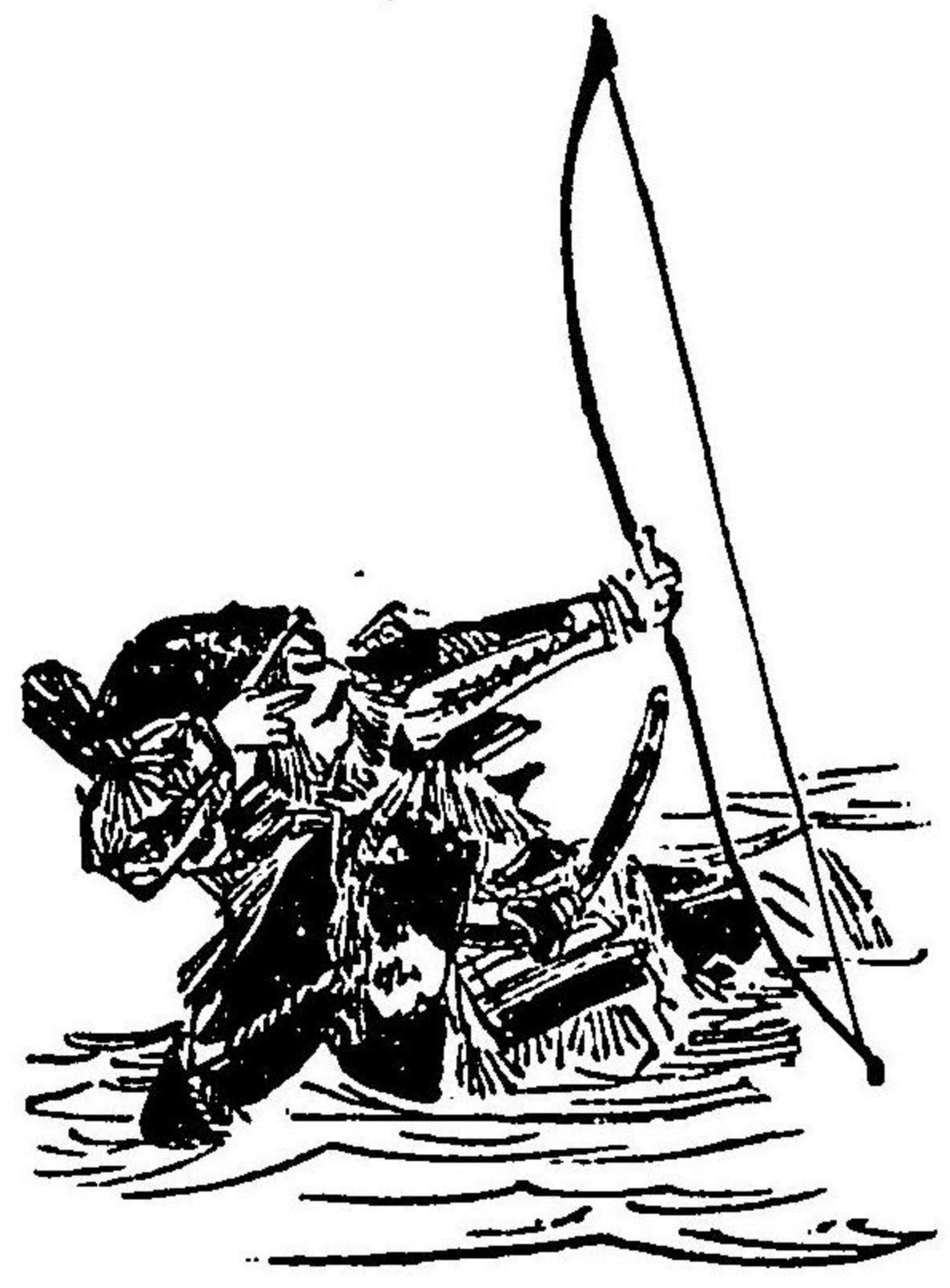
黄海の大海戦には軍艦比叙最も苦戦を極め死傷また甚だ多し此艦の乗組員に二等水兵田上某なる者あり敵彈

の爲りに重傷を受けて甲板々上に仆れ氣息奄々死に垂じとす一將校之を憐み慰撫至らざるなく且問ふて曰く「負傷甚だ輕からず心地は如何に」と某大聲答へていふ「余か傷痕の如きはもとよりいふに足らず、たゞ敵勢の如何これ深くわが心を痛ましむるところなり」と將校聲に應じていふ「敵既に敗走せり」さらば我艦隊は如何「諸艦皆な無事なり」と某これを聞いて歡呼一聲身に重傷あるを忘れ勇んで躍り立たんとす憐むべし某の身軀は既に肉破れ骨痛むで立つこと能はず僅に帝國海軍萬歳を絶叫するのみ何る其勇壯なる此夜比叡の病室腥氣紛々として白色の帳幕を襲ふところ、この快男子の生魂を失ひ去り唯一塊の遺骸兀々たり滿艦ために凄然

### 本間水兵

山形縣鮎海郡にて海上二十里外に孤峙せる飛鳥村の本間某は先年海軍水兵の役に服し滿期の後居村に歸り土地柄として漁業に従事しありしが今回征清軍の興るを聞き滿腔の勇氣勃々として禁する能はず腕を摩りて日夜南天を望み豫備召集令の下るを待しか天其望を空うせす八月上旬一片の飛報其出役を促がせるに躍り上りて大に悦ひ天晴れ功名手柄して帝國海軍水兵の忠魂義膽を世界に顯はし呉れんづと漁船を備ひて飛び乗りしが「海上二十里何故そ今日に限りて舟足の遅きことよ鳥ならば飛ひても渡らん魚ならば泳ぎても行かん人間程不自由なるはなし」と眩さつゝも漸う船は港に入りぬ待つ間廻しと舷跳飛し一目散に郡衙に駆込めばあな遺憾其餘の人々は既に發足し吾のみ後れたることゝ氏はいよく心を焦燥つゝ「よしさらば韋佗天の足を借るとも人々に追付かで止むべき」と勇みに勇みたる様のいと健氣なるを郡長は甚く賞し「旅費に差支な

ば遠慮なく申されよ」といへば「旅費は間に合ふだけ懐中せり片時も隙取る場合ならず」と直ちに東天に向つて出發せり爾來去鴻跡なく音信寂然たるもの數旬なりしが後ち一報あり豐嶋の海戦我勝利に歸去敵艦操江號既に降旗を掲げたる際我秋津洲艦よりは一隻の端舟を仰し一人の士官と數名の水兵とを載せ操江號に漕ぎ付き梯子を掛くるや否や最先に飛上り一聲勝鬨を唱へたるは此本間某なりと其勇壯初志に負かず眞に日本帝國の水兵たる本色を見はしたりといふべし



# 征清日本軍人義勇傳附録

## 義勇のめとして

### 中牟田中尉勇壯の首途

中牟田陸軍中尉は肥前佐賀の人なり本姓を佐柄と呼ぶ  
 資性活潑剛毅夙に軍人中に名あり其に中牟田中將の  
 横須賀鎮守府司令長官たりし頃君か將來有望の軍人た  
 るを識つて深く之を愛し娶すに其令嬢を以てす因て中  
 牟田氏を冒し東京赤坂區氷川町に住んで一子を擧ぐ今  
 日清事件の起るや君之勇に天の一方を望んで出軍を  
 望む事切なりと雖も如何んせん未だ其命なきを以て唯  
 だ腕を扼して獨り脾肉の嘆をなすのみなりしが第一師  
 團愈出兵する事となるに及んで君亦命を拜し欣喜踴  
 躍措く能はず發するに臨んで急に家人を一室に集め告  
 げて曰く「余は今や日頃の希望を充していよく出陣  
 の場合に迫れり是れ誠に千載一遇の好時機なり身一た

附録 義勇のかとて

び軍陣に臨まば即ち平生の技倆を揮ひ部下を統督して  
 天晴れ目覺しき戦功を彰はし以て聖恩の萬分一に報せ  
 んとすされば一たび家を辭すれば復た心に生還を期せ  
 ず之を以て今日以後は最早我れは戦死したるものと心  
 得假令ひ此後何事のあるとも決して驚く事勿れ」と言  
 了つてさらば訣別の盃せんと自ら家人一同へ一々盃を  
 與へし上「最早是れにて我れも安堵死しても憾むる所  
 なしさらば」と計り軍帽取り上げ帶劍の音鏗々と腕  
 の間を貫していと勇ましく出發したるは流石に中將の  
 鑑識に背かずといふべし

### 二見軍曹の義勇

第一師團東京旅布第一聯隊附軍曹二見某は現役なるに  
 も拘らず身軀虛弱なるが爲め補充の部に編入せられ假  
 令同隊出征となるも徒軍する能はざる事となりたり此  
 時の某が心中は如何なりしを某は之を以て終天の遺憾  
 となし苟くも身武人の職に在りながら此國家多事の時  
 に當りて其本分を全くする能はざるは返すくも無念  
 千萬なり如何にして 從軍を許されんものをも屢く

(六十九)

熱心に上官に向つて懇請する所ありしも一旦決定なし  
たる事なれば容易に之を許可せられざるより某は心算  
かに決する所あり「此上は假令上官の命令なりとも斷  
して現職を退かず補充の部に編入せらるゝを肯せず」  
とていつかな之に服従せざるより上官は大に其剛愎を  
責め若し我が命令に服せずんば嚴罰に處すべしと申し  
渡されしも某は自若として動かさず「此際我が希望を許  
されず大義を盡すの道に入る事を許されずんば寧ろ嚴  
重なる軍律に處せられ此處に於て一命を捨つるに如か  
ず請ふ速かに御處分あれ取るにも足らぬ某しの如き一  
下士と雖も今徒らに軍律に犬死せしめんよりは寧ろ戰  
地に於て敵の一卒をも破し然る後戦死せしむる方國家  
の爲め却つて優れる所にあらざるや上官請ふ再思せられ  
得失利害を察せられよ」と毅然として憚る所なく述べ  
けるにぞ所屬隊長も其決心の堅きに感服し遂に特別を  
以て其請ひを許されたりと某の如き者一度軍陣に臨ま  
と蓋必す神妙の功を立つるならん

大塚軍曹病を得て奮慨す

第一師團野戰砲兵第一聯隊附一等軍曹大塚健次郎氏は  
先きに同隊へ附屬して廣島迄出張したるも同地滞在  
中不幸にして病に犯され已むを得ず去十月一日同市な  
る豫備病院へ入院したるが氏は平生沈黙寡言人に接す  
る極めて温厚なるも其間自から一種犯す可らざる義勇  
の氣象ありて一たび出張を命せられたる以來欣喜措く  
能はず國家の爲め一命を捨つるは此時なりと奮躍して  
軍に従ひしも今は意外の病に罹りて到底俄に舊に復せ  
ざる爲め遂に歸隊を命せられしにぞ氏は甚だ以て之を  
遺憾となし幾度か從軍を請願したれど何様身軀衰弱し  
て從軍などと思ひも寄らずと嚴しく醫師よりも勸告し  
到底其請ひを許されざるにぞ氏の失望一方ならず今は  
是非なしと諦らめていよく歸京に心を決し豫て清國  
北京迄も踏み入る積りにて用意せしハンケチ、靴下の  
類は残らず隊中の甲乙に分與し且一同を奨勵して曰く  
小生は不幸病ひの爲めに已むを得ず一旦歸隊を命せら  
れ遺憾此上もなし唯だ諸君の健康にして戰地に關  
ひを羨むのみ請ふ余か哀情を洞察せられよ夫れにつけ

ても諸君一たび敵地に向はゞ決して心に生還を期する  
なく奮闘力戰以て國家の爲めに報する所あれ大丈夫死  
して屍を馬草に包む豈又愉快ならずや」と意氣壯烈怒  
髪帽を衝く之を聞く者奮然として驟起せざるなかりし  
といふ嗚呼氏の如きは眞に軍人の性格を具有する者と  
いふべし唯だ憾むらくは氏をして遂に偉功を戰場に奏  
せしめざることを

義勇の一念病を治して出願す

香川縣大内郡豊水村大字水主の豫備役歩兵山本嘉吉氏  
は資性温順嘗の現役に在る内も軍規を遵守し謹直に勤  
務せしかは上長官の眷顧を蒙り他の兵卒の鑑となりと  
て賞譽せられしことと度々ありし由にて滿期歸郷の後  
と雖も農事に勵精し郷閭の譽ぬものなりしが去る六月  
十三日充員召集あるや迅速丸龜衛戍に入營したるも不  
幸にして病氣の爲め歸郷を命せられしかは氏の落膽一  
方ならず好機に際會し兵士の本分を盡さず國民の義務  
を果す能はざるは畢生の遺憾にして又何時の日か軍人  
の本分を盡くすべきと思ひしも何分病氣には克つ能は

す惜々して歸途に着きしが餘りに残念に思ひけれと途  
中の親族にも些少の金錢を借受け其歸郷里へも歸らず  
有馬温泉に入浴して只管養生せしに固と僅少の金錢の  
事とて随分不自由を極めしも病氣平癒せざれば入隊を  
願ふも到底許可あらざるべしと一日千秋の思ひにて辛  
慘具さに嘗め保養に怠りなかりしかは効驗漸く顯はれ  
病氣全快して客月上旬歸郷し醫師の診斷書を求めて直  
接都後所監視部に至り左の願書を差出したたり

入隊願

嘉吉儀

去る六月十三日充員召集に應徵仕候處病氣の爲め歸郷  
被申付歸家仕候得共兵役の身を以て戰役に從事せざる  
は如何にも残念と存じ直に有馬へ罷越し温泉療養仕候  
處今般病氣全治に及候に付ては此際是非戰役に服し度  
何卒特別を以て願意御許可被成下度別紙醫師診斷書相  
添此段奉願候也

香川縣大内郡豊水村大字水主  
明治廿七年八月八日 豫備役歩兵 山本嘉吉  
長尾監視區長友近信夫殿

居合はす郡役所吏員は之を見て何れも其忠勇に感激し  
 監視區長へ執達に及ばんとせし折柄程能く同官も來合  
 せられしにそ直ちに右の書面を示せし處同官も軍人の  
 素養を忘れざるものなりと大に其奇特なる心掛けを賞  
 し兎も角其筋へ伺ひ出づべしとの事にて直ちに本人は  
 一先つ歸村せしめけるが氏も非常に喜ひ勇んで歸宅し  
 只管指令の下るを待ち居りしに其後九龍大隊區司令官  
 より本人の素志は嘉みすべき者なるも規定外の事なる  
 を以つて後命を待たしむべしと指令下り原田郡長より  
 此旨本人へ達せられしかば氏は折角辛苦して希望せし  
 事も水泡となり非常に失望落膽後命の下るを待居りし  
 といふ是等は軍人の龜鑑と稱して耻しからぬ者何れか  
 出軍して大功を立るなるべし

**丈夫父の遺骸を残して出づ**

宮城縣志田郡古川町字川端に住める遠藤政吉氏の父虎  
 吉といへるは以前に可なりの商人なりしも打ち續く不  
 仕合せに身代も無くなりしかは夫れ是れの心配にて一  
 時は精神病に罹り家族の心痛一方ならず種々療養を加

へし内道頓に至りやうく病ひも全快してヤレ嬉しや  
 と云ふ間もなく九月二十五日遂に卒中症にて死去せし  
 にど一家の悲歎道なる方なく皆々涙に掻き暮れし折りも  
 折り長男政吉氏は昨年徴兵試験に合格して豫備兵員に  
 在りし爲め俄に召集の命下り皆々一時之途方に惑れて  
 何んぞ詮術なかりしが獨り政吉氏は毅然として奮起し  
 「父親か不慮の死は悲みても尚ほ餘りある事にはわれ  
 を今や一國の大事に臨み一身一家の私事を顧みるべき  
 道はなし我身は出陣の心も急げは父上の葬儀に就ては  
 何卒跡にて宜しき様に願ひ度し」と早や打ち立たん氣  
 色なるにぞ皆々暫しと押し止め「一理ある事ながら餘  
 事とは違ひ父親の葬儀を營む間た位は猶豫の叶はぬ事  
 とあるまじ兎も角親類一同より其筋へ嘆願せん」と云  
 ひければ氏「イヤ〜假令願へばとて許さるべき事  
 にもあらず夫れよりは片時も早く出發して衆に先んじ  
 國恩の萬分一に報するが却つて父への孝行ならん猶豫  
 の願を出す事は偏に御容赦下され」と決然として云ひ  
 放ち且つ氏は涙ながらに父の遺骸に向ひて懇ろに別を

告げ一生一度の父の葬儀にも出合えざる不孝の罪を詫  
 ひ跡々の事は能く母親に頼み聞え又一人の妹にもいと  
 懇ろに教訓して「さて此上は精々家業に勉強し母上を  
 大切に孝養を盡し女計りの世代故と人に後指をさすれ  
 の様萬事に心を附くべし」と残る方なく云付置き父の  
 遺骸を見返り〜弱る心を勵まして奮然として出て行  
 きたり跡には親類縁者打寄りて兎も角父虎吉の葬儀を  
 營みけるが斯くと聞きたる東北尚武會員は政吉氏の言  
 行を壯なりとし種々の物品を寄贈せし上會員一同は「  
 送故遠藤虎吉君之遺骸」と書したる大旗を翻し會長  
 藤井秀晴氏(憲兵中尉)以下幹事諸氏を始め都合百六十  
 餘名會葬し甚だ盛なりしと云ふ是皆政吉氏が忠勇の餘  
 榮なり嗚呼此勇壯なる眞丈夫

**忠臣孝子と母と主人**

日清事件に付軍人の召集に應じたる者豈に悉く貧困者  
 のみならんや然れども國亂れて忠臣出て家貧しくして  
 孝子出づるのならん尋常以上の家に在りては唯だ勇ん  
 で出發したりといふの外差したる波瀾なき爲め自から

人の目にも附かず口端にも乗らされども貧困者は之に  
 反して一家種々の事情ありて其間た百艱萬難の歸る爲  
 め従つて種々の出來事あるは亦當然の事といはざる可  
 らず中に茲に忠孝全き義勇の軍人あり茨城縣水戸市  
 常盤新大工町の平民にて其名を山口染太郎と云ふ氏は  
 豫備歩兵一等卒にて現役中にも其品行方正にして能く  
 軍規を恪守し修練にも勉強すること衆に優れしより軍  
 隊中には最も名譽とする善行贈與及び賞状を受領し  
 満期歸宅後も老母と二人暮しにて家極めて貧なれども  
 能く其母に仕へ孝道怠ることなかりしが我が現役中は  
 母一人にて固より坐食するの外なかりければ聊かの家  
 財も大方失ひたる故斯くては安々母を養ふ事能はずと  
 て母の許しを受け水戸市隨一の料理店と聞へし泉町な  
 る坂本樓へ傭人に住み込みたり同家にありて専ら正  
 直篤實を旨とし萬事心を附け奉公しけるにそ主人佐久  
 間庄八も元來篤志家の聞えある人として深く氏の實直と  
 孝心深きを感し常に心を用ひて些少の物にても與ふれ  
 ば彼れは直ちに實家に持ち行き母に與へて其喜びを何

よりの樂みとし的はも主人の恩義を感じていよく奉  
公大事と勤め居りしが固より身軍人の事にしあれば今  
回日清事件の起ると齊しく萬一召集の事にてもあらは  
我れ眞先きに出發せんと明暮此事のみ念頭に保ち居り  
たる折柄去八月三十日の事なりし氏は料理の出前を岡  
持に入れ五軒町通りを通行せしに遇ましく往來の一方  
に黒山の如く人立ちせるを見て何事ならんと近寄り見  
れば朱書にて弊報とあるに尙ほ多數の人を掻き分け  
て讀み下せば第一充員及後備召集云々の事を記しある  
にぞさては出陣の時機到來せりと心中大ひに勇み立ち  
ては料理を届ける事さへ忘れて其儘岡持引提げつゝ飛  
ぶが如くに我家へ歸り見れば母は今しも老眼に目鏡を  
掛けて針仕事に餘念もなき其有様を見ては根が孝心な  
る染太郎氏若し召集の事を知らせなば年老いたる母上  
の身一つにてさこそ力を落し給はんと思へば流石に眼  
り詰りし勇氣も挫け暫しは表に猶豫ひ居しが併し何の  
道告げで止むべき事ならねば氣を取り直して母に向ひ  
賢は斯く云々と有りし次第を物語れば母は案外驚

ける氣色もなく静かに眼鏡を取り外づして我子を見返  
り「豫ねてより私しも何うかと思ふて居たが儲はいよ  
く和主も戦に出る様になつたか夫れは何よりめでた  
い、和主は能くも知るまいが親父の若い時には  
町人の身の双物三味天狗黨の仲間に入つて彼方此方  
奔走なされたが夫れは少々な日本同士今度は夫れに引  
替へて日本の國に仇をなす唐人共と聞くからは此上も  
なきお國の大事和主も兵隊の敵に加こつてあるこそ幸  
ひ豫て命は無き者と覺悟していよく彼の地へ出陣の  
上は此母などを案じずに充分目覺し働きて功名手  
柄をして呉れよ夫れが何侍り此身への孝行ぢや」と彼  
の三浦之介の母にもまして義氣凛然と教訓しければ氏  
と一層心に勇氣を増し夫れより又も主人方へと引返せ  
しが斯くとは知らず阪本樓にては注文先きより屢は料  
理の催促あるに染太郎と如何せしやと取々唇をなし居  
る折柄岡持の提げたる儘息急ぎて歸り召集の事情  
を述べて其不都合を詫びけるにぞ主人庄八は樹手を拍  
ち「成る程夫れで様子がかつた平生から親へ孝行主

人へ忠義と心掛けよき其方の事故料理の出前の運なは  
りしには仔細をあらんと思ひ居りしがイヤ夫れなれば  
叱る所か平生に變らぬ天晴れの心掛けサア令狀の來ら  
ぬ内少しも早く受け取り來れ」と其々勸め勵ましつ氏  
を市役所に出頭させ氏の市役所より歸るを待ち受け給  
金の外別に充分の手當を取らせ「老母の事は氣遣ふな  
己れが健かに引き受けただ」と義心に厚き主人の辞を  
百萬騎の加勢と思ひて「左様ならば」と主親朋輩に暇を  
告げ手柄話し歸國の上と數多の人に送られてめで度  
く出發したりしは勇しかりし有様なり

忠勇なる兄弟三人の從軍

埼玉縣北足立郡神根村宇新井宿といへるは戸數僅に三  
千戸計りにて近村に比すれば細民多く従つて博奕等に  
従事する者も少からず兎角人氣の良からぬ所なるが爰  
に同宿二十二番地平民曰井文四郎といへるは宿内小學  
助教員にして母ふみ(五十五)と恒五郎保太郎といへる二人  
の弟ありて平生より兎角村内人氣の宜しからぬと無教  
育なるを痛嘆し何とぞ之を教化せんとと思へども到底

一個の力にては爲し難きに依り斷然教員を辭職して教  
導團に入り軍人となりて天晴れ社會の上流に立ち自ら  
標本を示めて人心を化せしむるに如かずと思ひ立ち  
之れが爲め自ら嚴勵して家務を弟恒五郎氏に譲り直ち  
に教導團に入りて苦學の末遂に卒業して下士官に任せ  
られしは先年の事にて今は某聯隊附となり既に支那征  
伐の爲め先立つて渡韓したるが恒五郎氏も亦た平生同  
宿の人氣を憤慨し自分所詮此地に在りて一身を立つ  
るの途なしと思ひ居る内偶々徴兵適齡となりて入營し  
たり平素精勵にして品行の宜しき爲め特に歸休を命ぜ  
られ後滿期となりて豫備に入り専ら農業を勤め居りし  
に三弟保太郎氏も亦た要塞砲兵となりて方今現役に在  
り是れも既に征清軍として出發せりされども母ふみは平  
生より次男の恒五郎氏が氣に入りて同氏は尙ほ家に  
あるにぞ左迄は心細くも思はずして過ぎ行さしに日な  
らすして豫備役召集の令出て恒五郎氏も亦た出發せで  
は叶はぬ事となりしが若し此事を明らさまに母に告げ  
ては老の身の頼る邊なきに必ずや嘆き悲しみ給はんは



必定なり告げずして此處出て行かんはいと不孝には似  
たれども國家の大事には替へ難ければ唯た餘所ながら  
夫れとなく暇乞する外はあらずと、やがて聊かの酒肴  
馳へつゝ母と諸共一杯を傾ふけつゝ母に向ひて述べけ  
る様(兄弟は既に夫れへ出發し此身も豫備の軍籍に  
在れば何時召集にならんも知れねど三人が三人ながら  
皆討死をするものでもなければ皆んな一度に出で往つ  
ても必らず力を落さぬ様暫時の不自由を忍んで下され  
今が今出て行くといふ譯ではなけれど序手に話しを仕  
て置くなり」と口にはいへど心には是れが此の世の暇  
乞ひと成らんも知れずと思へばいと胸迫まりをいろ  
涙は催せと態と笑ひに紛らして親子暫らく酒宴の後恒  
五郎氏は立ち上り「オ、大事な用を忘れてゐた一寸是  
れから隣り村迄往つて來ます」と唯た何氣なく我家の  
門を立ち出でながら杖柱と思はれし此身が出發したり  
しと跡にて母が聞かれなばこそ怨みも嘆きもせられ  
んと思へは思ふ程いと足さへ進み兼ねぬれと斯くて果  
つへき事ならねは今は國家の大事なりイデ大日本帝國

軍人の手並の程を外人に示し國恩に報するの時なりと  
我れと心を勵ましつ幾度か我家の方を振り返りし其  
儘出發したりけり斯くとも知らぬ母親は待てと暮らせ  
と同氏の歸つて來ぬに不番を起し若しや途中で噴嘩で  
もして警察署になど引留められて居るではないかと老  
の身の彌深く氣遣はれて兎も角様子を聞合はさんと  
近所の家まで尋ねて行きしに「借はお前はまだ知らず  
か恒五郎ののは是れへ先刻發足して行かれしに」  
といへども老母は承知せず「イヤ、彼れと用事があ  
つて隣り村まで往つた計り年寄に其様な氣を揉ますも  
のではない」と更に誠とせさりける「借おれ前に知ら  
せては別れをするのが六かしいと内々で往つたと見え  
るが以前の子息計りでなく元と兵隊で居たもの之皆な  
今日一緒に召び出され朝鮮へ行くのぢやそうな」と聞  
くに母親是れはと計り驚き呆れて力も抜け泣く親  
類の許に到りて尙ほも様子を尋ねるに疑ひもなく恒五  
郎は召集となりし事相違なけれバ母は宛然狂氣の如く  
「今更お上を怨むではなけれども大事な件を三人迄殘

らず戦に追ひ遣るとは餘りといへば御無理な仕方戦争  
は出して死なさうとて年月艱難辛苦して育て上げた子  
ではなけれど是れも國の爲めなれば二人迄は肩よう  
此身も出して遣つたれとせめて一人は此身の爲め殘し  
て置いて下されても夫れ程ね上の間欠にもなるまいもの  
を早や六十の坂に掛りて杖柱とも頼みにせし忤に別れ  
て此先を何んとして暮さうやら思へば此身も寧ろの事  
今一思ひに死んだ方が却つて増しぢや」と打ち叩ち老  
の眼元にはらりと落ちる涙は雨なられ前後不覺に泣伏  
したるは餘所の見る目も哀れなり固より事理を辨へぬ  
田舎人の事なれば皆々老母の有様をいと氣の毒に思ふ  
餘り「寧ろ打明け此事をお上に向つて嘆願したら若し  
や三人の息子の内一人は返して呉れるかも知れぬマア  
願ふて見るが宜からう」と何れも老母を慰め賺し  
て先づ村長に迫りしかど固より取次ぐ限りにあらねば  
理由を聞かして斥けたるに又もや郡長に願ひ出でしも  
是れども同じ事執達すべき途なしとて其儘願書を下  
げられたるに老母は痛く望みを失ひ今はいよく物狂

はしき心地となりて唯だ且暮に三人の忤の事を言續け  
ては泣き泣きしては口説き前後正味取亂してうつら／＼  
と日を送る其有様の惘れさに親類の者は「逆も叶はぬ  
事ではあらうが最一度其道の御掛りに願つて見たら又  
何んとか成らうも知れず私か附き添ふて行く程にマ  
一度願を出して見なされ」と老母に附き添ふて浦和なる  
寺崎監視區長に出願せし處何處まで出ても斯る願ひの  
詮議となるべき筋にあらねば、いと懇ろに事の道理を  
説き聞かせて諦める様諭されたれど何分半ば狂氣の事  
故唯だ忤を返して「と其餘の事は耳にも掛けず隣  
長も是れには持て餘さし「斯くまで申し聞かせても尙  
得心か参らずとならば兎も角一應氣休に上長官まで出  
願して見よ」とて東京府下本郷の大隊區司令部を教へ  
られしに老母は又も親類に伴はれ出京の上直ちに司令  
部へ出願して更に願書を差出せし處折しも司令部長官  
は不在なりしが中村監視區長は之を受け取りて披閱せ  
しに寺崎監視區長より副伸もあがりて到底詮議をすべ  
き限りならねば様々論し聞かせたれども老母は唯だ大

音揚げ「我子返せ」と泣き叫ぶに同官も深く持て餘せしが兎に角事情を察する時は如何にも惘然の次第に付き尙も老母を一間に呼び入れ能く氣を落着せし上にて段々道理を説き聞かせ一家三人揃ひも揃ひてか國の爲めに陣したるは此上もなき名譽にして日本國中廣しと雖も斯る類ひは少かるべく恐れながら天子様にも御懇めになるは必定なり斯程立派な子を持ちし老女も共に譽れといふもの追つ附け戦に勝利を得銘々天晴れの手柄を顯はし無事に歸ると知れておれは決して彼等を氣遣ふ事なく唯だ其身をば大切に於て悴の辭國を相待つべし尤も其れが爲め活計に困る事あらは夫れ一救助の途もある故必らず心配せぬがよし」といと穩かに諭されければ老母もやうく得心して「成程三人の悴を出して御懇めになるといふ事なれば何んの兎や角申しませう假令何れ程難儀をしても三人の子供等が無事に歸つて来るのをば待つて居りませう」と始めて此に心も解ければ神氣も自づと静まりて「尙ほ此上共宜しき様に」と懇ろに頼み聞えつゝ親類の者に連れられスゴ

く我家に歸りたりといふ兄弟三子の忠勇は賞すべく羨むべし老母の心情も亦憐むべきものあり

**老父血を以て我子を勵ます**

岐阜縣太田町にては今度の召集に付き一町にて九名の應募者を出せしにぞ至町一般是れが爲め盛んなる送別會を開き一町中一戸一人は必らず出席して非常に盛會なりしが召集者中吉田某の實父鶴之助(五十五)は先年中より都合ありて岐阜市今小町に寄寓せしが我子の召集を聞くや喜ひ勇んで岐阜より太田まで七里の所を二人挽の車にて馳け着けしに恰も送別會最中なれば息を吐かず直に其席に臨みやかて一通り我子等の爲めに斯る盛宴を張られし謝辭を陳べたる上、下婢を呼んで料紙を取り寄せ有合ふ小刀にて自分の指に傷け其血を以て

國の爲め報ゆる時は今なるぞ

たいいたづらに持たん太刀かは

と認めつゝ、したる血しは拭ひもせず我子に與へしかば並み居る人々何れも其出烈に感じたる中に分け

**病夫萬歳を唱へて出陣す**

て悴は感涙に咽ひ「御教訓の程委細承知仕つる之をば始終肌身に着け屹度勳功願はずべし」と押し頂きて收めしは、いと勇ましく見えたりとなん

宮城縣信夫郡鳥川村大越與三郎氏は豫備兵籍に在りて平生の行爲凡て軍律に適ひ村民の模範とする所たりしが日清交戦の初に當り氏は一日も速かに召集されん事を望み居りし折柄九月下旬豫備兵の徴發ありて後ち何等の沙汰なきに不審を懷きつゝ軍隊の動靜に注意を凝らし居る内不圖病魔の犯す所となり吐瀉下痢すること日に幾回なるを知らざる程なれば全く食を斷ちて醫師の治療を受け居りしも衰弱甚しく室内の歩行も十分ならざるに十月六日突然召集令狀に接するや勇氣勃々袂を蹴りて起き上り 陸下萬歳、海陸軍萬歳を呼唱し看護人の諫をも聞かず直ちに下婢に命じて粥を煮さしめ焼酎を添へて一椀を盡したれど尙ほ意の如く歩行し得ざるより遂に馬に跨がりて鐵鞭一揮他兵士に先だち出發せしといふ丈夫當に斯の如くなるべし

**隊内の龜鑑となる**

東京本郷駒込淺賀町六番地平民田子八十次郎氏は後備兵にて六十餘才の父あれど父不具者にて起居自由ならず妻は三才の女子を養育して傍ら手内職をなし氏之僅かに鍛冶職を營業となして日を送る者なるが今回清征軍起つて以來之大に勇み立ち「我々職人と雖も目下後備役にありて純然たる軍人なれど軍隊の都合によりて之何時召集せらるゝやも計り難く殊に軍籍にある限りは兼て召集の覺悟なかる可らず」と日頃人々にモ語り居りしが果して去る七月中要塞砲兵補助卒として召集せられたるに付き「扱こそ國恩を報すべし時來れり」と大に悦び直に發足すべし希望なれど今回の召集は令狀を受取りたるより廿四時間内に發足すべし若しして只今出立せすとモ時間内に參着せば先着者も同一なればせめては家族生計費の三分丈なりとモ稼置かんぞ令狀を受るや否平素に倍して職を勵みに僅かに十時間内に二分を打ち上げ得たれば「此の上は生死とも區役所に依頼し相當の保護を仰ぐべし自分の身

牀之早や國家に捧げたる者にて決して心配に及はずか  
つゝ功名手柄して目出度凱陣せん」と快よく親子妻  
子に別れを告げ時間内に應召したりけるが右の次第早  
くも軍隊の耳に入り氏は眞に軍人たるの自分を盡した  
る者にて第一國家の爲に身を忘れて猶豫の時間内に還  
族の爲に假令二日間なりとも活計費を得んと其業務を  
罷免して發足したるは實に軍人たるの面目に耻ぢず是  
れこそ眞に軍人の龜鑑なれとて隊内の噂も専らなるよ  
り遂に上長官の耳にも達し當時特別に賞與の催しも  
ありしといふ因みに記す氏の遺族は到底生活の見込な  
く目下同區公民義會より扶助中なりと

### 先着第一の名譽者

東京深川區黒江町三十九番地平民木下嘉四郎氏(三十二)は  
獨身にて親戚もなく幼時より同町四十番地石工の親方  
某方へ弟子入り爾來同人方に在りて石工の業に従事し  
居りしが氏は嘗て兵役を畢へし者にて豫備役に居る事  
なるか今回の征清軍起るや召集運しと待つ日程なく其  
令出たれば氏と喜び再び折柄親方某は氏に向ひ「石

工風情の身にも軍籍に在る御蔭には此際國家の御役  
に立つ事何奇の名譽なり片時も早く出發して御國の爲  
めに盡せよ」と諭しけるに氏は固より血氣に勇める壯  
漢殊には後に妻子もなければ何條暫しも遅々すべき一  
仰せにや及ぶべき」と跳り立ち親方に別れを告ぐると  
齊しく用意もソコソコ飛ぶか如くに麻布三聯隊へと驅  
け附け見れば未だ一人の來着者なく同氏こそは先着第  
一の功名を博したるにぞ將校諸氏も大に其心掛けを感  
賞せり聯隊長は斯くと聞くより部下の將校を一室に會  
して氏を呼び出し此度の先着殊勝なりとて厚く賞詞を  
與へし上僚節を添へて盃を取らせ且つ應召の心得方宜  
しきを愛て今回は第一に渡韓せしむる旨申渡されしに  
ぞ氏は面目身に餘りて感涙に咽ひ將校方の面前に於て  
賞盃を賜はり其上第一渡韓の列に加へらるゝ事誠に此  
身一代の名譽なり最早是れにて死すとも憾みこれなし  
と早速此赴を我が親方へ申し送りしにぞ親方の喜び一  
方ならず我弟子の中より斯る名譽の者を出せしは此身  
に取ても大面目なりとて早速弟子仲間を始め懇意の人

### 々々を招き祝宴を催せしと云ふ

又第二師團に於て秋田縣中第一の先着者あり、そは秋  
田市鍛冶町井上重吉氏にて氏は豫備兵員なるか今回日  
清戦争の起るや勇氣勃々頼りに從軍を希望し市内有志  
が義勇團を組織し兵式操練を演習するに當り氏は自ら  
振つて之に赴き傳習に従事し居りしに先般豫備兵召集  
の風説を聞くと均しく頭を擡て其令の下るを待ち居る  
矢先愈よ九月下旬に至り召集令狀の達したれば欣々と  
して大に喜び直に家事を取極め旅装を整へ其向より旅  
費を受取りて忽ち馬車を走らし應召の途に上りたるは  
即日午後六時にて其日は土崎に一泊し翌日午前二時出  
發し午後大雨に逢ひ困難一方ならず之を冒して六時過  
き大館町に着し翌日午前一時同町出發弘前市を経て青  
森に着せるも午後八時十分にして着するや否や直ちに  
入營し同九時歩兵第五聯隊第一大隊第二中隊に編入せ  
られしが其翌朝に到るも大館邊の召集兵さへ未だ到着  
せざる有様なるにぞ將校諸氏と氏が違ひ秋田市より馳  
参して秋田縣中第一等に到着せるを稱揚せりといふ

### 在外國の應召者

嗚呼此兩氏の如きは眞誠の忠臣義士にして能く國民の  
義務兵士の何者たるを明にせるものなり苟も軍人たる  
者當に斯の如くならざるへからず氏等一たび戦陣に臨  
めば蓋必ず戦功を立てるべし吾人其戦況を聞くこと  
を得は次編に於て之を記し世に傳へんと欲するなり

福岡縣夜須郡秋月村の人にして豫備輜重輸卒たる楠  
房太郎氏は久しく米國に渡航し居たるが今回日清交戦  
の事あるに際し遙に召集に應じて行李勿々直ちに歸朝  
せしも何分雲山三千海里を隔つる異域の事とて遂に召  
集の間に逢はざりしを大に遺憾とし十月五日福岡大隊  
區へ出頭し遅れながら召集に應じた旨を懇願したり  
と今回の召集に外國(朝鮮を除く)に寄留し居る者にし  
て郷に歸りて召集に應じたるは氏一人なりと又以て軍  
人軍馬の好龜鑑とすべし

### 忠勇の子健氣の老母

東京淺草區鳥越町三番地士族水倉勝正氏は舊家水倉雪  
湖氏の甥にて先年來北海道札幌の某會社に従事する事

となり一人の老母を奉じて同地に赴きしが性質温厚にして品行正しく同僚に對しても篤實を以て交けるより頗る上下の受けもよく社長の信用も厚くして近來は一部の事務を擔當するの地位まで進みし處氏は元來軍籍に在るの人なれば今回の開戦以來は専ら首を延べて召集命の下るを待ち居りしに折しも九月末に至り東京の親戚よりして豫備召集に付き速に歸京すべき旨電報せしより氏は大に喜び直ちに出發せんとは思ひしが他に親類もなき土地へ唯だ一人の老母を殘して行かん事は何分にも心掛りにて萬一疾病などの事あらば誰れかは之を看護せんと心配に堪え難ければ「兎も角一旦東京へ御歸りあるべし」と勧めしも母つや／＼聞き入れず「イヤ／＼此身は何時迄も利主の無事で歸る迄は必ず此地に止まるべし假令病氣に掛ればとて世に人鬼は無き譬へ必らず世間の人達か見殺しにこそされまじ唯だ何よりも御國の爲めに從軍の叶ふとは願ふてもなき親子の零れ亡き父上も草葉の蔭で嘸喜びてゐ給ふならむ此身の事と少しも思はず片時も早く出立して人に後

れを取らぬ様心掛けるが肝要なり」と却つて悴を勵ます辭に氏も大きに安堵し「假令如何程氣丈にてもいざといふ折りに臨まば少しは愚痴の出づる習ひを却つて斯くまで御論しあること此身に取て如何計りか心丈夫に候」とて夫れより直ちに支度を整へ汽船にて青森へ着し日本鐵道にて出京の上やがて入隊に及びしが氏の隊は其後牛込區内の某寺院へ止宿せしか止宿中も國家有事の時に當り軍隊中に在りて私に親戚を尋ねべき必要なしとて滯在中一回も其叔父を尋ねず遂に其儘戦地へ向ひ出發せしが叔父雪湖氏に滯在中其甥に面會せざりしをいと遺憾には思ひながらも其從軍を聞きて頗る欣喜雀躍し我が一族中より從軍者を出てして何より得難き名譽の事なり薩ながら、そが首途を祝はんとして此程親族及び門人の甲乙を集めて一席の祝宴を催しつゝ席上左の詩を賦して揮毫し一筆歡を盡せりとそ

豊公  
豪擧長征釋鞞秋、朝鮮海水視如溝、留名竹帛眞男子  
恐赫朱家四百州、

我子の首途に楠公記を讀む

東京本郷區龜町三十二番地の活版職梅澤金次郎(二十)氏は第一師團の豫備軍籍にて家に父喜平(六十)母たき(五十)弟新三郎(三十)とありて日々新三郎と共に本郷通りの或る活版所へ通勤し居りしが父喜平は追ひ／＼取る年に二三年來中風症を煩ひ今は起居も不自由となり妻子の介抱を受け其日を易く送り居りしに今回金次郎氏が召集の命に接し出發する事となりしを聞くより病苦も忘れて打ち喜び「今此の御國の大事に臨みて我子も從軍が出来るとは何よりめでたい／＼」と云ひつゝ翌日發といふ前夜には一家一同饗々赤飯に頭附きの魚を添えて祝ひ金次郎氏の友達迄も招き首途の酒宴を催し、やゝ盃の廻ぐりし頃喜平は豫ねて愛讀せる「楠公記」を取り出させ彼の楠公が正行へ遺訓の處を披きて聲高らかに讀み聞かせし上「假りに兵士となりて軍陣に臨むものは誰しも此の楠公御父子と同じ心になりて飽くまで忠勇を勵まねばならず其方も軍人の片端たる上こ能く此事を心に止め命を捨てゝお國の爲みに盡せよか

し」と懇々と教訓しけるに金次郎氏も深く感激し「今の御論しは充分心に銘記して假令屍は戰場に曝らすとも飽くまでお國に盡す所存決して御氣遣ひ下さるまじ」と、いと厚きよく誓ひつゝ夫れより夜更るまで酒汲み交はし其翌朝勇み進んで出發せしと云ふ、いと感すべき親子といふべし

義勇の光り  
愛知縣知多郡大野町の鈴木親月氏といへる人は舊氏を田中と稱し去る明治十七八年の頃徴兵に應じて看護卒に編入し名古屋鎮邊に入營し満期の上歸郷したる人なるが除隊の後専心實業に従事し居たるも這回圖らず韓山風雲の會するあり召に應じて三等調劑手に任せらるゝに至りしにぞ氏は扼腕豎髮勇氣凜々發するに臨んで友人に書を寄せたる其末尾に

異國の土と此身は化するとも  
いかで忘れん深き恵みを  
どわりしとなん義勇の光卅一字の外に見はれていと頼母し

祝言中の出陣

婚禮の最中に召集の令状を受けて祝言と出陣の盃を一所にしたとは太功記の十段目めけど事實なれば揚々群馬縣上州太田町五町目に巴屋と呼ぶ鱧屋あり過般此家の悴何某は嫁を迎ふる事となり早や花嫁も入り来りて長柄の銚子蝶花形に熨斗昆布まで取り揃へめて度々三々九度の盃も濟み仲人は聲張り揚げて四海波を諷はんとする其折しも日清の海に波立ち騒ぐ不意の報報と共に突然役場より召集の令状到着せしにぞ皆々是れはど驚き呆れて互に顔を見合はすのみ花嫁もいと手持無沙汰に見ゆるが斯る中にも流石に聲は落ち着き揃ひ身軍籍に在るからは召集は豫ての覺悟其軍服是れへくと云はぬばかりに今迄の上下妻に引き替へて忽ち變はる襦袢しき軍壯早や打ち立んず其氣色に、アレマア待つてと、引き留めたさは山々なれど流石に夫れとは言ひ出で兼ねし花嫁の心を察して「せめて今宵一夜は思ひ止まり明日出發しては……」と人々が勸むれど「イヤ、國家の大事に當り若しも時間に後れなば此上も

なま身の耻辱是より御暇申すべし」といふを皆々引き止め「マア左様ではわらうけれど、それではわんまり氣強すぎる」と尚ほ押し止むるを振り拂ひ「ハテ聞き譯なし此處放されよ兎角いふ内時刻が延びる何れも去らば」といひ捨て行方知れずなりにけるとは十次郎にも勝りし勇壯の兵士と云ふべし

水陸兵士の驍勇と勳功

成 歡平 壘の陸戦と豊島黄海の海戦は吾人既に其一大勝報に接し之と共に其各將校の驍勇と勳功とを世に現はれて多く聞き得る所吾人は既に之を記し下士及び兵士にして拔群の勇拔群の功ありし者も亦其既に姓名戦況の聞得し丈は之を記すを得たり然れども吾人は獨り是等のみ感歎稱揚する者にわらず此外特に感謝し且賞揚せざるべからざるものあるを信す何ぞや曰く我無位無冠なる水陸兵士の大部是なり

我水陸兵士の勇武なる忠君愛國に其身命を忘れ一意専心敵軍に當る精神の壯快なる實に驚くに堪たるものあり嘗て或人が軍艦松島を訪ひし時同艦の副長向山少佐(黄村翁の令息)は聲を震らせつゝ實に左の談を爲したりと心ある者は眼を開て能く之を讀め

余(向山氏)は我が日本水兵の勇敢絶倫なるを見て感嘆に耐えず余は始め我水夫も戦陣中首足所を異にし肉飛び血迸りて甲板に糊するの惨状を見れば其勇氣も幾分か挫くべしと心配せしに我艦敵弾を受け四十餘人一齊に倒るゝや兵士の勇氣前に百倍し死骸を飛越えて立働さしと眞に驚嘆の外なく我れながら我が兵士を見るの明なきに慙愧せり又余は激戦中甲板を巡視せしに一水兵身には十餘創を蒙り特に面部は目となく鼻となく一面に腫れ上り滿身鮮血淋漓氣息奄々たりしか余を見て一聲「副艦長」と呼ぶ余は「何用なるや」と問へば彼れと苦しき聲を絞りつゝ「敵の定遠は未だ沈みませぬか」といふ余は「心配するナ定遠は最早發砲の出来ぬまでに還付けたから是から

は鎮遠を這るのだ」と答えしに彼れは莞爾として一笑し「ドウか仇を打て下さい」といひながら其のまゝ絶息せり此時の余か胸は實に九廻の思ひなりし云々

又左の記事を讀め是れ實に聯合艦隊司令長官伊東中將が大木營に向つて發したる公報の末文なり 終に臨んで特に宣報すへきは士官下士は言を俟たず水兵火夫其他從僕に至る迄滿面喜色を帯び彈丸亂下鉄板裂け血雨降り骨摧け肉飛びの場合に際するも神色自若として活潑靜肅に各其戦陣の職分を盡せし一事なり而して此事に關しては各艦長の言ふ所殆ど符節を台するか如し眞に愉快に不堪也 斯くの如き絶快絶壯の有様は獨り之を海軍にのみ見るにわらずして陸軍兵亦決して之に譲らず陸軍兵が平壤を一晝夜に陥落したるか如き其作戦々略宜しきを得たるに依る事は勿論なれども兵士の勇壯猛烈死を見ること歸するか如く血を見ること水の如く屍を見ること石の如く且つ我兵の死状を見ては反つて勇氣を百倍し勇

進猛進奮戰激闘會て慘狀を目撃して氣を挫くか如き憾  
 卒ならざるに由ること云ふまでもなし或は一隊多く斃  
 れて僅少の殘兵となり將校斃れて指揮官なきに至るも  
 會て挫折の色なく愈勇奮するが如き實に吾人をして驚  
 愕感歎せしめざるなし其勇其功將校に譲らんや  
 嗚呼此驍勇にして勳功ある兵士他日凱旋の日は其功勞  
 明に而して一々大に賞せらるゝは勿論なれども吾人  
 は其驍勇と勳功とは決して他の將校に譲らざる名譽の  
 陶きを賞揚し輝敬せざるべからず願くは一々其戰況と  
 功勞とを記さんことを欲するものなり

一兵敵壘を抜く

元山枝隊の平壤攻撃中我一兵卒あり敵の砲壘高き四間  
 許りなるを攀ち登り敵軍の砲聲雨の如きを冒し首尾よ  
 く我大隊旗を其壘上に突つ立てたり其駆動の猛烈にし  
 て機敏なる全軍爲めに喊聲を放ちて稱賛せり是れ一兵  
 敵壘を抜くと云ふも過言にわらざるべし吾人は其兵士  
 の姓名を聞くを得ざるを憾む異日聞得て次編の列傳中  
 に掲げんとす

屯田兵奮て出兵の令を待つ

日清韓三國交渉談判の起るや我が北海道屯田兵司令部  
 に於ては早くも出兵の準備を整へ尋て開戦の快報に接  
 するや各屯田兵は欣然として去る十年西南の役に於て  
 すら出兵を命せられたる事なれば今回は必ず征清軍に  
 加へられんこと疑あるべからずとて半年よりは一層稼  
 業を勵みて秋穫を取り急ぎ其奉公の精神平素練習する  
 處の腕前を内外に發揚する正に此秋なりとて大に勇氣  
 を鼓舞し恰も大旱の雲霓を待つが如く熱心に出兵の令  
 を待ち居たれども今日に至る迄未だ何等の令達もなき  
 より何れも腕を扼して南天を望み憤慨して時の來るを  
 待ち居れりと云ふ

愛親社員の義勇

世に政治社交團練なるもの多し而して多く皆忠君愛國  
 の情より出でざるものなし然れども就中愛知縣名古屋  
 市に設置せらるゝ愛親社の如きは其最も感すべく且つ  
 最も敬重し信用せらるゝ一大團練にして吾人は從來屢  
 々同團練の實況を見聞し更に今回に於ける日清事件に

付て其勇壯忠愛なる殆ど全縣一心怡も忠勇義烈なる一  
 人の丈夫を見るか如き感あるに驚きたり  
 抑も同社の社長は有名なる同市の庄林一正氏なり氏は  
 夙に本邦政治海に奔走し廣く世の俊傑と結ひ大に爲す  
 所あらんとし茲に愛國厚親社なるものを名古屋に設立  
 せるや同感有志續々入社し社員之尾三勢渡加越能信等  
 に通して殆ど三万有餘人の最多數に至り其勢力の壯大  
 なる天下の團練中多く其比を見ず而して社員皆千里を  
 遠しとせずして屢々名古屋に會す其忠君愛國の情實に  
 盛なるものありし政社法出るに及んで一時解散の口ひ  
 べからざるものあり是に於て愛國厚親社の名を消滅す  
 るに至りたりと雖も精神的團練は即ち變解する所なか  
 りし也然れども當時政海益繁雜を來し各種の團練日に  
 起り或は異名同主義地の利に由て分れ或は節を變する  
 者あり紛々として歸する處を知らず此時に當りて尾三  
 濃等の前社員にして節操堅固忠愛義烈なるもの擧て其  
 志を通し再び庄林氏を推して社長となし舊團練を離  
 回して大に運動する所あらんとす庄林氏亦純乎たる忠

愛親社の一丈夫なり世の勢を察して自ら起たざるへか  
 らざるを見断然其有志を叫合して再び一社を設立した  
 り是れ即ち今存する所の愛親社なりとす愛親社の起原  
 既に斯の如し故に別に社員に於る者之節中の節を抜き  
 操中の操を撰びたる精兵に等しく前團練に比すれば員  
 數少しと雖も其精神の壯堅にして且君と國とに奉する  
 の熱心なる其團練の鞏固なる殆ど動すべからず今や社  
 員實に七千有餘に及び毎月十五日を以て例會となし毎  
 會々する者數百に下らず而して其會する者遠きは二十  
 里三十里に及び鐵道の便ある者を除くの外は皆山に川  
 に晝夜兼行して至る必ず定時間を過ぎず又其談論説議  
 適切痛快數時間にして直に散し去る其勇壯敏活人をし  
 て慨歎に堪ざらしむ而して社員意向の歸する所常に曰  
 く「政海の運動固より必要にして我主旨専ら之に在り  
 と雖も若し一朝軍國兵事の起るに際せば一死以て皇恩  
 に報せざるべからず」と社長亦斯心を以て常に之を導  
 く故に勇壯義烈は更に一層を團練の上に現はせり今回  
 日清軍事起るや果して其行跡を見たり茲に社長庄林

氏は大井憲太郎、遠藤秀景、遠山滿等の諸氏と共に各其社員若干を率て渡韓し大に爲す所あらんとしたるも不幸にして許可を得ず次で義勇團に關する大詔下り其志を果す能はず退て社勢を養て時機の至るを俟てり去れども社員の血魂は勃々として迷り異口同音「既に大詔ありて從軍し能はず雖も國難を見て空しく坐談すべきにあらす此時に臨んで皇恩に報せずんば我社の素養果して何の益する所あらんせめては萬一の時に至て内地沿岸一方の警衛にも充てられんことを請ふべし」と其勢容易に制すべからず社長と大詔の御趣の深さを説き優渥なる神誨に服するの大義を示し偏に時機の至るを待たしめんとせしも社員の決意動すべからざるを察し且つ其旨趣の大詔に背かざるものあるを以て遂に去九月下旬之を其筋に出願せり而して同社が一朝其時機に際せば二晝夜にして充分の戦闘力を有する勇壯二千餘名を集合し得ると云ふ

堅全にして勇壯剛毅なる實に爲するに足るべきを見るなり荷も一の團練にして心を國家に盡さんとするもの豈斯の如くならずして可ならんや

流石は野津中將の母堂

野津中將の母堂は東京芝公園地に住居せられ中將の第五師團長として廣島に駐在後は毎年一回位對面せらるる程なるが今回中將の遠征に就ては折しも母堂には微恙に罹り居られしより中將も深く其老躰を氣遣ひながら出張されしならんとて下野新聞社員周藤某氏が渡韓に際し野津中將を訪ひしに母堂には大に喜ばれ氏を顧みて「中將が出張の頃は病氣も輕からざりしが今は見らるゝ通り全快したれば足下中將に違はれなば決して此身を案する勿れ又少しも家事を思はず國家の爲に力を盡せよと傳へ賜はれ其餘に云ふ可き事もなし」といど眞摯に答へられしかば周藤氏も大に感入り「お辭の趣委細御傳言仕るべし」と云ひて立ち別れしどなん

流石は武將の母たるに愧ずといふべし

追分け節を謳うて舟を漕ぐ

奥山少佐の一隊大同江畔に至る韓人の平壤を逃れ去らんとするもの清兵より乱射せられ號叫救ひを求む我兵直ちに舟を漕ぎ寄せ韓人等を助けんとす彼岸の敵營より發射する彈丸益々激し我兵悠然として小舟に掉し遂に韓人の男女十數人を助け救ひ追分け節を高らかに謳ひつゝ彈丸雨の中を無事に漕ぎ歸りたりと膽勇見るべし

虎の族は即ち虎

平壤の役に花々しく勇戦して敵の砲壘を碎き名譽の戦死を遂げたる故陸軍砲兵第五聯隊中隊長山本忠知君の傳は既に記したり今君の遺族に於ける逸事を記さん君が平素部下を愛し部下の士卒亦君を敬愛すること父母の如く一隊の間常に和氣充ちて能く其本分を盡し得たるも素養のなくて叶はぬ事なり君の嚴父君藤藏翁は今年七十二歳の高齡に達すれども氣力尚は旺にして昔の武氣少しも衰へず今回君が出陣するに當り翁は宇治川先陣の事を引いて「他人の爲めに後れを取ること勿れ」と勵まし父君が義に家に傳はる重寶の古刀を軍

刀に仕立て居りしを取り寄せ翁親ら鞘を拂て試みに一振り二振りリウ／＼と振り莞爾として笑を含み「是ならは敵兵を斬る幾千に及ぶも氣遣なし汝潔く此の名刀を以て敵軍を斬り勝て戦若し利あらずんば奮進して戦死すべし一歩も後に退く勿れ今我れ改めて斯の軍刀を汝に授くるぞ」とて件の刀を渡しければ君も深く嚴君の教を畏み「父上の仰せ一々肺腑に銘じたり軍人としての一生の榮譽必ず花々しく働きて御教訓に背かず」と言葉涼しく答へければ藤藏翁頷りに首肯さ「其れにて我も安心なり」と其れより別れの盃し笑て君の出陣を送りたりと聞くも勇しき話なるが、これなん父子が最後の別れなり又君の夫人春子につき感すべき話あり春子の父は舊會津藩士遠藤嘉内といひ春子の令兄は仙臺第七十七國立銀行頭取遠藤敬正氏なり春子は武門の家に生れ且曾て維新の前役に當り勇名を傳へられたる會津藩中の女性なれば幼少の時より女ながらも武術の嗜深く明治十年西南の役に當り春子は女隊を編成し從軍を願出たれども幾もなく亂平きて出陣に及ば

ざりしに當時東京府知事之春子に名譽ある賞詞を與へたり

第五大區五小區北宮坂町三番地

嘉内娘 遠藤ハル子

昨明治十年鹿兒島縣下賊徒征討の節從軍願出之趣陸軍省へ開申致置候處當時賊勢漸次退縮不日平定に及候間何等の沙汰に不及候得共國家有事の際身命を抛ち報効致度段奇特の事に候旨同省より達相成候條此旨可相心得事

明治十一年六月十八日 東京府知事 楠本正隆印

嗚呼春子の義勇感するに餘りありと云ふべし春子の忠知君に嫁したるは去る廿年の事なりしが平素意氣相投じ家内和睦して知る人之を稱せざるなし這回君が戦死の報至るや野津師團長大島旅團長の夫人を始めとして在廣島各將校の妻女は吊慰の爲め春子を訪しに春子は流石平素の氣象に違はず「平生の行軍すら門を出れば良人の歸るを期せず況して今度の戦争には初めより生きて歸るを待たず戦死は軍人の名譽と存すれども唯だ

何卒彼の地へ赴き給ひし上は抜群の勳功を顯はし給はんこそ望ましけれ」とて左の一首を口吟さみて夫を送りたりとなん、めでたき妻女の心と云ふべし

よしや君屍は野邊にさらすとも

八島の里にのこす日の旗

烈女の鑑

富山縣上水内郡南小川村に齡既に六十七春を經たる寡婦有り其名を宮本コンと云ふ性得尊王の志厚く苟くも事の皇室に涉ること有れば我を忘れて談すること殆んど狂せるが如し十年西南の役男歌吉の官軍に役する有りコン之に書を贈つて曰く「我皇の爲めに敵將の首を得て深く戦死せよ之れ愚母の本懐なり」と歌吉阿母の教書に激勵せらるゝこと厚く遂に田原坂に奮戦して名譽の死を遂げたり爾來コンと官の扶助料に衣食して今日に至りしに今回の事起るやコン性事を追想して感懐に堪へず即ち其細々の生計費を節して此頃金三四を恤兵部へ献納したりと云ふコンの如きは實に日本女性の好模範と云ふべし

天皇皇后兩陛下より平壤を乗取たる軍隊へ御嘉賞を賜りし其電報を拜せしめざりしは誠に残念にこそ」と答へしには人々覺ゆる鼻酸らせしとぞ又春子は夫出軍の後野津師團長の宅に於て他の將校の妻女等と共に看護法翻帶學等を修め居たる事なりしが君戦死の報達し其葬儀を了るや春子は「國民の分として徒らに恩給に浴し閑居するは恐れ多し」とて嚴君藤藏翁とも談合し篤志看護婦を出願し廣島に於て専ら病兵の救護に盡力し居れりと云ふ眞に女丈夫と云ふべし君に三子あり金代、仙子、宮子といふ三子は毎日數回忠知氏の靈前に坐し氏が平生好んで三子をして誦せしめ居たる君か代、弘安四年の役、今度此度國の爲め、の唱歌を唱ふる、聞くも殊勝の至りなり

軍人の妻和歌を詠じて夫を勵ます

愛知縣名古屋市富士塚町の邊りに住む第三師團一等軍吏某氏は曩きに同師團と共に渡韓の道に上りしが其際氏の妻女之良人に向ひて曰ふやう「若し萬一の事もあらば家事は憚にて營むべければ餘事に心を殘さずして

三宅海軍大軍醫の未亡人

大孤山沖の海戦に戦没したる大軍醫三宅貞造君の未亡人は本年僅に廿一歳なるが十月六日吳港水交社に於て夫貞造始め石塚大主計、村越少軍醫の三氏葬儀の際縁の黒髪をゴソと剃り毀ち之を良人の柩内に納め法衣を着けて會葬したりとなん其けなげさ聞くさへ涙の物語りなり

軍人の父愛女を看護婦となす

岩手縣東磐手郡薄衣村の齋藤時保といへる最年六十と歳の老翁なるが氏は男女數名の子ありて何れも教育に心を用ひ今は夫れくの職に就きて他郷に在る中に四男郡太氏は第二師團輜重兵大尉五男謙吉氏(三十三)は陸軍後備下士にて近來家には謙吉夫婦及び二人の孫あるのみ翁は昨春來中風症に罹り起居も意の如くならざるにぞ謙吉夫婦は傍らに在りて専ら奉養を怠らざりし處氏も亦今回召集に應じ跡には妻女一人のみとなりたり爰に末女イヨ子(二十)は夙に東京なる高等佛私女學校の教師なりしが兄の從軍を聞き扱て父上も萬事不都合

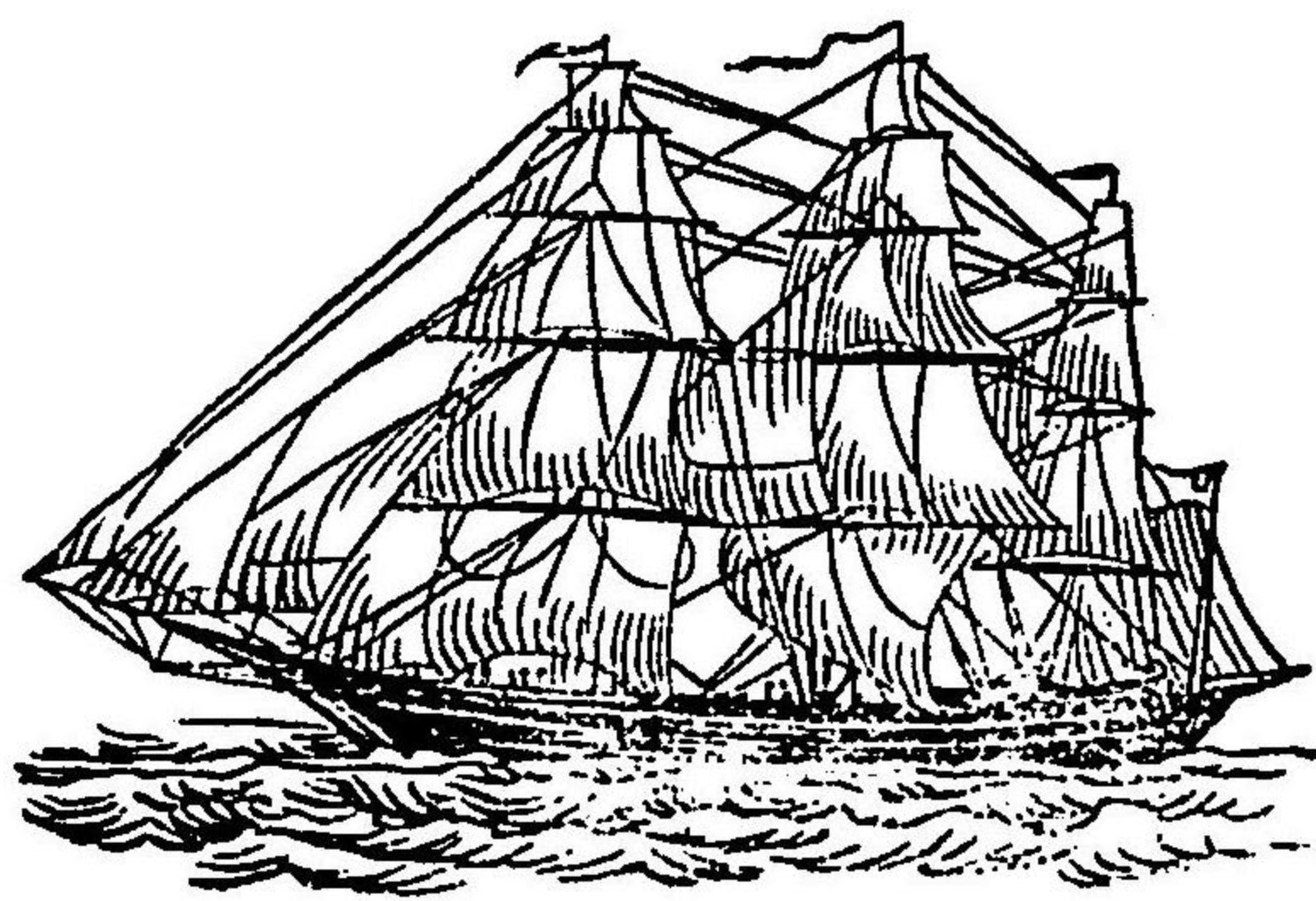


ならん今よりは家に歸りて家兄に代り孝養を盡さんとて先頃態々歸郷せしに父翁は元來人に勝れし熱心なる愛國家なれば其身の不自由をも更に意とせず「明日をも知れぬ老の身は如何様になるとも苦しからず汝我を看護せんどの心ならば進んで看護婦の募りに應じ國家の干城たる軍人の病氣負傷を介抱することを現今の急務なれ」といひ厳格に云渡せしかは折しも傍らに居合せたる人「其御辞もさる事ながら國家の爲めには既に大尉殿(郡太氏を指す)も出陣せられ尙ほ謙吉氏にも従事せられし事なれば女子一人の御身の介抱をなさしめられては如何に哉」と諫めしかを翁は中々聞き入れず「今や軍人諸氏は身命を擲つて國家の爲めに盡す折柄安閑として我子の介抱受け居らるべき死して惜からぬ老人に心を止めず疾く急げ」との嚴しき辭にイヨ子も父の命を領して「然らば仰せに従はん」と匆々行李を整へつゝ仙臺なる看護婦學校へ入學の手續に及びしと云ふ孝順共に天晴の一家族世間稀有の美談なるべし

栃木縣下都賀郡皆川村字大皆川平民農寺内喜十氏は豫備軍籍に在り其妻は去九月出産して男子を擧げ尙ほ産室に臥し居りしに間もなく召集の命ありて喜十氏は出發する事となりしが此家元來外に親戚とてなれば氏は妻の未だ充分肥立ちもせぬ身軀なれば我が出發後か心を悩ませしが併し國家の大事には替へ難しと思ひ切つて妻に向ひ「其方々知つての通り今度の戦は日本同士の事とは違ひ支那といふ大國と時れの勝負をする事なれば中々跡の難儀など見返つてゐる暇もない是れから己れは出て行くが戦は時の運何時何處で死ぬるか知れぬが武者の習ひ若し其内に活計にても困つたら何處の誰れに縁附ても己には少しも故障はないが唯た呉れく頼んで置くに假令其方が何うなつても何うぞ其忤丈けは是非人にして育て、呉れよ」と云ひて懇々と頼みければ妻は寢床の上より顔を揚げ「夫りやア吾夫のいふ迄もなく私等が様な百姓に迄迷惑を掛けるも皆んな唐人のする事面の憎は彼の唐人だから吾夫が軍

に出てゐつたら唐人の大將の李鴻章とやらいふ奴の首を取つて立派な手柄をして下され近所の人達の話しにも今度の戦は大分長さうだといふ事故若しや吾夫が彼地で死んだら私はどこまでも後家を立て此坊主をば大きくして吾夫に負けぬ丈夫な兵隊に仕立て上げ何時しか屹度敵討に出して遣るから必らず跡を案ぶ様心丈夫に行て下され」と其いふ事こそ機訥なれ其志し凛烈たる妻の辭に喜十氏も大さに安心し氣も勇み「其方が左様いふ心なら己れも一倍氣が強く存分の働きも出来る、そんなら無事であるて呉れよ」といふ一言を名残りて其儘出發したりといふ實に健氣なる女性と云ふべし

征清 日本軍人義勇傳終



明治廿七年十月三十日印刷

明治廿七年十一月廿八日發行



# 富岳館編輯部編纂

大阪市南區東清水町六十五番屋敷  
寄留

編輯主任

田中重策

大阪市東區內本町橋詰町六十八番屋敷  
周擴社

印刷者 前田菊松

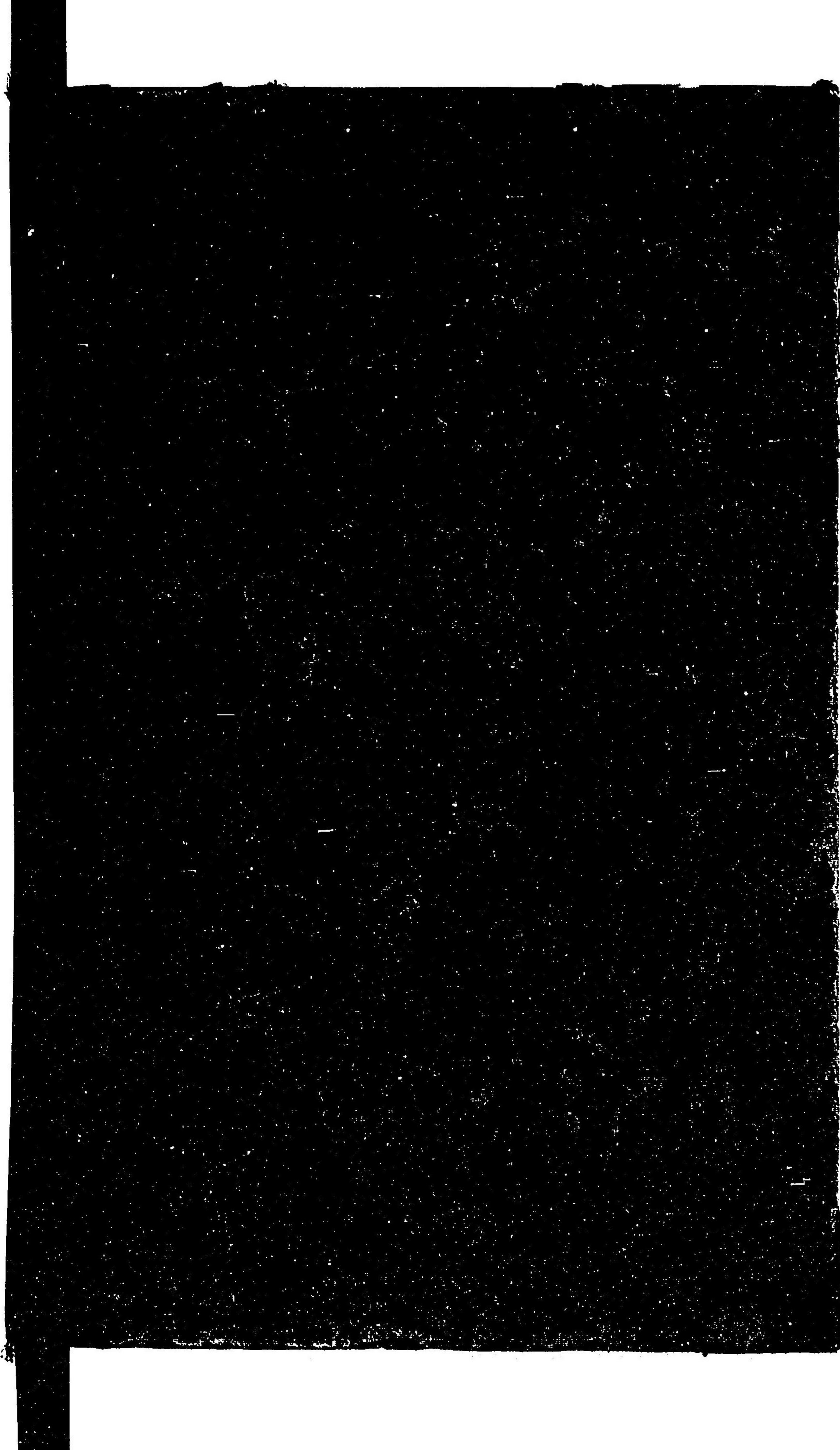
大阪市南區東清水町六十五番屋敷

發行所 富岳館



版權所有

9  
275



Ⓜ

002673-000-2

9-275

日本軍人義勇伝(征清壯絶)

富岳館編集部

M27

ACB-6109



